

木崎愛吉述

賴山陽と其母



賴山陽先生八十年記念出版

木崎愛吉述

賴山陽と其母



賴山陽先生八十年記念出版

289.1
R15K2



示
道
學
堂
藏



212302

蝦山陽曾像 (三樹堂)

躬偃仰一官而心
商百代之失得非
仙已過董而憂人
家國文章滿腹不
濟之儀曲大直尋別
野為噫之何拍注法
男兒乎辨也烏知是
公此迂拙者之時歟

大正六年三月十日
大正六年三月十日
大正六年三月十日



(大正 森下博氏藏)

289.1

289.1
R15K2



国会図書館

賴山陽肖像 (賴三樹贊)

躬偃仰一室而心
潤百代之失得非
他已瑤董而憂人
家國文章滿腹不
濟子饒曲尺直尋別
所立為噫是何物出
男兒乎推也烏知無
念此迂拙者之時哉

石山人本像自贊性極為清淨余曰乞為不肖後孫繼嗣

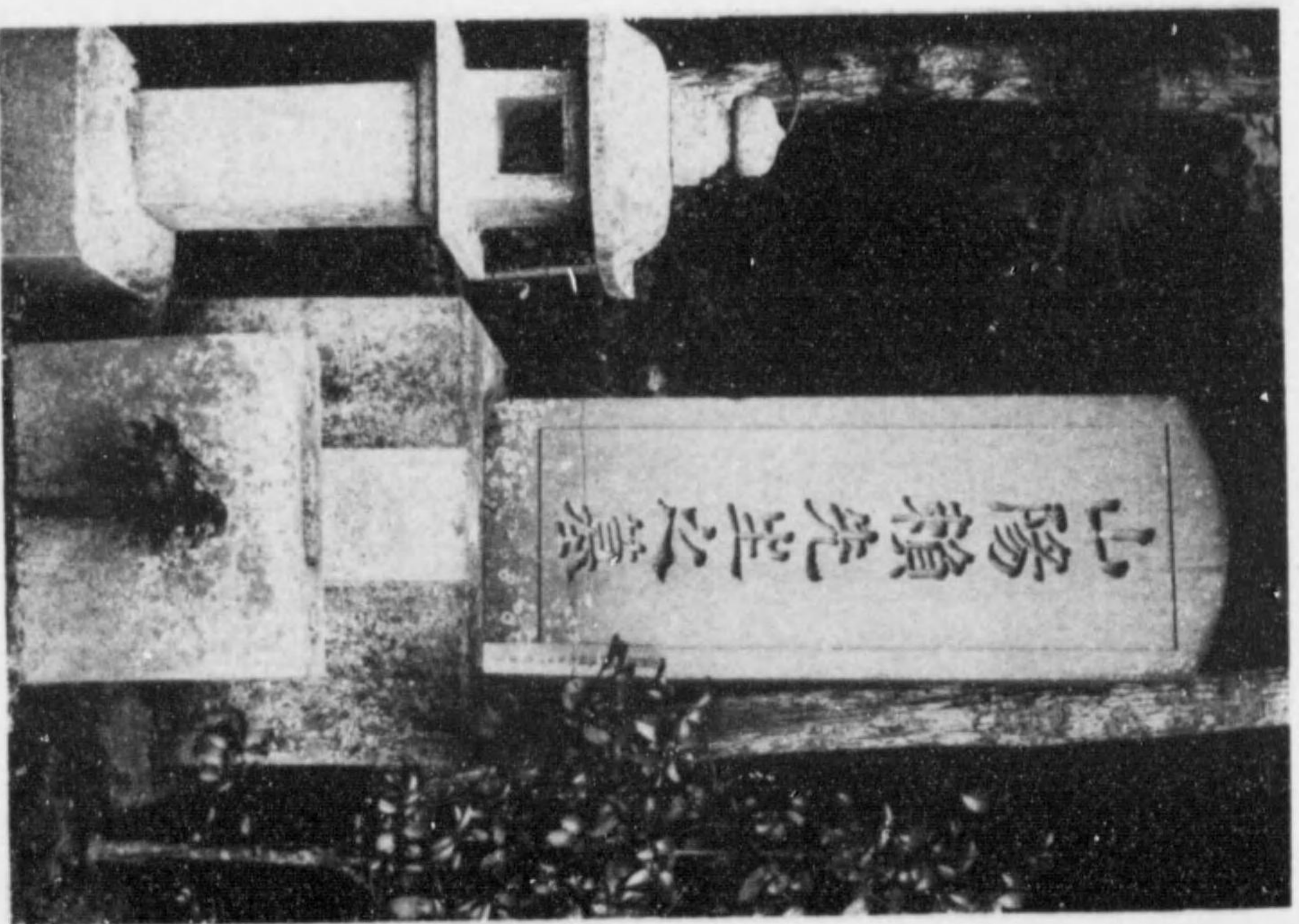


(大阪 森下博氏藏)

石山人本像

山陽還髮塚

(京都光林寺墓地)



山陽墓

(京都東山長樂寺後邸)

山陽七歳の試筆

(春水の表題あり)



(竹原 頼直氏藏)

原嶋 頼 綱 大 郎 氏 藏



香 水 の 父 享 翁 が 畿 嶺 山 岡 の 原 に
書 写 し「忠 孝」の 守 り 紙

春水の父享翁が愛孫山陽の爲に
書興へし「思孝」の守り紙



(廣嶋 頼綱次郎氏藏)



(廣嶋 賴 彌次郎氏 像)

廣嶋 賴 彌次郎氏 像

梅關父飯岡義齋(孫田德安)肖像



(廣嶋 賴 彌次郎氏藏)

(竹原 賴俊東兵衛)

春夜に月影を照らす
 遠き山に雲霧を巻く
 花の散るを惜しむ
 鳥の啼くを聞きし
 水の流れを待たむ
 舟の来りては
 酒を酌み交はさむ
 月影を照らす
 遠き山に雲霧を巻く
 花の散るを惜しむ
 鳥の啼くを聞きし
 水の流れを待たむ
 舟の来りては
 酒を酌み交はさむ

(拾遺二十箇の作、詩に春水集)

新編集、新編旅行記の一冊

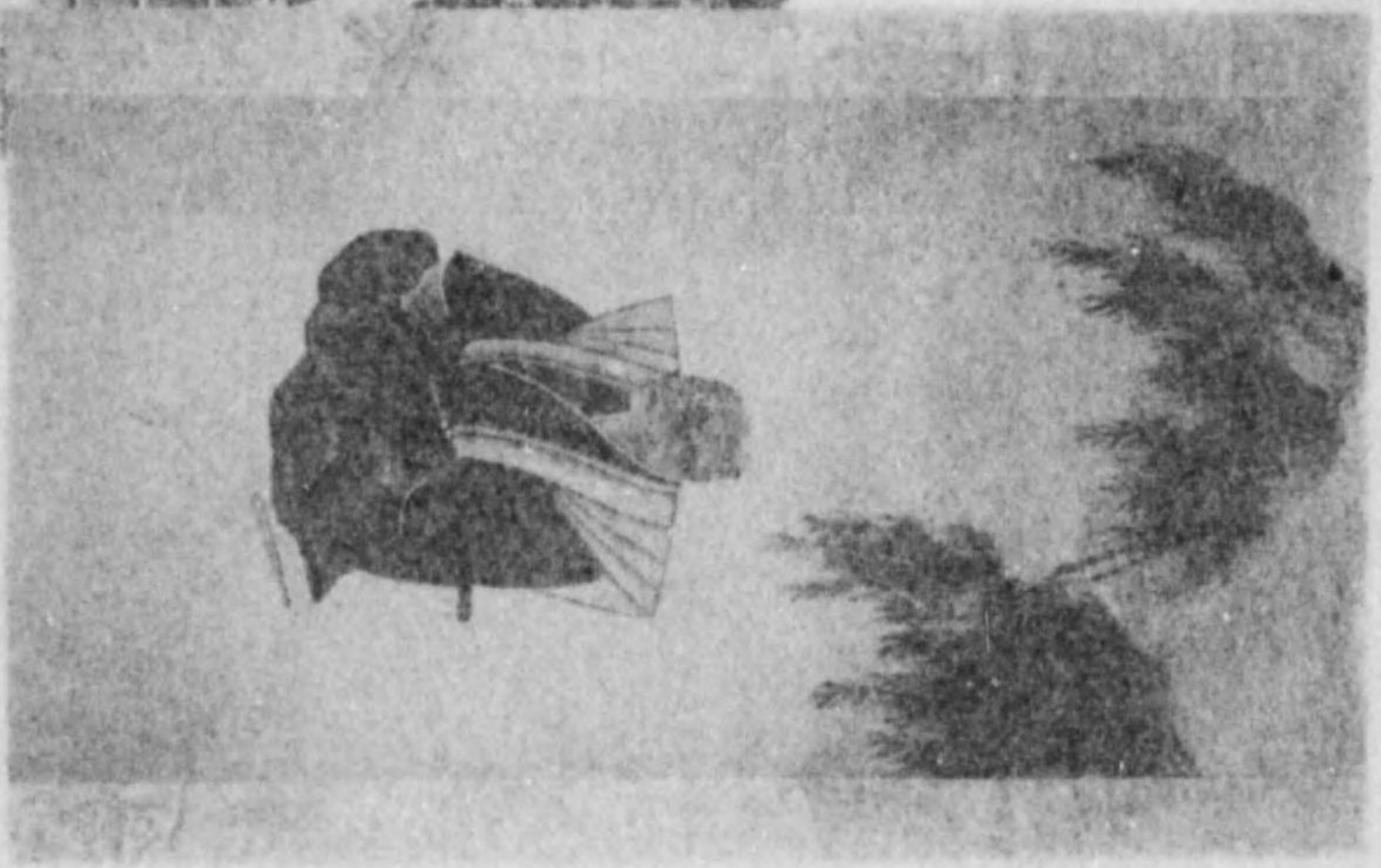
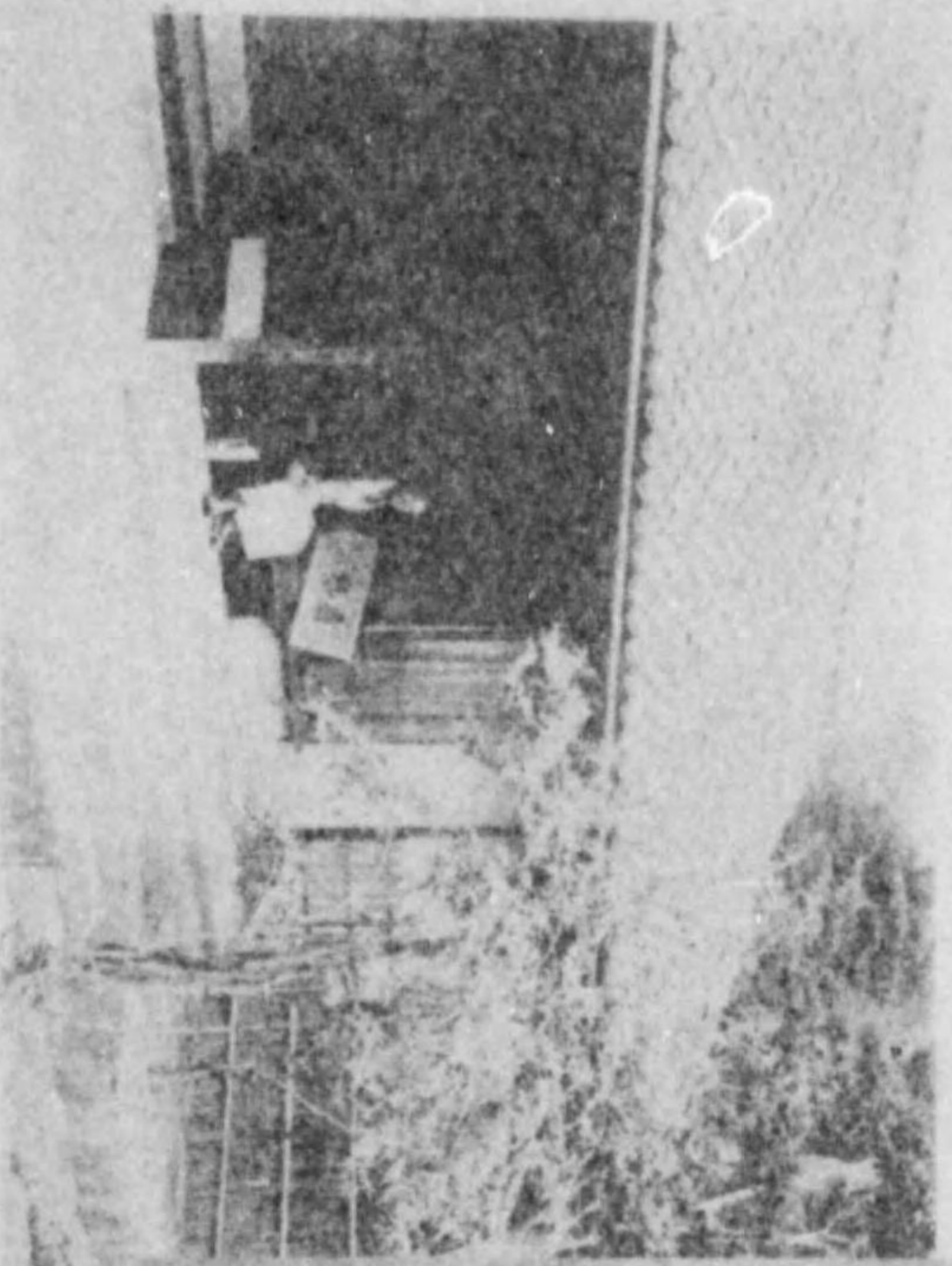
(竹原 頼俊直氏藏)

Handwritten Japanese text in cursive style, likely a poem or travel diary entry, written on a piece of paper pasted onto the left page. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines, with some characters appearing to be in a different script or dialect. The ink is dark and the paper shows some signs of age and wear.

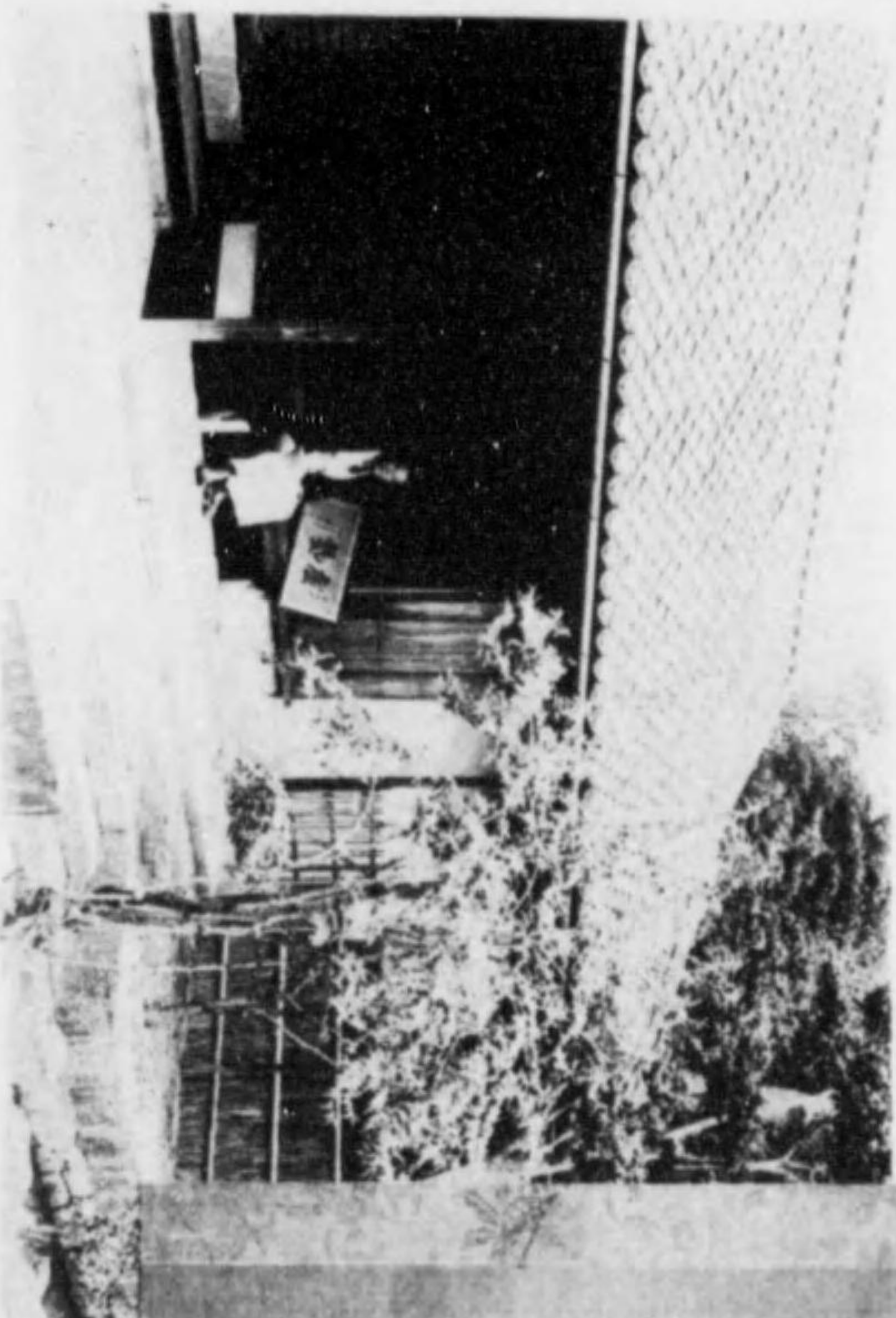
(梅園二十歳の作、詩は春水筆)

梅園筆、新婚旅行記の一節

原 景
 (山形の風景)
 は奥の間に
 春了)



菅茶川管景
 (備後神邊 菅野賢兵衛)



山陽の書齋
は奥の間に
存す)

廉 塾



菅茶山肖像
(備後神邊菅野賢氏藏)

目次

前編

一	山陽傳の材料……………	一
二	生れは大阪江戸堀……………	四
三	大阪にて生ひ立……………	九
四	病中の繪慰み……………	三
五	立志論……………	一五
六	史學三昧……………	一八
七	婚禮と出奔……………	三三
八	廢嫡と出產……………	三三
九	日本外史と山陽文稿……………	三六
一〇	茶山の塾頭……………	三五
一一	二度目の高飛び……………	一

目次

中編

二二	京儒者	三
二三	九州遊歴	七
二四	山陽と梅颯	八
二五	山紫水明處	四
二六	春秋侍遊	一〇〇
二七	外史の手ばなれ	一一
後編			
一八	十旬花月帖	三三
一九	外史の出現	二六
二〇	梅颯最後の東遊	三五
二一	山陽最後の歸省	一五
二二	文星墜つ	一六一
二三	回顧のかずく	一七四

附録

新婚旅行の記	一八一
梅颯女史	一八一

補遺

▲外史の起稿に就て	一九五
▲兩替町の家	一九六
▲山紫水明の意味	一九七
▲入京早々の氣箴	一九八
▲三樹命名の由來	二〇一
▲梅の歌	二〇三
▲新夫婦の教訓	二〇四
▲母のお慰みに	二〇五
▲義齋と梅颯	二〇八
▲梅颯夫人の終焉	二二四

口 繪

- 一 賴山陽肖像 賴三樹贊
- 二 賴山陽墓及遺髮塚
- 三 賴山陽七歳書
- 四 賴山陽祖父亨翁書、忠孝守紙
- 五 梅颯父飯岡義齋肖像
- 六 梅颯新婚旅行記稿本 春水合作
- 七 菅茶山肖像及廉塾 賴山陽書齋

賴山陽と其母

木崎愛吉述

前 編

(一) 山陽傳の材料

昔から名高い學者も澤山ある中で、一番廣くその名を知られた學者は、賴山陽先生の外にはない、賴山陽といへば誰れにでも直ぐその名が分る。日本外史の著者として、勤王論の魁をした學者として、皆よくその名を知つて居る、ホンの親しい友達のやうな氣がする。それでその名高い山陽は何處の人ですかと聞く、大抵の人は廣嶋の人だと答へる、廣嶋ではない、大阪生れの人だといふことは一寸耳新らしいやうに感じる。山陽は藝州の人には違ひないのであるが、實際その産聲を揚げたのは大阪である。この大阪生れの山陽、著者も大阪生れであり、何だか人一倍山陽とは心易いやうな、なつかしいやうな氣がするのみならず

學問——と申してはをこがましいが、先師の五十川訥堂先生は山陽から系統を引くと孫弟子に當る先生であつたから、山陽先生をアカの他人とは思へず、吾が佛尊して、小供の時分から著者は山陽の信者であつた。

それで今歳は山陽の歿後恰も八十年になるので、是非ともこの八十年記念といふことを我が大阪でやつて見たいと思ひ立ち、年來心がけて居つた山陽の傳記をしらべ、あちらこちらでその講演をやりつゝある。處でその材料は從來世に有りふれたのとは違つて、著者の手に入つたのは、山陽先生の母梅颯夫人の手に書かれた日記——梅颯が山陽の父春水先生と婚禮をした時分から、天保十四年——山陽の歿後十年餘りも長生をした梅颯夫人が終生の大事業たる日記の原文に據り、これを根本材料として組立てたのであるから、話はまづいが、事實の精確と、これまで傳はつて居なかつた逸事談とは、多少諸君のお耳を汚すに足るものと自信して居るから、ことしの八十年記念に聊か山陽先生の昔を偲ぶたよりにもと、この傳記を述べることになつたのである。

山陽傳の材料が重にその母梅颯夫人の日記から出たのでありますから、お話

しのもやうは獨り山陽その人のみならず、一は梅颯夫人の別傳とも申すことが出来るのであつて、名高い山陽先生と、今一つは餘り世に知られぬこの梅颯夫人——良妻賢母の標本とも申すべき梅颯のおもかげも、おのづとその間に見出さるゝのであります、我邦には實は婦人の傳記といふものは關げて居るのであつて、一面これによりてその缺點を補ふことが出来ましたならば、著者の喜びは此の上もないのである、おまけにこの梅颯夫人もチヤキ／＼の大阪人であるから、一層したしく、ゆかしい心持がするのである。

今一つ附け加へて置きたいのは、この山陽傳は梅颯夫人の日記の外、山陽彼れ自身の手紙が材料の大部分を占めて居る、山陽の手紙の文は實に天下一品との定評があり、眞率、洒落、氣取らず、飾らず、天真爛漫に書き流した上に、その又手跡のうまいことは、今日柄屏風一雙で幾千金と申す山陽の書よりも、却つて奔放自在な此の手紙の方が、私共には寧ろ面白いと思ふのであつて、其手紙の中には自傳の好材料とも申すべき山陽の面目がよく窺はれるのであるから、梅颯日記の外に山陽自身の手紙が、この傳記物語りの材料の重要分子となつて居るといふこ

とは、前以て特に申上げて置く。

(一) 生れは大阪江戸堀

山陽の父春水先生は、藝州竹原の人で、その先祖は總兵衛(名は正茂、道圓と號す)といひ、備後三原の城主小早川家に仕へ、後三原の西に當る頼兼村に移り、更に竹原に移住した。頼氏と稱するのは、即ち頼兼の頼の字を取つたので、普通には羅井とも書いて居る。總兵衛の子彌七郎、彌七郎の子彌右衛門の長男を又十郎(名は惟清、亨翁と號す)といひ、この人に男の兒ばかり五人あつた。長男が即ち春水(名は惟寛、又惟完、字は千秋、又伯栗、通稱彌太郎)、三男が春風(名は惟疆、字は千齡、通稱松三郎)、四男が杏坪(名は惟柔、字は千祺、通稱萬四郎、別に春草と號す)であつて、二男の岩七と五男の富三郎とは夭死をした。この立派な三人兄弟の總領に生れた春水は、竹原の神童と呼ばれ、父母、殊に母の中子(道工氏)の家庭教育を深く受け、十九歳(明和元年)の時に病氣して、轉地療養かたぐい大阪へ上つたところが、その頃大阪には趙陶齋といふ名高い書家が、長崎から上つて居つて、丁度泉州堺へ往て

居つた時分に、春水は初對面して、非常の世話になり、忘年の交りを得たのだと、今一つは陶齋老人を引立てた、大阪朝の富豪吹田屋六兵衛、森田直政、字は士徳、抱眞と號すの世話になり、田舎出の春水は、此の上もない頼りを得たのである。それで一旦歸郷して、二十一歳の時改めて大阪に遊學したところが、その頃の大阪は實に文學界の中心とも申すべき學問上の黄金時代であつて、先づ船場の尼ヶ崎町(今の今橋四丁目)には、中井先生の懷徳堂といふ大阪學問所の世盛りであり、これに對して片山北海先生を盟主と仰いだ混沌社といふ文人詞客の大きな團體があり、この二大勢力を外にしては、非徂徠學で鳴らした蟹養齋、那波魯堂の弟の奥田尙齋、元繼で名の知れた、伊豫の川ノ江から出て、後に江戸の昌平坂學問所へ徵された寛政三博士の一人たる尾藤二洲、淺見綱齋の學統を承けて一代の醇儒と呼ばれた篠田德安(飯岡義齋、後に伊勢の長嶋侯に聘せられた十時梅厓等の諸先生が、それく門戸を張つて居つた時代で、春水は非常に懷徳堂の中井竹山の引立てを受け、一面混沌社の諸名流と交際し、一番年少の身を以て、學問才名おさおさ先輩を凌ぐばかりであつた。伏見町、新天満町とあちらこちら宅がへをして、

安永二年春三月、江戸堀北通一丁目の濱側に家を構へて、青山社といふ家塾を開いたのは、二十八歳の時であつた。江戸堀川の流れを南に受け、日あたりのよい濱地に、いろ／＼な盆栽や藤の棚をこしらへて楽しんで居つたので、春水といふ號も、實はこの川の流れを楽しんだ記念であつた。

春水はかくの如く根城を大阪に据ゑ、度々竹原へ歸省し、安永八年の秋、森田士徳の跡を追うて、歌人江田楨夫(名は世恭、號は蘭臺、富田屋八郎右衛門)と同伴して、城崎へ入湯に出かけ、轟村の豪農細田周英の家に遊んだ。この家は久しく趙陶齋の滞在して居つた縁故があるからである。著者も先年この家を訪うて、陶齋春水、蘭臺の書いたものを澤山展覽した。さてその歸りに春水は天橋立へ廻りて、珍らしい石を拾うて戻つたが、その年の十一月に、春水は婚禮を済まして、いよいよ大阪を第二の故郷とすべく、永住の策を決したのである。

花嫁御は誰、立賣堀南裏町の儒者(表は醫業、飯岡義齋の娘しづ子さんといふ新造であつた)春水時に三十四歳、花嫁は十九歳、媒妁は懷徳堂の校長中井竹山先生といふので、當時評判の婚禮であつた。

合卷頌。贈頼千秋。

予爲千秋。价府下醇儒篠田(飯岡)義齋翁之長女。以巳亥十一月。成婚。故贈云。

翁之氷清。婿之玉潤。吾聞其語。今見其人。我何人也。爲締斯親。

卷乎未合。四外哄傳。卷乎既合。豈不以文。(箕陰集)

この婚禮の頌のことばが、又時の文人間に弘く流傳したもので、混沌社の盟主片山北海からも、

……千秋婚儀、誠に大慶に存ひ、先生御幹旋、事得遂、忝御事に奉存ひ、

十一月十七日

片山中藏

中井善太樓(大道寒溪氏藏)

この手紙を見ると、春水がその一身を以て懷徳堂派と、混沌社仲間との概となつて居つた事情もよく分るとおもふ。

天橋立で奇石を獲て歸つた春水は、こゝに目出度婚禮を済ませ、近所の詩友今井某(名は重憲、字は子源、通稱佐兵衛)といふ人からはお祝ひに炬燵を贈られた。

(二) 生れは大阪江戸堀

石と固く炬燵と暖かい新夫婦は、あけて安永九年の新玉の春を迎へ國元からは亭翁が杏坪をつれて上つて來たので、杏坪にそのまま江戸堀の留守を言ひ附けて、新夫婦はお父さんのお供をして新婚旅行を京の春に試みた(附録を見よ)。亭翁は和歌を好み、小澤蘆庵に久しく添削して貰つた縁故があるので、さしづめ蘆庵を訪づれた、加茂の酸菹すまきや醍醐の筍や、清貧に安んじたといふ蘆庵らしい御馳走で酒盛が始まる。

咲かゝる契りとならば藤花

蘆庵

松のみさをにならへどぞ思ふ

一首を花嫁に贈つた老歌人の情は何よりのもてなしである、「松のみさを」の梅颯の一生は早くすでに言ひ盡されてあつた。

未來の大文豪、わが頼山陽先生は、實に此くの如き圓滿和樂の家庭にその生を享け、江戸堀の宅に呱呱の聲を揚げ、玉のやうに産れ出たのは、即ちこの年(安永九年庚子)の冬十二月廿七日辛未、土、大みやう、いちたちよしといふ、大寒の入りの日であつた。二十八、九、大きよみそ三十日かで、曆は天明元年と改まつたから、年弱も年弱、押し

詰つての誕生であつた。

(三) 大阪にて生ひ立

子年の臘しほす月生れは、蘇東坡と同じだと風流がつた山陽も、今はたゞホヤ／＼の赤あかン坊。生るゝ孫が男ならば、久ひさ太郎と名のらせよと、國へ歸つた亭翁の言もあつたので、春水はうれしさの餘り、

不知吉夢是何祥。忽喜嚶々報弄璋。家君占斷熊羆兆。能爲預名久太郎。

預あらかじめ名なけられた久太郎の産衣は、義齋先生から祝はれた。

うまご久太郎、初生して、衣を贈りける、その衣の色黒かりけるに、

よみてつかはし侍る

久かたのあめのめぐみにならへよと

いろにいはひておくる産衣

天地玄黄の徳に配して、外祖父より贈られたる黒染のうぶ衣をきて、生れて二歳の久太郎は、天明元年閏五月朔大阪出立、春水、梅颯の兩親に抱きかゝられ、竹

原へ歸りてお祖父さんに初對面をしたところが、亨翁は大喜びで、小半紙に筆を走らし、「忠孝」の二字を書いて守り袋に納れさせた。一行は宮島見物をして、六月十五日に歸阪した。

春水の歸郷は、この冬本藩廣嶋侯淺野重辰公（しんあきら）の拔擢に預かり、學問所興隆に付御儒者に登用さるゝお目見得のためであつた。

天明二年四月朔、廣嶋を立ち、お暇をいたゞいて春水は同月十六日着阪、立賣堀に預け置かれた梅颯と山陽三歳母子は、春水と別船にて廣嶋へ趣き、春水は五月十五日懷徳堂で竹山先生の別杯に預かり、送序一篇を贈られて、六月九日廣嶋着、西研屋町に屋敷を構へた。山陽は二十一日夜着船、母梅颯の外、梅颯の母（來嶋氏）妹なは子、甥篠田鎮藏の五人伴れであつた。この年十一月十八日、山陽は髮置、宮参りを済ました。

山陽四歳の天明三年に、父春水は藩主の世子（齊賢公）が江戸霞關の上屋敷に居らるゝ方へ學問御指南の仰せを蒙り、山陽母子も八月に一旦歸阪して、立賣堀へ預けられ、春水は江戸へ下り、翌天明四年九年は外祖父の宅に、山陽は人となつ

たのである。

春水の江戸上番には、杏坪も同伴したが、ことし九月十六日、杏坪は單身歸藩の途すがら、大阪に立寄つて立賣堀を見舞ひ、頓て出立の間際に、山陽は叔父（おぢ）さんの名残りを惜んだといふ。

二十八日夕……西の海にと立出る、澹寧老人（義齋）はじめ名残を惜み玉ふ、家姪（山陽）ことし五歳なり、此たびにて離合四たびになりぬ、ことしは智慧つきぬれば、いと別れを惜むさまに見ぬたり（頼杏坪先生傳）

と杏坪の紀行に書いてあるも、いぢらしい氣がする。

天明五年夏、山陽六歳、春水の下番に伴はれて、母子とも廣嶋に歸り、西研屋町の屋敷に落着き、はじめて廣嶋の人となつたのである。春水はそれから年々江戸上番の身の忙はしく、山陽の教育は、母梅颯の手一つにその責めを負はされた。

梅颯は大阪の里方にありて、父義齋の嚴格なる家庭教育を受け、今や名儒の家に嫁ぎて、不在勝ちなる夫の留守を引かまへ、小兒の養育教訓、女の手一つに託されたからして、その日くゝの出來事は細大となく、何一つ書漏らさじと日記の記

録を怠らず、良人に對して一事忽かせにせぬ報告書に代へた日記が、年々歳々積りくくして等身の大冊となり、中にも愛兒の山陽に關する記録は、日記の大部分を占め、緻密微細なる書き振、鋭利周到なる世事の觀察、さすがに婦人特有の美性を發揮して、立派なる日記の模範を留めたのは、我邦の婦人界に稀有なる一大現象である。

梅颯の妹なほ子は、梅月と號し、後に尾藤二洲先生の夫人となつた。姉妹二人とも打揃うて名儒の家に嫁し、江戸と廣嶋、遠く東西に立別れつつも、梅花の薫りの高く儒林の間に聞わたのも、婦人界の名譽と言はねばならぬ。

(四) 病中の繪慰み

山陽は九歳の天明八年正月十六日、學問所始めの日に、初めて入學の身の上となつた。母の心配は山陽の不健康勝ちと、生來の肝癖の強い事とであつた。三月十二日、晝時分からフト足が痛いと言ひ出した、熱があるとは母も氣附かなかつたが、十三日からは熱の爲、ヒタと床に就いた。日々悪くなるばかり、瘧疾、水瀉、

蟲下りの揚げ匂に疱瘡が見ぬ初めて、いよく天然痘と診斷され、林何がし先生のお藥を貰ひ晝夜介抱に夜の目も寝なかつた母は、十八日の夜一寸まどろむと日記に書いてある如く、看護の手を盡した甲斐あつて、二十一日には山陽の顔の痘よほどかせるどあり、二十四日には竹原から仲父の春風が見舞に見ぬ。段々全快に近づきて四月五日の日記に、久太郎同様大便二度、さげん常の如し、食事せがむ終日繪かき遊ぶとある、藥を止めたのは二十八日であつたが、病中ながら疱瘡子の慰みは、繪をかいで遊んだのである。その五月十三日には父春水下番歸藩、六月十日には備後の神邊から春水の舊友菅茶山先生の訪問があつた。後に父子の間柄も音ならざる茶山先生に山陽が初對面したのは、この疱瘡上りの時分であつた。一旦快くなつて、六月十三日から又不快。七月三日、漸く快復した。この間の病床日誌は、梅颯日記の中でも最も心を籠めて筆を執つた迹がありく、と現はれてあつて、昔も今もかはらぬ家庭研究の好資料として見るべきものである。

梅颯は七月二十五日廣嶋出立、里歸りの爲、山陽をつれ茂入といふ老僕と下女

のお供で、八月二十七日海路着阪、立賣堀に父を見舞ひ頓てそこへに廣嶋へ歸つた。六歳で廣嶋の人となつた山陽は、九歳で又大阪を見物したのである。

十月二十四日、山陽は武術修行の爲、藩の用人築山嘉平(捧盈と號す)に入門して、長刀と居合の稽古を勵んだ。

山陽十歳の寛政元年、三月二十二日には、論語を修了する迄に學業は進んだものゝ、ドチヲかといへば學問所の六かしき課程よりは、繪本を讀んだり、武者繪をうつしたりする方が、論語を見るよりも好きであつた。夜分の温習は、母が針仕事の片手間を惜まなかつたが、動もすれば母の眼棲をぬすんで、繪本保元平治物語や、南朝の軍記を見たり寫したりするのに、疲れを忘れるのであつた。江戸に在る春水は、多病なる愛兒の慰みにもと、江戸名物の繪本を澤山に贈り越した。疱瘡上りに繪をかいいて、終日よく遊んだ山陽は、今や學問所通ひの學問よりも、武者繪本の修行が重もになつて來た。山陽は後に小供の時の事を思ひ出して、自身の歴史學の本領は、畢竟この武者繪本の修行から養はれたのであつたと、半分は自慢、自信の告白をやつて居る。今の教育家は、この一くだりを何と見る、教科

書よりも雜誌に耽る小學兒童を如何に觀る、雜誌流行の今日、山陽幼時の物語は、可否、一つの参考となるべきであらう。

春水は、この冬の不在中に、國泰寺裏門前の屋敷を拜領したから、翌寛政二年夏、歸藩の上、目出度く新邸に引移り、その秋、又江戸に下つた。山陽が十一歳で引移つたこの新邸は、今も當主頼古梅君のお住居である。

(五) 立志論

寛政三年、山陽十二歳の春、江戸の春水から、母上宛ての手紙が届いた梅颯つゝしんで封を切ると、

今度久太郎に實名を付け遣し候、そのもとのひざもとへよびよせひて、別紙(略)の通りを申付可被申、字は冠してつけ遣し可申、大阪へも申遣し可被申、は、裏の一字にては、名乗にしてよみ候へば、ノボルなり、ノボリではなし、此通り可被申付、禮服しかるべし

二月十三日

ね靜とのへ

夫 惟 完

二月十三日出の手紙は、三月朔日に届いた。頼襄の襄のりょうの名は、茲に命名された。頼久太郎は一人前の頼襄となつた。文章の處女作として、立志論といふ名文を作つた。山陽が少年時代の文章を自から集めた「山陽文稿」の幼時の作の中に出て居り、「男兒學ばずんば則ち已む學ば、當に群を超ゆべし」、「安んぞ奮發立志、以て國恩に答へ、以て父母を顯さるべけんや」、「吾れ生れて十有二年なり、父母の教を以て、古道を聞くを得しもの六年なり」と漢文など、氣憤を吐いてゐる。十二歳で道を聞いたことが六年だといへば、立派な神童である。けれども神童も痘瘡で寝込んだり、教科書をゑるすにして繪本ばかり慰みにしてゐたのみならず、六歳の時に庭へ下りて空を眺め、天の回轉する譯を母から聽いて泣いた山陽も、いつの間にもやら學問して、この立派な立志論を作つた頃には、易經をも卒業したとある。頼の若先生は、だんく、頭角を現はしかけた、異日、彼れは如何にして國恩に答へ、父母を顯はすべきであらうか。

寛政四年、十三歳の山陽は、又も立志の詩を作つた。

十有三春秋。遊者已如水。天地無始終。人生有生死。

安得類古人。千歲列青史。

一かどの口吻である。これらの詩句は時をり、國元からの手紙のはしに、江戸なる春水へ書き送られた。薩摩藩の御儒者赤崎海門が、或時そんな噂を柴野栗山へ話したところが、栗山は折角の才子を世間一通りの詩人に仕立つることを可あは惜しく思うて、朱子學派の史學者たるべく獎勵したといふので、寛政五年(山陽十四歳)の夏、海門が歸藩のついで、國元へ立寄りて小供への對面を春水から頼んだ。その口約を重んじて海門は廣嶋に足を停めたので、杏坪に連れられた山陽は、初めて西海の大儒に接して、江戸歸りのみやげ話を聽いた。柴野博士から此くくのお話がと物語られた一言の教へは、いかに武者繪本以來、歴史好きの山陽を奮躍させたであらうか。

氣ばかりあせりても、山陽の健康はこれに伴はぬ。その頃から又肝の高ぶること夥だしく、「狂氣のやうなる事物ごとに疑ひ深し」、「無言、氣重し」と梅颯の日記には書いてある。主治醫は、牛尾玄珠といふ先生に頼んだのである。十二月二十三日には、袖留の願を差出し、二十七日には袖留の祝ひを行ひ、山陽も早や半人

前の大人おとこになつた。一夏虫拂ひの時に、フト蘇東坡の史論に目が留まり、天地間此の如く喜ぶべきものあるか、と到頭日本の東坡を氣取るやうになつた。十六歳の寛政七年秋、豊前の儒者倉成龍渚に、海田市の宿屋で面會して、いろいろの學説を聴き、又備中の地理學者古川古松軒の來訪によりて、地理學の頭腦あたまを養うたなどは、この時代に特書すべき山陽が修學上の大事件であつた。ことし十二月二十一日、前髪取の上、あけて十七歳の寛政八年正月八日、元服の禮を濟ませ、同十五日、御禮の爲參城して、こゝにいよく一人前の頼山陽となつたが、相變らずの弱手。湯治が宜からうといふので、叔父の杏坪に連れられて、冬の初めに石州の有福温泉へ入湯に行つた。

(六) 史學三昧

これまでは藩の學問所へ通學して居つた山陽は、十八歳(寛政九年)の正月から江戸修行の準備として學問所へ寄宿することとなり、同月二十一日いよく江戸修行の願ひがお聞届けになり、三月九日まで寄宿して、十日に邸へ歸り、十二日

に出立した。母の梅麴は衣類の贈りものに添へて

はじめて東にゆく子を送りて

不二の根も近江のうみもおよびなき

きみどちゝとの恵むするな

靜子

父春水よりは驢けとして、方正學の文集一部と槍一筋どを貰つた。叔父杏坪は折から江戸勤番に當つたので、山陽は杏坪に伴はれ、中嶋禎二といふを共に江戸へ向ふ、海田市まで見送人が多かつた。

江戸道中の模様は、江戸へ着いてから郷里へ送り越した日記がある。どころどころに風景のスケッチも添へてあつた。その道筋のあらましを摘めば、

三月十二日、竹原泊り ▲十三日、照蓮寺へ募參 ▲十四日、滞在 ▲十五日、舟出 ▲十六日、忠海上陸、尾道着 ▲十七日、舟出、今津上陸、神邊泊り(菅茶山方) ▲十八日、矢掛泊り ▲十九日、岡山泊り、姫井桃源に面會 ▲二十日、三石泊り ▲二十一日、姫路泊り ▲二十二日、大久保泊り ▲二十三日、兵庫泊り、古跡遊覽 ▲二十四日、西宮を経て山崎街道を郡山に入る ▲二十五日、伏見を経て大津泊り ▲二十

六日、武佐泊り ▲二十七日、柏原泊り ▲二十八日、洲股泊り、關ヶ原を視る ▲二十九日、宮泊り、名古屋城、熱田神宮參詣 ▲三十日、赤坂泊り ▲四月朔、舞坂泊り ▲二日、袋井泊り ▲三日、滞在(大井河漲る) ▲四日、金谷泊り ▲五日、丸子泊り、富士山を望む ▲六日、蒲原泊り ▲七日、三嶋泊り ▲八日、小田原泊り ▲九日、藤澤泊り ▲十日、川崎泊り ▲十一日、江戸入り。

彌生の末の花の旅、東海道を一路、江戸の人となり、霞關上屋敷の西邸に行李を卸した。一種の修學旅行に得たる新智識は、ことごとく詩賦の上に流れ出たのである。

丁巳東遊六首 節一

五十三亭控海東。故關右折路岐通。湖南草樹春雲碧。畿内峰巒夕日紅。流峙依然此形勝。興亡已閱幾英雄。分明攻守千年勢。著論誰追賈誼風。

「著論誰か追ふ賈誼の風」山陽の印に紀事は司馬遷の史記を學び、論策は賈誼を學ぶといふ意味のがある。菅茶山の評に、山陽後來の大著述は早く已に此の一句に胚胎してあるとある、いかにも大抱負を示したものだといはねばならぬ。

この外、一谷を過ぎ源平の興亡を懷うて作つた長篇もあり、楠公の墳に謁した大作もあり、山陽詩鈔に載つてゐる詩も澤山に見ゆる。青年十八歳の山陽は、この旅行に於て遺憾なくその詩才、否史才を發揮したのである。

山陽は表修行としては、昌平坂學問所に入學したのであつたが、學問所の博士尾藤二洲はその叔母——母梅颯の妹梅月(直子)——の夫であつたからして、さしづめその官舎に落ついたのである。二洲は伊豫川ノ江の船持の家に生れ、大阪を第二の故郷として儒名高く、遂に幕府に徴されて柴野彦助の栗山、古賀彌助の精里と同じく三助(二洲の通稱は良佐)と呼ばれた人で、その本領たる朱子學派の經學の外に、武家の歴史に精通してゐるから、今や歴史好きの山陽が官舎に起居することゝなつたので、當年五十一歳の二洲は間がな隙がな武家の興亡に就ていろ／＼な物語りを注入した。歴史の話が始まると、毎晩夜が更けるので、モ一好い加減にお休みなされぬかど、いつも叔母さんからお小言を喰つたといふ事で、そのうへ山陽は學問所では、柴野栗山からは朱子の通鑑綱目の筆法を授けられたといふのであるから、大義名分派の史學家としての山陽の發足點は、いよいよ

よこの時に定められたのであつた。

山陽の詩才と史才とは、この江戸留學時代にも著しく發揮せられ、學問所の諸友は、漢土の將帥三十人の卽題を出して、線香一本を炷く時間を限りて、山陽に四言三十首の賛を作らせ、名高い話もあり、ツマリ山陽は外の諸生のやうに、大學は卒業しなかつたが、史學上立派なみやげを齎らして、翌寛政十年、十九歳の四月、同じく叔父杏坪に伴れられ、このたびは木曾路を取りて歸藩の途に就き、五月十三日の夜廣嶋に歸つた。學問所の在學は、ホンの一年に過ぎなかつたが、そのみやげは立派なものがあつたに相違ない。その歸り路に備後の神邊（かんべ）に菅茶山（かん）を訪問したとき、茶山は「歸來有獻尊親物不獨奚囊珠玉盈」の句を山陽に贈つた通り、兩親にさゝぐる立派なみやげがあつたのである。春水、梅颯の喜びは推し測られた。

喜びの裏には悲しみがある、外ではない、氣鬱病といふ心配が山陽の身の上に付き纏うてゐる。同月二十七日江戸の尾藤からよこした手紙にも、山陽の身の養生方がこまかく注意されてあつた、氣鬱といふのは、定めし今の謂はゆる一種

の青年病、煩悶病であつたであらう。嚴格にして而も子煩惱の春水は、一方ならず心配して、何がな氣晴らしの種にもど、夏より秋にかけ、けふも舟遊散、あすは近郊散歩と、宮嶋の舟祭りにもつれてゆく、萩見、月見には浮かれる、醫者には無論かけるといふ願き方で、少しは氣分も引立つたかは知らぬが、山陽の煩悶を醫すには婚禮をさせるのが一番の捷徑だらうといふ相談で、極月に入りて、いよくその話が熟した結果、藩醫の御園道英方から當年十五になつたばかりの淳子（じゆん）といふ小娘をもらひ受けるとの縁談が纏まり、十二月二十一日婚儀取結びの願書を、春水から表向へ差出し明けて二十歳（寛政十一年）の二月十五日、日柄もよしといよく御園方へ結納を遣はすまでの運びになつた。

(七) 婚禮と出奔

何だか新聞の三面種のやうな見出しであるが、山陽の煩悶病が、女房を持たせて癒るか癒らぬか、この場合尤も興味ある問題である。局外からは問題として面白いが、事實は頓着なく進行する。二月二十一日の夜には、花嫁さんの荷が

来る、二十二日の夕刻にはいよいよ興入りとなる。婚禮は滞りなく幾久しく祝ひ納められた。媒妁萬端は、藩士神尾惣右衛門といふ人の計らひである。と春水の日記に書いてある。

婚禮は濟んだが、すまぬは花筭山陽の胸の中。肝心の花筭さんは一生一度の婚禮をさのみ大事件とは思つてゐない。煩悶病がやうく治まりかけると共に、夜遊びといふ病氣が又頭を出して來た。正月五日の晩に遅く歸郷したのが病みつきで、十四日の左義長見物にも歸りが遅くなり、婚禮の濟んでからも、相變らず夜遊びが直らず。おまけに、酔つ拂つて遅く歸つて來るといふ始末。こんな調子で、夏より冬へかけても、夜遊び病は少しも治まらぬので、春水梅颯の心配はもとより、可愛想な花嫁さんも、時には居たゝまらず里方へ歸ることもあり、二月七日、いまは勸忍の緒も切れて、春水は遂に山陽を禁足處分にした。勿論山陽の身持に就ては、恩師の築山捧盈からも幾度か戒諭されたのであつたが、少しの利き目も見ぬなかつたから、どうく禁足を命せられた上に、搗てゝ加へて花嫁さんも心配の餘りか、ヒタと床に就く程の大病人になつた。

この心配のうち、年は明けて(寛政十二年)山陽は二十一歳の春を迎へた。小正月の日に、是迄の不心得改心の誓ひを兩親に聞か上げ、丁度花嫁さんの袖留祝と打ち重なり、めでたき春風はめづらしく頼家を音づれたが、掛々しからぬは淳子の病氣で、正月二十七日より又もやベツタリ床に就くやうになつた。山陽の青年時代に、改亭の別號のあつたのは、多分この頃の事であらう。山陽の書の前がきは、一種豪宕雄拔な書風であるが、中にもこの改亭落款のは、今に好事家の間に珍重されてゐる。

改亭の山陽は、身持を改めてから、築山の組織した輔仁會といふ文會に入り、同志研鑽の益を得たことが少くはなかつた。「我が師築山君は我に再生の恩あるもの、頃ごろ來りて我を見て、我に歌一章を賜ひ、語りて曰く、汝の死せずして復た我を見るをよろこぶと、余これを誦して泣く、我に書一卷を授け、語りて曰く、我れ嚮に思子の言に取り、汝かみちと輔仁の會をつくる」云々と山陽自記の文章にも、見ゆる通りであつた。

山陽の夜遊びの目的は、果して何事であつたかは、いまだ突き留め得ない。が

随分大事件が持上りかけて、築山の幹旋が無かつたならば、身分も危ふかつたらしい。築山に救はれ、築山の社中に入り、身持を改めて文事一三昧に入らうとする、山陽改心の心掛けはうれしいが、ばかぐしからぬ花嫁さんの病氣は困つたものである。いたくしい花嫁の述懐は、傍の見る目もいぢらしく、梅颯の日記には、そのありさまがこまぐと書き留められてある。

五月五日……淳、やはり平臥、御園、端午の賀節に來り、藥與ふ、同人ねる時分は小兒の如く、口がましく、今日など別して何やら氣に叶はぬよしにて、伊助ども呼寄せ泣く、久太郎が表へ机本など持行き、わづらふものを捨置き、傍に居ぬといふ口舌なりに

一齣の世話狂言を見物する如き、この場の泣き落とし、久太郎さんは胴慾な、わづらふこの身を振りすて、どこがわるいと只一言の、やさしい詞はかけまくも、紙や机や本までも、表の間へ持て行き……と義太夫のサワリ文句を聴くやうな、初々しい娘心の淳子の身には、熱情の缺けた山陽の素振を、さぞ物足らず思つたであらう。

改心後の山陽は、兎角文事に忙はしく、病妻の介抱は心ならずも餘所になつた。この夏、廣嶋胡町ほむちから出た國學家稻本稻彦が、伊勢の本居宣長の教へを受け、折ふし歸省したので、山陽は學問上の議論を闘はすべく、訪問又訪問、これ日も足らなかつたのである。山陽は元來本居の漢を抑へ和を揚ぐる言論に、不満足であつた。その議論に、彼れは我邦を小視するが故に、介々然として抑漢揚和の言論を敢てするのである、余輩は我邦を以て至大となすが故に、四外の貢するところの文籍は、皆我が用となすなり、何ぞ敢て漢を以て對となさんやといふのである。山陽は稻彦に對して、この種の議論を吹き掛けつゝ、大氣箴を吐く場合であつたから、病妻の看護も、自然怠りがちになつた。

それはさておき、こゝに又思ひも掛けぬ動機しんごう出來、山陽の一身上に、一大事が持上るべくなつたといふのは、父春水の郷里竹原から、九月三日に訃音が傳はり、春水の叔父傳五郎死去とある。折しも春水は江戸詰の不在中、山陽はその手紙を持つて、叔父杏坪方へ知らせに行き、山陽はすなはち悔みの使として、五日の六つ半頃に、下人太助を供に竹原へ急せられた。大叔父の事なり、ズッシリ重い

香奩包みを托された山陽は、途中何やら思入れの一幕があつて、ポイとそのまゝ逐電した。ボンヤリした太助はマカレて一人手振りて竹原へ行つたらしい。松下嘉平治之綱から胴丸の料を預かつた青年時代の豊太閤ならぬ山陽は、小節拘はるに足らざる也をキメ込んだのであつた。

五日に、廣嶋を立つた山陽は、けふあたり歸る日取りといふので、八日に「風呂なぞたかせ、久太郎の歸りを待居る」母の梅颯も、頓て山陽ふしだらの一伍一什を聞きりて、身も世もわれず、娘の病氣見舞に見えた御園先生をつかまへて、動氣おさへの振薬二帖を貰ひ、夜一夜泣き明かした。明けの朝(九日)竹原から人が来て、山陽逐電の行方も、うすく知れたとの事。十三日には御園の見舞、娘と姑御の病氣と心勞、不身持の聲の様子知つたる痛し痒しの御園は、匙加減して慰め歸つた。

おもふ事なくて見ましやとばかりに

後の今宵ぞ月に泣ぬる

十三夜の清光も、母が眼は涙に曇り、頼家は總領の逐電にて闇やみの體たらしく。

何はともあれ、追手は八方へ飛ばされ、杏坪よりは十九日付の手紙を認め、兄嫁梅颯の里方篠田へ宛て、急ぎさし立てた。「久太郎義、近年兎角放縱に有之ひ處、當年家兄(春水)留守中、浪遊に耽りひ故、親戚朋友切戒懇諭仕ひへ共、不相改當月五日、竹原大叔父病死仕ひに付、爲弔禮家來(太助)添へ差遣候處、途中より逐電仕候、……何分洛攝間に潜匿ひ事と被察ひ、此間中井御父子(竹山、蕉園)に書狀にて此儀申遣ひ、……弊藩の法、嫡子出奔仕ひへば、甚だ越度に相成ひ事に御座ひ、其上狂漢の事に御座ひ得者、如何なる事仕出し可申も難計、……本人義素より別に刑憲を犯し、遁去ひ様の義に毛頭無之、但豪俠狂妄の所爲に御座ひ、然し狂妄なりに、宿志も有之、事と相見ぬひ得ば、當分は必ず潜み居りて、追手を忍び可申ひ、若し御見當り、卒爾に御留置被成ひは、必ず逸居可仕ひ間、御見留の事も御座ひは、随分御談合ひて御周旋御取計奉囑ひ、誠に弊家存亡の所係に御座ひ得者、費用は何程入ひても不苦ひ間、御手厚に御取計可被下ひ、……尙々家嫂(梅颯)も驚き心痛の至にひ處、傍より色々慰し置ひ、江戸(春水)へは申不送ひ、……角田浩々氏藏とある。甥の山陽を氣遣ひたる叔父杏坪の心事、さてこそどかし測られて哀れなる中にも、杏坪

がさんく山陽の油を取りたる末に、狂妄なりにも宿志も有之事と相見へん」の一句、さすがは山陽の叔父さんほどあつて、立派な眼鏡の曇りのない所が價値である。

かれこれ穿鑿のすゑ、十月朔日になると、大阪の中井竹山から便りがあり、山陽の居所は漸と分かつた。山陽は京に上りて、福井新九郎といふ人の方に、身を潜めて居つたのである。

この騒ぎに、花嫁の父親御園道英は、聳の行末見込がないと思ひ取つたものか、九月晦日に、頼家を見舞ひ、家事に託して、淳子を呼び返した。

十月九日には、大阪金山重左衛門方より杏坪宛の中井履軒の手紙が届き、同じく山陽の居所を報知して来た。竹原から廣嶋へ相談に来て居つた仲父春風は、十日、廣嶋を立ちて山陽の引取方に向うた。この日恰も江戸にては春水、廣嶋からの手紙を受取りて、始めて山陽逐電の様子を知つたのであつた。嚴格一方の春水が此の騒動を聞き知つた時の激怒と心配は、想像にも餘りあることである。かよそ此の一件は、山陽不孝の子といふやかましい話で、大阪にても、竹山、履軒

などは、山陽が訪問して来ても、門前拂ひを喰はせたといふ程で、山陽の歿後、その行狀を書く場合にも、門人中に彼是れやかましい議論が湧き上がったはどであつた。山陽行狀を書いた江木鱈水は、テンで、此一くだりを省略し、弟子としては有り体に書くことを憚るといつた程であつたが、森田節齋は、先師齡甫めて弱冠、その卓犖の性、藩法の羈縛を苦み、その豪氣を伸ぶること能はず、故に潜に脱走せしのみといつて、鱈水の事實を没却したのを罵り、牧百峰も、先師の過ちは必ずしも諱まざるべしと節齋説に加擔し、宮原節庵も、この事實を直寫して、先師初年の行ひ、晩年と相反するものをあらはし、これが傳を作らん志ありといひ、村瀬藤城も節齋説を賛成した一人であつた程で、非常にやかましい事件であつた。

煩悶か、不平か、藩法の束縛に堪へなかつたか、最愛(?)の花嫁を振りすて、藩邸を出奔した山陽の留主中は、愁嘆の黒幕に閉された頼家に、さびしき喜びの光りがさして、淳子着帯の相談が始まつたのは、十一日の事であつた。夜遊びが過ぎた揚句の果てが、逐電となつた山陽も、さすがは夫婦の情、淳子はいつか懐妊して居つたのである。

二十日になると、上方へ追手に出した藤藏といふものが、杏坪方へ急ぎ歸り來り、山陽は十三日に京を立ちて歸途に着いたとの知らせに、梅颯は二十一日すぐに御園方へ、その吉左右を知らせに遣り、淳子にも安心を與へた。

二十三日、「大工大せい來りて仕構へする」(梅颯日記の原文引用以下同じ)山陽歸邸と共に直ぐに圍ひに屏居せしめる手筈である。二十四日圍ひは出來上つた。十一月二日より梅颯は一時多門邸の杏坪方へ身を托して、本邸を避けて居つた。三日に追手の一人傳藏といふが、海田市から山陽より先着して馳せ歸り、頓て山陽は歸邸した。歸つて見ると、邸には圍ひが出來てゐる。すぐとその幽室に屏居せしめられ、名前さへお上を憚がりて、憐二と假稱する迄に、日蔭ものゝ身の上となつた。

二十九日には築山捧盈、山陽の憐二を訪ね來りて、いろく教訓の言を與へ、杏坪もこれに立會つたが、今度といふ今度は、山陽もよくせき悔悟するところがあつてか、暇日の日に圍ひの中から、何か兩親のお書きになつた訓戒のお文かみが見たいと願つた、要こそあれと梅颯は、春水の書いた藝備孝子傳序文と、山陽江戸修行

の日、咏んで遣はした自身戒めの歌二三首を書いて、圍ひの中へ入れてやつた。

(八) 廢嫡と出産

これより先、在江戸の春水は、山陽逐電の報に接すると共に、廢嫡の意を決し、その旨本藩へ願出でしに對して、小姓中嶋榮次の手を経て、藩侯淺野長晟公より、假養子差構ひなしとの御沙汰を拜し、山陽廢嫡の上、春水は弟春風の子熊吉を假養子に引直さうとした。國元にては、山陽廢嫡の上は、御園家と相談の上、嫁の淳子はいよいよ離別して、夫婦義絶と事さまり、兩家の間柄は絶交にも及ばぬことと定められた。

圍ひの中の山陽は、年の瀬も押し詰つた十二月二十九日に至り、初めて更衣沐浴の恩典に預かり、おぼつかなき新年を迎ふる用意をしたのも、物憐れである。享和元年、山陽二十二歳の春を迎へたが、日かけ者の境遇には目出度くもなかつた。二月二十日になると、その日の五つ過ぎに、御園方から人が來て、何かは知らず頼家の留守番役伊助といふ人に、早々來て呉れとの口上。伊助は折ふし學

問所へ出てゐる不在中なので、梅颯は心やすい幸助といふ人呼びにやり、幸助は宅から直ぐに伊助の名代として、御園へ行つたが、頓ていそぐやつて来て、お悦びなされ、お淳さま産氣がつかましたとの話、上を下へのこつた返して、幸助は往きつ戻りつ。産の用意ものあらば、よこして呉れど、御園よりの頼みに、梅颯は豫ねて用意の産衣やら、かいまき襦袢などのしなぐ、すつしり風呂敷包をどこのへやり、産婦入用の物も引どき、裏綿などこしらへる内、安産知らせ来る、八つ前なり、折から林堅良より鮮にしめやうのもの少々贈り来り、分ち遣はす。かれこれするうち、杏坪も尋ね来て、直ぐに御園方へ往く、伊助もついでいてゆく。暮過ぎになると、御園方の下女が、生れ子を抱きかゝへて来る。「手附鬘斗、吸物肴一種」の内祝を濟ます。御園の下女へは、引出物を遣はすなど、梅颯一人の心づかひ、生れ兒はど見れば、玉のやうなる男の兒。

二十二日、小兒は都具雄と命名(後に與一、聿庵)。三月四日、御園より淳道具の内、取りに人かこす、申越す通り、葛籠に小道具類入れ組み、それへまた櫛箱、鏡二つ、鏡立、針箱二つ、針さし、紙文庫、硯箱、耳盥、うがゆ茶碗、簪入れ、扇子箱、しまの單物、此方にてこしらへ遣はす分、茶小紋綿入、嶋裕の分、表引とき、くろ表破れつき、小風呂敷包つき入れ、浴衣等なり、張物道具、今一つの葛籠は、産の時申来り、よぎ蒲團敷、蒲團枕など入れ遣はす。これで一坪は片づき、御園道英は改めて十三日に暇乞に来り、返禮として十四日、伊助は御園方へ遣はされた。春水の不在中、家事の何くれ、八面應酬、痒い處へ手のどゞく萬事のさきりもりは、梅颯の手一つで遺憾なきまで、取運ばれたのであつた。何もかも片附いた上で、五月十六日に春水は久々にて歸藩。

春水は今に始めぬ山陽の身上に就いての心づかひ、兄弟同様の厚誼ある備後神邊の菅茶山へ宛て、秘密の一書を差立て、目下の窮狀を訴へて、その同情を求めた。

(前略)老拙老懷御察可被下し、敝藩は尊邑などとは違ひ、法網微密の方と存んば、不可免ぬ、且は其變及乃父の事共、問々有之ぬ、たとへば

彌太郎腹息

とち籠めの事にゆ

頼 久太郎

右は不行跡の趣相聞いに付、蟄居被 仰付

閉門の様なる罰に付

頼 彌太郎

右は家内示し方不宜い様相聞へ遠慮被 仰付
など、申類の事にて、蟄居と申へば、圍に入れ、錠入りにて飲食は窓より入れ遣ひ事、是迄出奔の後、其通りに仕置ひ、其時は狂病と申事故、圍へ入ると申出ひ計ひ、其代りに病氣追々宜敷と申出ひ故、又圍を出し申度と申ひ間、只今の通りに相成申ひ、此後蟄居と申事に成ひへば、生涯出申事相成不申ひ……老拙が右の儀共に成ひ上は、一藩にて失面目事共にひ、その遠慮と申ひ事は、長き事は無之例にひへ共、何分面目は無之い

右不行跡と申事、姦夫の盜賊のと申事には無之い、第一は治情より銀子遣ひ過しと申様の事、少年の常態にて、不足驚ひ事にひへ共、其所以然の所を申へば、甚以可恐ひ事にて、姦計亦甚、かの梶山などは、腹心の者にひへば、擡眉罷在ひ、他人は後ろ指にて嘲嗤罷在ひ、此節類に防ぎ見居申ひ、何分にも急成事は無之い、何卒貴地か鴨方邊共、京大阪にひへば更妙にて、養子に遣ひ所は有

之間敷い哉、左は、他國へ養子に遣度と申ひて、此地を引拂ひ申上ひ、後は晦み可申ひ、屹度養子の先きの有之にても無之、たゞ可也に住居相成ひて、朝夕烟を立てる事も出来ひは、其土地に暫時宅をかまへん迄の計にてもよくい……何分去年婚事にて、物入いたし、その上へかゝる物入事にも可及と、痛心御察可被下ひ、老兄の厄多きも、老拙が家眷のために及老境、かゝる不快の事、全集仕ひ事、御憐察可被下ひ、御近邊にて天野孝藏など申様成ものに成ひかとも存じ、是も廟堂の議に及不申ひへば、許可は出不申ひ

親眷とも奉存ひ故、丙々申試ひ、御考可被下、御覽後丙丁(備後、杉田嬰氏藏)

山陽の憐二の身の上は、兎角思ひ過しの春水が大心配する程でもなく、これより先き、四月二十八日、圍ひを赦されて、仁室に移され、筆硯さへも差許された。

春水は、此度の出府中に、林大學頭(述齋)を始め、尾藤二洲、古賀精里の吹擧にて、昌平坂學問所に於て、囑託講師の格で、薩摩の赤崎海門と兩人、講釋相勤め、銀子五枚のお手當を幕府から拜領して歸つたのである。子息(ひやく)の山陽が日蔭者の身の上であつたのとは、雲泥の違ひであつた。

春水は、又々享和二年八月二十七日に、江戸詰の爲廣嶋を出立し、翌享和三年五月十六日に歸藩し、十月八日熊吉改めて本養子の内伺書を奉り、十二月朔日お聽届となり、同六日山陽の幽居も始めて釋かれ、七日對面の事相叶、夜一緒に酒飯す、御多門(杏坪)より肴贈り來る。二十七日には「誕生祝、幸次より先達ての歡び、鯛濱焼くれ、お肴にする」。かくの如くにして山陽二十四歳の誕生日は、目出度祝はれ、久し振りにて、頼家は一陽來復の歡聲に満ちたのであつた。此度の江戸詰にも、春水は昌平坂學問所の講釋を勤め、前例同様幕府より銀子五枚を拜領した。

(九) 日本外史と山陽文稿

文化改元の春、正月十五日、廣嶋藩の御用始の日、年寄役列座の上、頼彌太郎の春水に對して、堀江典膳より改めて、頼熊吉本養子の願を聽され、久太郎の憐二は、こゝに全く廢嫡を宣告された、山陽時に二十五歳。

藩法の束縛を受けず、世間の俗務には煩はされず、天地間一本立ちの頼山陽は、果して那邊にその羽翼を伸ばさんとする、蛟龍は到底池中の物ではあるまい。

これより先、二十三歳の享和二年十二月十日といふ日に、屏居中の山陽は、伊助から取次がせて、一部の著述物を春水の不在中、母梅颯夫人に上つた。圍ひの、幽居の、仁室のど、お上に對する表向きの稱へは、ともあれ、その實は俗塵に遠ざかりたる、お慈悲的の好箇の一書齋に閉ぢ籠りて、一意専念に著述に耽り、今や取纏まつた原稿一部を、母氏に捧げて、多年不孝兒の汚名を雪がんとしたのであつた。著述物とは、言はずと知れた日本外史の初稿の一片。

このころ山陽は、頑強なる眼病を患らひ、殊に右の一眼は盛んに脹れ上がつたといふ。日本外史の原稿に、心血を注いだ報酬として、眼病に取りつかれては、引合ふ話にあらねど、眼の悪い位は物の數ならず、幕府を抑へて、皇室の興隆を謀らんとする、一部の日本外史は、言はゞ時代の危険思想、何處からどんな咎めが殺到して來て、家を亡ぼすは愚か、延いては藩侯の煩ひを惹起さぬとも限らず、これを思ひ彼をおもへば、廢嫡の宣言を受けて、一日も早く世間の羈絆きわんを脱却し置かんに若かず。日本外史てふ一大成書の著述を思ひ立つからには、世の藏書家を叩きて、有らゆる資材を求めねばならず、一代の賢豪碩儒に交りて才學識の三長を

養はねばならず、上方へ逐電したのも、圍ひの中に屏居させられたのも、乃至は廢嫡の實行を吾から買ひしも、或は爲にする所ありてのわざかとも、善意的に解釋せられざるにはあらず。何は兎もあれ、青春二十三歳の曉に、他年王政復古の先聲を鳴らした、日本外史の大著述は、未定稿ながらも、その目鼻が出来上がつたといふ一事は、有らゆる他の世評の帳消しが立派に出来た譯であると辯護して置きたい。逐電の出奔のと騒いだものゝ無斷で見學旅行をやつたと見れば何の事も無い。

後に文化五年五月二十日付で、篠崎小竹より山陽へ送つた手紙の中にも、此ういふ意味の事を言てゐる。「其後(山陽)江戸遊學の途始めて兩人面會の時より(西人の浪華を過ぎて東するもの、足下の逸才を稱せざるはなく、又足下の常病を憂へざるなし、僕は疑ふ、常病人にして成業するものあらんやと、其後屢阿波に遊びて小寺官五郎(鳩峰)の話を聽くに、足下病益す甚だしくして、而して學は益す進めりと、僕いよゝゝ疑ふ、三四年前仙臺の大槻子繩(平泉)西より歸り、詳かに足下の近狀を語る、又足下、佐賀の古賀穀堂に和する詩を誦す、又聞く既に著書若干卷(日本

外史)ありと、僕是に於て、始めて足下の病は眞にわらず、精神越深し、五内結轡すといふものは、蓋し託して以て世を逃れんとするものたるを知るなり、古人立言の際に當り、或は戸を閉ぢて慶弔の禮を絶ち、或は帷を下して三年園を窺はざるものあり、足下既に上に君父あり、頼に古人の爲す所に倣ふこと能はず、乃ち病に因りて世を逃れ、覃思研精、遂に鬱然として山陽の儒家となれり、僕の疑ふところ、是に於て渙然氷釋し、畏敬従うて加はる云々、山陽この時二十九歳、有らゆる驚人的の病患は、皆假病の用品を使つたわざであつた、虚弱は生れつきにもせよ、さすがは小竹、よくもその裡の秘密を道破せしものかな、山陽の知己は、この人の外にはあるまい。

ことし秋、江戸の詩人市河寛齋の子米庵一歳の兄、九州遊歷の歸途、山陽を訪問した。山陽文稿中の奇文蹲鴟子傳は、その席上米庵が發題して、山陽の文才を試みた否試みられたものであつた。米庵、江戸へ歸つて盛んに山陽の才名を吹聴したので、江戸の詞林には廣嶋才子の名が高くなり、菊池五山(四歳の兄)の如きは、その五山堂詩話のうちに紹介して、非常に廣告の提灯を持つた。

文化二年(二十六歳)の「新正には、狂豎又重泰治年」と自嘲して、相も變らぬ狂豎生活をつゞけてゐるやうなもの、史學を本領として、詩文の兩翼を左右に張り、殊に文章の道は、蘇東坡氣取りに、十二分の才氣を發揮して、一部の山陽文稿は、立派に出来上つた。山陽文稿中の論説は、重に二十三歳頃の作で、諸經史論には、往々幼時の作をも存録し、下巻の名文は、大抵屏居後の叙事文である。

ことし九月、山陽は義弟權二郎(熊吉の改名)妹十子とよおよび阿波の門人小寺鳩峰等と俱に、春水病氣保養のお供をして、竹原に歸り、十五日には、宗仙祠と大福寺に遊び、十八日には龍頭山照蓮寺に詩會を催し、山陽は龍頭山に會する序を作つた。折から菅茶山は備中聖人ともいはれた西山拙齋の遺子孝恂を伴ひ、春水見舞として竹原に來會して、この雅趣に列した。一時の高興は今より想見すべきである。著者ことし八月十日、竹原に遊び、照蓮寺に頼家の墓を弔し、本堂に於ける朝日講演會場に臨み、山陽傳を講じたが、春風先生の跡を相續さるゝ竹原銀行頭取頼俊直君、同鷹二郎君等が、祖先の遺稿を示したうちに、當時の茶山の詩や、山陽の序文などの幅を觀て、言ひ知らぬ興趣を覺れた。山陽の序文のとき、その才華

煥發のめざましきは、山陽文稿を讀んで、兼々承知の上であるが、その書風の殊に秀でたのは、中年以後の書風に對觀して、又別様の妙味あるにはれぐしした。同行の内藤博士も、しきりにその妙をたゞへられた。山陽は又二老人に陪し、酒造家正木なにがしの家に遊び、奉盈樓の記を作つた、これは山陽小品の中に載つてゐる。

山陽は、文章の外又詩賦に力を用ひ、屏居以來五年間も廢して居つたのを盛り返して、ことし正月十四日の夜、春水の病を慰め、半分に、蠟燭一寸の時間に、徳川氏二十八將圖を觀るといふ一大長篇を腹稿した。腹稿は春水が大阪在住時代に、混沌社で専ら行はれた法であるから、春水は山陽にもこの腹稿法をやらせたのであつた。蠟燭一寸の長篇は、昌平時代線香一本の三十絶句と、前後おのづから相照應して、山陽の詩才を觀るべき一對の佳話となつた。

山陽が、此度竹原へ旅行し得るやうになつたのは、この夏例の築山の取持にて屏居宥免の沙汰に預かつたからで、竹原墓參の日に、大叔父傳五郎の墓にぬかづきたる山陽は、如何に叩頭して先非を詫び入りしかを想はしむるのである。

山陽文稿に次で脱稿したのは、「小文規則」である。この夏中の課業として、漢土古人の小品文を抜萃して、作法を示し、批評を加へたものである。

明けて文化三年(二十七歳)山陽の健康保全の爲、春水は七日々々に灸治を加へしめ、正月十六日よりこれを實行せしめた。二十二日の梅颯日記に「久太郎灸すへ遣はす、六ヶ所」とある。随分あつゝい恵みである。梅颯晩年、春水の遺書を見て、山陽に示した歌の中に、

御ふる文に、裏に灸すへる事のあれば

さしも草さしもむかしの跡ながら

あつきめぐみは身にとはるべし

とあるのは、この頃の思ひ出であらう。久太郎は灸をすへられつゝ、一念思ひ立つたる日本外史の原稿は、孜々と怠らず、ことし六月には、織田氏の部は已に稿を脱したとある。

日本外史の思ひ立ちには、仲父春風に負ふところが最も多かつたのである。最初大日本史を、春風の藏書中より借覽したのが着手の動機で、初めは日本世史本

朝野史などゝ、假りに外題を考へて置いたのを、日本外史といふ適確不動の佳名を拈出したのは、矢張り春風の考案だといふことである。

(十) 茶山の塾頭

文化四年(二十八歳)には、日本外史も略ぼ脱稿し、「新策」の新著も亦成り、經國濟民の意見を發表した。晩年修正して通議と改題したのは、此著述である。

夏の初め、筑前の龜井昭陽、江戸よりの歸途廣嶋に來訪し、山陽はこゝに始めて昭陽と交りを結んだ。昭陽は是より先、秋月侯に侍して東游し、折から在府中の杏坪にも面會したから、杏坪よりは九州才子の事ども山陽に消息して來たので、山陽は般々の情に堪へなかつた折しも先方より春水を訪ねて來た席上、相互初對面の口誼を交換し、後來詞林に艶稱されし三太郎(久太郎)の山陽、昱太郎の昭陽、及び小太郎の古賀穀堂)中の二太郎は、早く已に相識の因を結んだのであつた。昭陽時に三十五歳。

文化五年(二十九歳)四月二十二日、妹十子(二十歳)三穂と改名して、藩士進藤吉之

助(後彦助)に嫁した。

この頃、北邊魯艦入泊の事あり、物情恟々、長夜の眠を貪りたる朝野の耳目を驚動せしめた、これに就て山陽の手紙に、

……今春は家妹、一士家へ縁附申ひ……僕は碌々依舊、感慨逐年新御座ひ、……北邊恟々如論、靜ならねば隱家もなしの歌の如く御座ひ、然し志士試其所學の秋ども可申、哉僕弱冠學兵法、其後は純一の書生御座ひ處、此節は淫婦古態チト出申度様御座ひと申すは諱おとがにて、實に杞憂此事に御座ひ……敵藩には公儀打拂の御號令に付、別に觸有之、此事於武門可驚事にあらず、驕立申間敷と申事にて、人數備有之、僕父子も編行伍ひ、然し是は謀畫之列に御座ひて、急に喋血の患も有之間敷と被存ひ、何分如何なる時運になりぬ事にや、歎はしき事に御座ひ、右に付理裝致置ひ様之義心忙敷、それに家妹の資送等彼是、左氏所謂有三年之畏有桑中之喜にて御座ひ、僕依然多病、近來得一絶申ひ、

防邊豈無策。慷慨一羸夫。獨卻胸間疾。難於海外胡。

御一咲可被下ひ、林子平非庸人ひ、然し其言一利一害御座ひ、公儀陽擯其人、陰

用其言、貪北邊地利、苛細之政、開邊費ひて、松前の藩籬を自撤ひ、……方今時勢、大才力之人、大威信之人、鎮靖閭邦ひはねば、事の結局未可知ひ、何卒白川侯御歸役させ度事に御座ひ……防邊之事に付、文章も御座ひへ共、今便急にて不
及入貴覽ひ……(三月二十九日附、池口子繼宛、東京市嶋春城氏藏)

池口は、但馬出石の士、春水の門人である。

この歳、新たに山陽の金蘭薄に入りし諸友は、備前の武元、登々庵、豊後の僧末、弘雲華(大倉)、赤馬關の廣江殿峰、長府の臼杵鹿垣等であつた。同郷の舊友金子熊介は、十二月七日に死去した。

文化六年(三十歳)この年ごろ、暫く調子のよかつた山陽は、又、又、又逆戻りして、夜遊びの癖が動き出した。おまけに義弟權二郎までがグルになつて、何の目的か知らぬが、夜々歸郷が遅くなる。正月十九日に、二人同伴して、八木の梅見に行たのが病附きとなり、春より秋へかけ、少しも尻が落ちつかず。八月二十三日夜に至り、山陽は「存」寄りを申上げ(春水へ)又御申聞けの事もあり、何か一生の方針上、決意するところがあつたやうだ、九月十八日に、十六日出の茶山の手紙が、春水宛

に届いた……久太郎殿、部屋住と申體にて御座は、不苦は、私方へ申請け申度存は、私も御案内の老境、圃塾附属いたし、人無之、木鞠申は、付存寄りの事に御座は、……此方圃塾もいまだ半經營に、へば、學力有之人に無之、は、取續き出來がたく、は、間、偏に所希に御座は、……とある。備後神邊の、黄葉夕陽、郵舎の、廉塾といへば、海内にその名の聞え、一大私塾、その老先生から學力ある人、家塾を相續するに足る人として、山陽は所望されたのである。わが子の不身持に、魁を投げた春水の境遇に同情して、表面奇麗に圃塾の相續人として、山陽を買ひ出しに來た茶山は、春水山陽父子の守本尊として、合掌禮拜すべき人であらねばならぬ。二十一日には春水、かねても頼りにかも、ふ築山、捧盈方に赴き、山陽の身上に就ての内談に夜を更かし、二十七日には築山より尋ね來りて、同じく内相談。十月十八日には、更に春水より出掛けて、いろく、善後策を講ずるうち、茶山よりも手紙が頻々と來るので、十九日付で春水は最後の決心を茶山に申込んだ。

内密御返事

親迎の事被仰下、是は君か父か命と不申は、は、つまらぬもの、今の通りにて

は、頭陀袋もの(乞食するより外はないどの意か)なり、士人には飽申は、など申放言か妄語か……此元にては疾首此事に……此地に築山嘉平(捧盈)といふ人有之、用人職にして磊落也、此人今にて上にも被得は、處有之、上下の間に在つて、用事は、渠(山陽)を殊の外所謂ヒイキにいたし、此上にもと精力を盡し周旋申は、尊家へ罷越は、様に成は、も、此人の蔭にては、渠へ申遣は、は、何にても存寄有之か、又は新分別も出は、か、總じて築山へ申越し、築山の命を受は、て可然は、同方へ相背きは、事は、君父に背くに、事也、又其人大作略有之は、へば、必得其所は、事出可申は、……尊兄よりも同方へ、只今久太郎引受居申は、に付、諸事同人事は、御相談も仕度など、御書通有之、如何可有之は、や、イラヌ事か、又早さか、此人より貴家へ書通被致は、へど申度は、へ共、是は、其人當時重役にもは、は、外交を好ですることにも無之は、公儀にては、若年寄と申所也……

十月十九日

惟 完

禮脚盟兄侍史 (吳、菅波鶴雄氏藏)

同月二十一日、二十八日の兩度、春水は更にく、築山方へ相談をかけし結果、い

よく茶山方へ差遣はし度旨、公けに對して内願書を上つた。

口上の覺

私悴久太郎義、追々持病快復、世間も廣く相成、是全く御仁惠の程、重疊難有仕合奉存い、……然る處先頃已來備後神邊菅太中より、同人義所望仕度、切々申越い、太中義、男子無御座いへ共、急度相續養子に仕度趣には無御座い、……太中義追々老年に及び、替りい人も無御座いに付、倅へ右教授方譲り申度趣に相聞へ申い、……只今私方の所は、權二郎追々成長、學事手傳も相濟申い、元來久太郎、隱者にて著述等の志のみに御座いへば、彼是以つて太中所望に任せ申度奉存い、……

どの願意に對し、表立ち願書差出し見よどの旨附箋があつたので、春水は更にその手續に及び、十二月二十一日に許可の指令に接した。

御自分廢息久太郎義、備後神邊菅太中方に差遣申度旨、願の通被 仰出い間、可被存其旨い以上

十二月二十一日

堀江典膳
淺野縫殿
仙石半人
石井内膳

頼 彌太郎殿

一件はこゝに首尾よく纏まつた。同時に春水は其旨茶山へ消息したので、同月二十五日、茶山門人某は廣嶋に來り、二十七日山陽は出立、神邊へ向うた。發足に臨み、春水は山陽への誠告として書き示した條々は、

菅塾へ罷越いては

- 一 先生家法大切に相守り、先生存意、毛頭背き申間敷い義は勿論、諸事瑣細の事たりとも相伺取計い事
- 一 先生家學精勵いたし、諸學徒熟和、厚く一同に課業無怠い事
- 一 人才を賊ひ不申様にと、常に心置可然い
- 一 近邊其外附合、謙遜を主とし、別て福山御家中、失禮無之様、可致い事

出入の男女共、卒爾の事無之様可致し事

一 飲食衣服、自己内分の取計有之間敷、たとひ藥餌たりとも同様の事、錢穀の出入、自分雜費は、皆々差圖を受、取計し事

一朝暮行事、起臥の時刻等、自分の便利にて自由ケ間敷義、不可有之し事

一 近所の出歸共、度々相伺し事、此地は勿論諸方共書通は、度々是又相伺し事

右六箇條申渡し間、尙先生教示遵奉可有之し、勉之

文化六年己巳十二月

山陽の感慨いかん、途上の雜詩十首は明かにその思ひを漏らしてゐる。その

一二、

阿爺申我訓。阿嬢裁我衣。何以酬斯德。寸心有所期。

旅館寒燈句。平生徒讀過。今宵聞爾誦。涕淚忽滂沱。

廉塾に新年を迎へた(文化七年、三十一歳)山陽の情況は、附添うて來た下僕忠藏が廣嶋へ歸つて、これを春水梅颯に報告した。正月十七日には茶山方より使者來り、祝二重扇子箱入一、壓節五本、酒一樽の音物いんちゆうがあつた。此方よりも答禮の祝

ひを贈り、二十五日に山陽の手廻りを長持に詰めて送り出した。この時、春水より、尾道の龜山本助(當主元介氏の曾祖父)へ頼みて、長持を神邊へ轉送して欲しいとの手紙が龜山家に保存されてある。此長持の棒は無之し、其元にて可然御取計可被下し、との文句もある。四月二十一日には藤井機園、茶山の使として來り、山陽よりの手紙を齎らした。二十三日、機園の歸るに托して、梅颯より山陽に送つた夏衣の目錄は、かたびら有合せの分遣はす、御多門(杏坪)贖はらひけの夏袴、佐一郎(杏坪の男)贈る所の帶くけ遣はす、玉子紋付一、天明じま一、奈良じま一、紙布一、襦袢二、洗濯物、さびらじま二、袴布平一、絹平二、新出來一、絲じま單物一。

著者この夏に中國行の際、福山より神邊に入り、廉塾を訪ひ、昔ながらに保存される建物を隈なく一覽して、當年山陽の書齋といふを見せてもらった。廉塾の玄關を右へ曲つた講堂の奥に、長四疊ちやうよの狭苦しい一室があるのがそれである。一方口の息も詰まるばかりの部屋で、今は行燈部屋に用ゐられてある。此の部屋では、いかな山陽も辛抱は出來まじく同情されて、そゝろに有りし昔を追懐しつゝ、轉じて別棟の茶山先生の書樓といふに登つて見ると、襖の片ひらに貼られ

てある山陽の書がフト目についた。「悵望青天鳴墜葉」の一句を、一行に書き卸して、庚午六月十八日」の日附さへ殊更に麗々と書き添へられてある。水無月の炎天に四疊敷の部屋では、山陽ならぬ人でも、青天を悵望せずには居られないのである。山の如き感慨を、此一句に漏らした山陽の心事は、十分に想ひやるべきである。况んや外に一大志望を抱ける山陽その人に於てをや。七月二十三日には、早や辛抱が出来ず、漢文の書牘を茶山先生に上り、同二十六日には恩師築山捧盈宛の、有名なる長い手紙(山陽外傳に全文を影寫す)を認めて、その心事を訴へた譯も確かに讀めるのであつた。

……經書講釋等も不得手の儀得手と申ては史學文章に御座い、是にて少々にても御國の御用に相立い儀仕度、即ち籠居以來、日本外史と申武家の記録二十二卷、著述成就仕居い……日本にて必要の大典とは藝州の書物と、人に爲呼申度念願に御座い……古より學者の業を成し地は、三都の外は無之い、如何なる達人にても、田舎藝は用に立不申、闇齋、仁齋、徂徠などの様の業は、都會ならでは出来不申……不肖の私に御座い得ども、何卒右の場所へ出で、

名儒俊才に附合もいはい、學業成就、名を天下に擧げ、末代迄も藝州に何某と被呼いはい、螢火にて月光を増す譬にて、少しは御國の光ども可申い哉……幸ひ箇様の不用の一人に相成い故、今生の思出に大場へ罷出、正學を以て四方を靡かせ申度事、生前の念願不過之奉存い……然る處福山の公邊にては、私を取放し不申様と、役人ども寄合、彼是と談合仕り、私に知行爲取、士儒に取立申度旨、内意菅先生より被申聞い……私奉公出来い身に、得者本國にて仕可申筈の義に御座い……譬へ加賀、薩摩より所望に預りいても、見向も不仕了簡に御座い……家父(春水)叔父(杏坪)共は御承知の氣遣手に御座いゆへ、兎角手放い事致兼……唯一言の許を受いへば、私一分の才覺を以て一人口食い事は如何とも仕い、全體人の放蕩と申も、自身に定りい業無之、かゝり人根性に相成い故に御座い……何卒尊公様の御憐愍にて、人一人御救被下、本意を遂い事は出来申間敷哉……身分落着業事成就仕い上は、家父も安心仕、少々は御國の御用に相立い事出来仕可申い、何卒兩親存生中に、此場を見せ申度奉存い……

通篇この調子にて輾轉號哭、御國に忠に、兩親に孝に、天下の上遊に據りて一代の名聲を揚げんことを期したるさま、惻々として人を動かすに足るものがある。八月晦日には、杏坪の江戸詰に伴はれて、義弟權二郎遊學の爲東上の途、神邊におどづれた。送別の席上、山陽は權二郎の求めのまに、道中の槩を書き與へ、地理と歴史とを錯綜して、暗記のまゝに他の蒙を發いたのは、山陽ならでは出来ぬ藝であらう。

(十一) 二度目の高飛

明けて文化八年(三十二歳)の新年となつた、悶々に悶々た山陽は、今はた初一念を思ひ止まることは出来ない。遂にその所信を決行して、閏二月七日、斷然京上りの消息を廣嶋に致し、二度目の高飛と出かけた。高飛とはいひ條、今度の場合、は逐電でも出奔でもなく、事後承諾ぐらゐの見當はあつたものらしく、後年山陽が茶山に送つた手紙にも、元來上京の一件は、先生より決し賜はり、義云々、先人(春水)も京に出い位なれば、堀川伊藤氏などの様に、上國に一同姓樹立の様に致

いへと申置い事有之云々」などの文句も見えてゐるから、さして驚くにも足らぬのであるが、何分所在を晦ましたらしいので、廣嶋の騒ぎ方は、第一回の時とは又是をかけたやうで、いつも追手の役を勤める春風は、又々上方へ向ふ鉢巻で出かけたのである。

上方へ高飛びを試みた山陽が、第一に落つたのは、大阪の篠崎小竹方であつた。小竹は山陽を迎へて置いて、扱三月二日付の手紙を廣嶋に送り(二十一日着)、去る閏二月十五日、拙者方へ到着、四五日滞在の上、拙者知合の蘭醫小石元瑞への紹介狀を添へ京上り致されいとの旨を報告した(山陽は途中、備中長尾の小野樫翁方に尋ね寄つた)。春風は漸どの事で、山陽と京の六條で出會つたが、春風も追々様子見届けの上、五月二十四日京より下阪、篠崎を訪ひ、六月上旬歸國したらしいが、六月二日付にて山陽より春風に送つた手紙に、

……扱京阪にて治遊などの萌も有之様に懸慮して話し申い由(小竹より)……
 ……篠は私へ忠告に及び形迹相慎可申……眞に放を仕いて、持参い金子忽に減じ、只今々様に晏然家借仕、糊口致參る事出来申間布い下阪の節小石より、

預け置いた金の内二兩受取参り、それは全然返し其上にて浪華にて取ひ少々
の潤筆、一兩一步はども利をつけ返すと申し、一咲仕の事にて御座いひし登
々庵或は當地にて府中木村考安など、私を素知いものも、案内客齋の人とて
驚居申位の事に御座い、……されども管へ返るとの事は難出来と存い、左
いへば國へ呼戻と申いて、又々若先年せんねん檻養……先づ私心には、箇様に自身働
出し、衣食い事、心には苦惱の場は無限いへども、本意には存居い、仰人鼻息生
活仕い義、何共不本意に奉存い、管へ養子に参い義、儒者分上に有まじき事な
ど、の外評も承申い、彼是考へいへば、當時の所終焉の地と奉存い、違慈顔い
は、備も京も五十歩百歩に御座い、……(六月二日付)

この手紙を見た春風は、直ちに廣嶋へ消息して、

……花柳を篠崎氣遣申い義、其外京阪の町人ツキアイなどの義、篠崎申い處、
尙又京にて治遊等有之いへば、小石より篠へ早速しらせ可申義など、篠が申
所に付、裏へ心得の義申遣い、……此書面(前掲の分)まんざら詭言許りにも有
之間敷い、……長左衛門(小竹)は善友にて、同人決して許し不申様子に御座い、

竹山(中井)へ差越い書状の義、御聞は不被遊い哉、アノ方にか、被存い哉、神
邊より用事に付上京と申ものにて、書通も差許可被申い哉、……

とある。又小竹より春風に送つた手紙には、令姪様(山陽)……此節は講書ども
御初めに、門人も餘程出来申様承り申い、私社中朋友共より種々忠告い人有之
い間、御一同御安意可被遊奉存いとある。これを要するに、山陽上京後、自然放蕩
の所行あるに於ては、大阪の小竹と京の元瑞とが兩地に眼張り、山陽の一舉一動
を監視してゐるから、その義は安心なされよ、といふ事に落着した。

山陽は上方へ落つた後、一錢一厘の仕送りも郷里に仰がず、獨立自助、一家を
樹立する爲には、案内客齋の人と舊友の間にさへ噂されたとある。それにつき、
かういふ手紙もある。

僕節衣節食の所あまじき贏、少々金子有之、京師にて貸附置いに、高利の方は危く、不危
家は無利ならば御預り可申など、申事にて困申い、大阪にて大丈夫の所に
て少々利息くれい様の家、御聞繕被下いまじくや、或は貴家の内へ一所にて
もよろしく、別なれば猶便利にい、山權など如何、此義とくより心付居いへ共、

申上ひ序なく及於今日い……(小竹宛?、東京、市嶋春城氏藏)

言ふ勿れ、山陽先生は高利貸なりと。此くの如くせねば、此の場合、一本立の生計は六ヶ敷かつたのであらう。

一方、小石、篠崎等の所謂善友があるかと思ふと、他の一面には焼棒杭に火をつけやうとする、在阪武元登々庵の一派が控へてゐる。消極主義と積極論とが交々、中心點たる山陽の身邊に附纏うたところは、物のたとへが臭艸紙によくある、善玉悪玉の挿繪を聯想せずには居られない。無論、登々庵を悪玉あしらひにするのではなけれど……、登々庵から山陽へ送つた手紙は、

御上京の後如何、御消息承度存居申ひ處、御手紙被下、辱拜覽……僕義も無異居申ひ、只鬱蒸に堪かね、暮比よりは納涼夜々出掛居申ひ、鴨水も此節納涼の節、嚙々御吟行と奉察い、……誠に烟花街の遊惡評も有之趣と申義いへ共、私共一向承不申、少々ありとも少しも齒牙にかゝらぬ事也……今二三年も京攝人性姦陰御經歷の上は、一夢御さめなさるべく、味方と思ふが敵じややら、敵と思ふが身方やら、九曲の玉より六ヶ敷人情……何れ大阪は儒者の居る

地にわらず、私も近時京都へ参ひ積り、下拵致可申ひ、只何事もせひく、毀譽にかゝはらぬ大豪傑の心志、御喪ひ不被成い事耳奉祈致い、此書火中

六月五日

登々庵

山陽外史雅兄

これより先、武元登々庵は、長崎へ下つて眼醫者で大當りを取り、シヨタマ儲けて妾を買うた程の大通、無論この人の手紙は廣嶋邊へは、内證々々。

登々庵の號は、打碑の癖あるより出で、別に泛庵の號あるは、長崎よりの上阪に、海路を取つたからの洒落しよれであつた、二庵の記は山陽得意の名文である。登々庵に、又古詩韻範の著述がある。山陽はこの書を激賞して「日本開闢以來の特見」と言つて居つた。

小竹は、混沌社の遺老、三嶋先生の義子、山陽とは一歳の弟。古賀精里に従遊し、山陽終生の益友であつた、初め南豊と號して居つた頃には、徂徠派の中山城山の子鼈山等と交際し、京攝間少壯儒者の巨擘として、文壇の革命を呼號したのは、恰かも新上りの我が頼山陽の近き將來を祝福したやうである。それも當然、京阪

間の故老は、このころ大抵凋謝し盡して、文壇自然の要求は、將に山陽小竹新進一派の頭上に落ち來らんとしつゝあつた。

此ころものゝそこより、どうでも見れば過給ひし、あるし君の御文なり、しみのすみかとも成はてず、さながら、今書出し給へる様なるも哀也、手を折てかぞふれば、四十とせあまり、むかしの事也、かたみと見るも、いまいくばくの年をか經んと、子なる裏がもとへ、つかはすとて、尾道、橋本吉兵衛氏藏)

梅 魁

其をりのたもかげうかぶ水ぐきの

あはれはかなく世はながれても

○

水ぐきのそこのころを今も知れ

子はあはれなるものにぞ有ける

中 編

(十二) 京 儒 者

三十にして而して立つ。當年の癩兒、狂豎、乃至は不孝者と、人の口の端にあらゆる悪名を呼ばれた山陽先生も、今や天の時を得、地の利を得、京に本據を構へてぼつゝ、人和も加はらんとするに及びては、もう好い加減におとなしき京儒者たらざるを得ず。京住居の劈頭第一、大阪の篠崎小竹に寄せた手紙には、いよいよ明かに自家の本分を自覺して、將來の方針までも暗示してゐるのである。

…… 鑰彌かぎやより貴書相届まゐりひ、履ついで(中井履軒)越こ智高洲ちこうしゅうの論(京阪住居を非とする)、頂門一針、不可逃避ふかへずい、…… 茶山へ歸らんと云所、茶山不受は必矣、國元へ歸れば私悴久太郎事、菅太中方學統相續に遣置つかひ所、太中家風に不應に付、差戻し申まをいと云書付を公へ出し、依舊廢息と云もの也、廢息と云者は、有過失而不得爲嫡嗣者にて、國元にては札付々々と稱へい、札付仲間へ這入、弟權二郎のすねかぶりにて、膝下侍養、碌々終歲、あれば隣國へ養子に行たが、不縁せられた、

もはやよい年なるべけれども、つまらぬもの開けば上方へもいていたげなが、いかな喰へぬで、すこく戻て來たげなど云て、家翁百歳後また上方へ出んと云節、たどひ要路に知己ありて、取持たる所甚難成事、生涯權二郎方の居いになり居ねばならず、左ある時、家翁家母安心仕可申哉……一度他領の人になりいへば、それより外へ参い所、國より不問、先三年其儘也、家翁も來上國負劍同遊、是より度々東遊可仕と申私も以來は時々歸省可仕申、また來春などは、家母家妹も當來と云事、僕可也に馳走いたすなど、家に居い時とは天地懸隔の體也……履翁、越兄の論、正則正矣、未熟知其中消息如何……(山陽手束帖)

五月九日

襄

承 彌 仁 兄

また別便の手紙に「當地(京)にては交遊少く、村瀬(栲亭)などよりは手を廻し、引寄い様に致いへ共、其地老先生(篠崎三嶋)の訓を守り、樹幟一隅不肯降参い、此事老先生によりしく被仰可被下い、讀史餘論、贊藪(大日本史)など、此地にても不自由に御座い、拜借するからは、暫置度被存い、論贊(日本外史)も今急にせんとしては悪から

む歎先無贊なりに下し(大阪へ)可申哉ども存い(大阪、鹿田松雲堂藏)などゝある。このごろ日本外史の稿本は、論贊なしのまゝであつたのを、小竹より餘論と贊藪とを借りて、参考材料に供したので、小竹が外史を寫本したといふのは、即ち此の頃であつた。故田口鼎軒博士は「日本外史と讀史餘論」を出して、大に論駁を逞しうされたが、山陽の自白ともいふべき、此の手紙を見せなかつたのが残念である。

山陽は最初京上りの後、一旦下阪して金谷興詩おききたの許に寓したが、頓て三嶋小竹父子の勸告もあり、矢張り京住居を定めることになり、初めは新町に卜居し、後に車屋町に移つた。

文化九年(三十三歳)九月には播州に遊歴して歸り、翌十年(三十四歳)の三月には、ことし六十八齡の春水が、十三童の孫聿庵の手を引いて、京の御醫福井丹波守(榕亭)の治療を受くべく上京の途有馬に入湯した。同月二十五日、山陽は下阪して篠崎方に待受け頓て入京、久し振りの對面に祖孫三人、迭みに無事を祝し合ひつゝ、車屋町の宅にゆるゝ逗留の上、四月の半、春水の西歸を山陽は西の宮まで見送つた。ことし九月、山陽は第二回の遊歴として、美濃に赴き、尾州、勢州を経て、年

の暮れに歸京した。山陽の高足弟子後藤松陰(その頃鎌山と號す)は、此行第一に入門したのであつた。

……然ば旅芝居(地方遊歴)の木戸番御理り被仰下、御尤千萬奉存い、箇様の儀御迷惑なるもの、誰も其通なるべしと察し申い、しかし此後とても西國探題の任は、何卒奉希い、小生御察の通りの張瘦臂、國元神邊、さては天下の望僕者に、耻をかきてはならぬときばり居い事、又京の風、そとを張らねば行かぬ事なども、御承知なるべし、それに鴨東の遊にて、金子入やうな事の理りと被仰い、は、何とやら事新敷きこと恐入申い、左様の義奉煩い所存は無之い、其義位は、私手元にてさし繰如何様にも可仕い、又先書申上い通の仕合にて、決意斷絶仕居い事に、御座い以來箇様の御疑被成下まじくい、○此度、外史前十冊下し申い、尤も大阪にて校合料遣し、相頼いて直に塗師佐へ出しい様に仕い、左様御承知可被下い、寫料は御約束の壹兩壹歩、京へ御越可被下い、是は此臘月にてよろしくい、尤それより早くならば京釜座夷川上ル所小石元瑞方へ、私名宛にて御出し可被下い、……今年尾張の方へ出陣仕い、旅芝居、西は(播州)は

ねたれ申い故、無據東へ仕組申い、未知中ルや否○神邊塾得人(北條霞亭)可賀の至御座い、小生とはちがひい、恬靜端潔の君子にて、協其職い事と奉存い、猶尾張より得閑いは、可申上い、……(備中、小野暎太郎氏藏)

十月 六 日

小野本太郎様

鴨東云々は、今も尙問題として残つてゐる。是より先、六月十日の手紙には、鴨東は今年の冷氣にて、一向はづみ不申い、新宮は此間割愛手切に及び申い、是にも金貳兩入り申い、是は妨千秋之業様に存い故也、以來は商賣専一、大キマリに御座い、御安心可被下い、とあり、七月二十五日の手紙には、新宮斷絶以後、甚寂寞として暮し申いとあり、尙又、新宮トカク今にかゝり合、難助也、しかし時々、のなぐさみに仕いのみ香川景樹の社中、大に私の放蕩を申立いより、如何の手より知れい事、にや云々とあるのは、正月八日付であるから、多分これはその前の手紙であらう。文化十一年(三十五歳)京住居も早や五年。其後の積もる物語を聴きもし、聴かせもせんと、廣島へ歸省の意を決し、大阪より明石船を買ひ、八月十二日明石上陸

姫路に菅原專輔、岡山に島孟徳方を主として、仲秋の月を遊び、頼て神邊に黄葉夕陽、郵舎をかどづれると、茶山先生は折からの江戸下りで不在であつた。その身の後を承けて、塾頭を勤めて居つた志摩の北條霞亭に送られて、装越で別れ、八月二十三日、廣嶋の邸に歸着して二十八日、築山捧盈を訪ひ、昔年の御禮を述べた。九月六日の晩には、杏坪、采眞(佐一郎)父子も來り會し、山陽は春水、聿庵共に筆を揮ひ、菊の節句には、妹三穂子も里歸りして、一家團樂の樂みに耽つた。杏坪は、去年七月代官となり、備後三次の任所に赴き、此ころ歸藩して居つたのである。

重陽、同諸弟妹、侍飲於二親

四閱重陽客異鄉。登高每望海雲長。今朝無復一人缺。

遍挿茱萸對舉觴。

以小研一匣獻家叔父杏坪丈人、丈人近爲郡佐

陶泓聊助薄書勤。別來望君携伴身。誰道墨池如爾狹。

涵濡十六郡間民。

越えて十一日、山陽は海路東歸の程に就き、十三日竹原に上陸、尾道にては熊谷

幾右衛門の挹翠園を訪ひ、神邊に藤井機園をかどづれ、廉塾にては長崎歸りの途逗留してゐる江戸の市河寛齋(米庵の父)に面會し、輒にて三嶋怡齋に誘はれて、菅三圃と同じく舟遊びを試み、又豊後の田能村竹田を迎へ、岡山に入りて姫井桃源を訪ひ、轉じて閑谷學校に抵り、往路に作つた黄葉亭記を便りに亭上に遊び、教授武元北林(登々庵の弟)等の招宴に臨んだ。

程なく歸京、往復途上の詩を纏めて「歸省亂稿」と題した。

文化十二年(三十六歳)正月二十八日、義弟權二郎の訃音に接した、享年僅に二十六歳。廣嶋城外の比治山安養院の邸上に葬り、春水は山陽に命じて、墓碣銘を代作せしめた。三月七日、その遺腹の子三千三(達堂)が生れた。四月六日、權二郎死跡はその遺旨により、聿庵(十五歳)は嫡孫を以て、祖父春水の家督を相續した。その翌夜、山陽は又歸省した。春水病氣の報を得たからであつたが、さして重病といふ程でもなかつたので、同十四日、山陽は歸京の途に就き、五月十三日歸京した。

ことしの仲秋には、武元登々庵と共に、湖上の月を遊び、浦上春琴、中嶋棕隠等と、

大津の好事家川村屋辨助(巖崎氏)を主として、石場の遠帆樓上に一時の雅興を擅まゝにした。

山陽は、このころ故ありて、一時徳太郎と改稱し、又小石元瑞の養女り江子(梨影女史)を娶つた、り江子時に十九歳。

文化十三年(三十七歳)二月十八日、母梅颯よりの手紙着。披き見れば、こはいかに春水危篤とある。折からの莊子の講釋を中止して、そのまゝ旅程に上り、二十四日朝、廣嶋に歸つて見れば、春水は早や十九日に歿して居つた、享年七十一歳。餘りの本意なさに、これより終生莊子を講じなかつたといふ。二十四日比治山に墓參頓て春水の行狀を作り、墓碣銘は古賀精里に託し、茶山の題額、杏坪の書、聿庵の建立にて、程なく立派に墓は出来上つた。

山陽は、三月二十二日、廣嶋を立つて歸京し、六月十七日、亡父の祭器(茶碗)を廣嶋に送つた。

文化十四年(三十八歳)山陽は新たに春水の喪に服し、儒禮に據りて三年の制を守つたが、これに就ての逸聞がある。ことし五月、備中の小野本太郎(移山亭主人)

に送つた手紙のうちに、「私も斯迄は精進仕ひ、今月より少々魚物などを用申ひ、閏房は三年禁絶、それにて別して氣分もよろしくひ、精進も三年と存ひへ共、日本人腸胃與漢人不同、拘古禮愚人所爲、期之喪、是先王典章と申ひ事、貝原養生訓にて見付、なるほど去年來腹のわしくなりひを心付、思合ひて、昨月切に仕ひ」とあるも、眞情の流露、むしろ掬すべきものがある。

同じ手紙のうちに、又、尙々、近來は外史を直し申ひ、少々の柱一本入かへど存ひ所、ねた迄外し、棟をも取かへど申様に相成ひ、論贊も書申ひ、又十年前とは見識かはり申ひ、……新田は御當家(徳川氏)の宗家など申ひへば、びつくりすると申人多し、それ故獨爲而獨看、四顧無可與語者、わはれ縮地の術あらば、貴公并千藏君(招月亭主人)などゝ討論仕度、直し畢ひは、直し本を下し可申ひ間、その方の本へ御直し可被成ひ」とある、外史の手入れは此後も引續きて非常の事業であつた。

(十三) 九州遊歴

山陽は、春水の三回忌墓參の爲、文政元年(三十九歳)正月某日京より下江、大阪の

篠崎小竹、武内確齋に尼ヶ崎まで見送られ、岡山にては小原梅坡を訪ひ、二月五日暮六つ頃、廣嶋に着した。七日、比治山へ墓参、十九日、大祥忌の營み滞りなく、二十一日、更に墓参。二十三日、門人後藤松陰、山陽九州遊歴の壯舉を聞き、跡を慕うて下つて來た。

かくて旅行の用意とり入り、山陽の行李には手抄杜韓蘇古詩卷三冊と、詩韻舎英一部を入れ、三月六日、好晴に乗じて正午前、松陰を拉へて旅程に上つた。隼庵等始め、二十日市迄見立ての人が多かつた。「要收燈底看書眼、去閱平生未見山」とはその折の風懷であつた。防州にては臺道村の上田氏に宿り、厚狹を経て赤馬關に入り、僧雲華が富士見の旅に上らんとするに邂逅し、豊浦に小田南咳を訪うて酒食を振舞はれたが、その酒こそ山陽先生を天晴の上戸に導いた、歴史附きの酒であつた。

山陽と酒とは、前生よりの夙縁でもあつたやうにおもはれるが、事實はさうでもなかつた。二十六歳の時書いた文章にも「書柄津人扇、「余不喜酒、而獨喜此」とあるのは、柄の保命酒である。保命酒では、一向山陽先生らしくはない。それな

ら、若いころ、夜遊びの盛んな時代に、大酔して歸つたといふこともあつたのは、何うだとの疑問も出るが、ソレは畢竟無理呑みといふもので、實際の酒味は、決して味はひ得なかつたのである。現在今のさき雲華に逢うた時の詩に、「雖無酒腸」といふ文字があり、小竹の評にも「是時子成未飲甚酒、故有此詩」とある。しかるに今や南咳の御馳走に預つて、一口グツとやつて見ると、これはいかに、キユツと臍の下までしみ通るやうな酒味の勁さ。今まで京酒の甜いやつに馴れて居つた腸の加減が俄に變つて、その味が忘れられず。今一つ重ね、二つ三つ、猪口の數の重なるだけ、いよゝたまらぬ酒の味、攝州灘の「鶴」といふ銘酒だと聞いて

年々攝酒附商舟。磊落萬壘堆岸頭。清醪最推鶴字號。

駕人醉夢上揚洲。

と酒黨に入つた記念をとめて。門人の松陰も、この詩に註して、「先生飲酒始于此」と言てゐる。東坡氣取りの山陽は、東坡も中年以前酒は飲まなかつた、少年多病怯杯觴。老去初知此味長。といふ詩があると言つて居つた。

余始不解飲、亦關有洋酒單呼鶴者、甚勁、余一嚥、覺其氣徹于臍、自是無日不飲、無

飲不酔、既而歸京都、釀酎不可飲、乃致伊丹酒數十品、揀其勁且可久用無弊者、歲致五大樽、顧視如鶴者、眞覺下駟、然導余於醉鄉、玄裳縞衣之力也、醉裏、

鶴より入門して、遂に劍菱にまで飲み進んだが、その口はどきは全く玄裳縞衣の力であつた。先考春水の三年の喪の精進落しに、生來始めての酒味を覺けたる口果報はいはずもあれ、九州行の大旅程に、この一大佳伴を携へ得たのは、一層の果報であつた。

も一つ酒の話の序に言て置きたいのは、山陽の酒は小杯のチビく呑みの方で、杯は和蘭渡りのギヤマンの鍾コップを用ゐたと自から言てゐる。又中井履軒も玉の卮を用ゐ、まづ酒の色を透かして見て、それからその味を賞美したのである。伊丹酒の上品なのは、その色、殘月が水に映つたといふ趣きがある、透かして見る杯でなければうまくはないと言た。

赤馬關の廣江殿峰に留別して、小倉に渡り、箱崎八幡宮を拜して、博多に入り、絶えて久しき龜井昭陽に招かれ、端午の佳節を松永花遁(宗助)の家に迎へ、その間昭陽と手を拉さへ、徵逐これ日も足らず。昭陽の女少琴女史ひなめの墨竹に題して、風流

を詫はなつたこともある。五月十四日には、上村大壽の宅に飲み、太宰府を經、久留米に樺島石梁を訪ひ、去りて温泉嶽を望みつゝ、未至榮城三五驛。忽從林際得温山」を歌ひつゝ、佐賀に入りては、草場珮川等諸儒の招飲に、鯨肉を賞し、大村より有明灣に泛び、長興に上陸して、五月二十三日、長崎に着した。

長崎では、登々庵の舊寓に行李を卸し、その間、頼川某に招かれては、その丸山の別莊に遊び、又高木機齋の超然樓に飲み、公用で佐賀藩から來た、古賀毅堂と通事の龍彦次郎(梅泉)の役宅で邂逅して、詩酒の興に耽り、中秋後一日には、清客楊西亭(兆元)の觀月會に列した事などは、長崎滞在中の好記念であつた。

このころ、清客のうちで、才名の高かつたのは、江芸閣(辛夷)である。この夏は、偶々船都合で來寓して居らなかつたが、その狎妓袖笑そしやせといふ丸山の太夫を見て、戯れに太夫の心意氣に託して、芸閣を憶ふ詩を作つたが、山陽先生を軟派あつかひにする連中が多かつたので、早速解嘲のこゝろに代へて、

未能茗椀換觥船。何復纒腰伴醉眠。家有縞衣待吾返。

孤衾如水已三年。

喪中に三年間闔房に遠がりて、別して氣分よろしと言つた山陽は、孤衾水の如き最愛の梨影女史に對しても、ソナ不義理が出来た譯のものにあらず。この旅行の途中にも「憶家」て「遙憶香閨燈下夢。先吾飛過振鱗山」と家庭かもひのサイノロヂーである程だから、餘り傍よりヤキモキせぬ方がよからう。

さても、當時の長崎行は、今の歐米見學であつた、荷蘭人を見、支那人に接して、海外といふ大觀念を養ふには、長崎へ旅する外はあらず。山陽も長崎へ来たればこそ、六年前に魯西亞へ従事した軍醫の口から、ナポレチンの話も聽いて、佛郎王歌も作り、「荷蘭船行」をも作り、一かどの洋行風を吹かしても見たものだ。清人陸如金品三といふ支那醫者や、楊西亭を相手に筆談して、大に月並調をやつたのは、山陽としては出來の好い方でもなかつたが、山陽自身も後年野田笛浦の長崎みやげ(清人の評語で飾つた其の詩文稿)に題して、黃綠譯吏得親清客半面、詫爲幸耳、且客皆商賈、但儻使相晨夕、未必有益也など、豪語はして居るが、お手元拜見といひたいやうな、當年自家の筆談振りは、チト如何はしう思はれたが、

聞 吳中人文淵藪、見今最著稱者何人

藪 謹問

下問、吳中人文淵藪見者邇來、在唐皆美皆慕者、只有潘石泉、董山霞二先生、爲最、其餘不可申數

如 再覆

袁隨園先生、在陋邦亦耳大名、料已下世、同時齊名者何人

藪

隨園已故、其時齊名者、沈歸愚、字德潛、諱恪士、才學相同、面貌相如、

如

の一節の如きは、一寸耳新らしくないでもない。

長崎滞在は、足かけ三月。八月二十六日に至り、長崎を發して海路熊本に向ふ(松陰は母の病とありて長崎より歸東)舟中、千離灘で大風浪に出逢ひ、辛うじて嶗原に上陸、それから天草灘に泛び、一首の詩を得て、大矢野嶋の澁江松石を訪うたが不在であつたので、塾生に對し、先生歸らばこれを渡して、と一封を遺して去つた。主人歸りて披き見れば、雲耶山耶の名吟であつたといふ。この一首は、北

條霞亭の評にも、西遊第一の詩だとあり、菊池五山もこれに賛同して、自分も五山堂詩話で吹聴したと言たぐらゐ、遂に古今の絶唱となつたのである。

熊本では辛嶋鹽井しんじまに招かれ、村井琴山の邸を訪ひ、加藤公の廟に謁し、菊池村の詩を作つた、菊池村老兩三家の句に就き、澤村西坡訝かつて問ふには、菊池は家數五六百の村なるに、といへば、山陽實はその地を踏んだ譯でもなく、好い加減に詩に入るやうにしたのだと大笑ひをしたといふ。

山陽は旅行中、始終眼鏡を用ゐて居つた、鹽井これを危んでいふには、當藩では風儀の取締嚴重にて、日廻りといふものが日夜偵察してゐる、他郷の客にして取調べらるれば、事面倒なり、道中は眼鏡無用になされよ、どの老婆心切に、山陽爲法之弊一至此哉とて、主客阿々大笑したとの話もある。

松橋から舟に乗り、天草嶋に渡り、更に綱樹嶺を越ゐて薩摩領に入り、阿嶋嶺を過ぎて、重陽の節を迎へ、川内せんないに宿り、鹿兒嶋を見物して、常芝居もあり、上方の歌妓、日夜その技を賣り、士人の家にも往來するさまに驚きて、前後兵兒謠を作り、昌平の舊友鮫嶋白鶴等の招飲に、櫻嶋の風光を下物にし、旅中の小田百谷に留別して、

大隅より再び肥後に復り、佐敷の橋本屋といふに宿つたところが、主人頗る讀書の才あり、禮記の講釋で山陽を困らしたので、肥後に過ぎたる物が三つ、橋本屋の主人と、村井の王建章(其一逸す)……と戯れたといふ。

古書畫通の山陽が、村井の王建章の書を見て、云々したのは最も、博多の松永方では、楊嘉祚の墨竹に垂涎したが、今一の盛茂燁の山水は、松永の周旋で手に入るこゝとなり、端溪の古研と、此の二つを九州みやげにしたのは、得意想ふべしである。

熊本に復りて、重ねて清正廟を拜し、阿蘇の雲影に別れて豊後に入り、田能村竹田を訪ひ、一週間ばかり滞在、又廣瀬淡窓を訪ひ、日田では山田子龍の如斯亭に飲みて、筑紫二郎の流れに臨み、牧園茅山と道づれになり、筑後河を下りては、文政之元十一月を豪吟しつゝ、十二月五日豊前に入り、山國谷を過ぎて、古城の正行寺に雲華を訪ひ、遂に導かれて羅漢寺に遊び、前後三日間、山水の美に酔うて、歸京後その圖を作り、雲華に贈り越したるが、

耶馬溪山水長卷を認め、此間成卷與匣、大舎上人へ下し申し、扱々懸御目度事

なりし京にて大に評判よろしく、春琴、竹洞皆々歛手い、山陽鼻高如天狗、一曝

三月二十九日

山陽

元吉 研契

(尾道、橋本吉兵衛氏藏)

後火災の爲、烏有となつたのは惜い事だ。

それより中津に遊び、田中信平といふ人を訪ひ、内裡に遠りて、小倉より乗船、赤馬關に復り、廣江殿峰の梅月樓に歳を守つた。

(十四) 山陽と梅颯

赤馬關に、文政二年の春を迎へた山陽(四十歳)は、殿峰父子に留別して、船中立春に會し、二月四日藝州已斐に上陸。母の梅颯は達堂(五歳)の手を引いて、迎ひに來り、一同廣嶋に歸つたのは、その夜の四つ前であつた。八日、親類縁者に招かれて、本川の料理屋に酒宴、十日、妹婿進藤彦介方へ梅颯共々招かれた。二十一日、妹三穂子は、暇乞の別れに來た、二十三日、いよく、出立歸京となる。

九州の山水に親しみ來りし山陽は、今度の歸京を幸ひに、母梅颯のお供をして

上方の花さかりを見せ申さんと、聿庵ともぐ、口を揃へて母を動かし、六十齡の梅颯は「おのれも年老ぬれば、やゝ弱くなりゆくに、今幸ひにかく健かなる方なれば、子供らの心に任せんと故權二郎の弟尙平の外に映雪尼といふ親しき老女同伴、初老の孝子に誘はれて、二十三日、雨中六つ半五つ前頃に、廣嶋の邸を立ち、婿の彦介に見立てられ、聿庵には町はづれの猿猴橋で別れ、

行かたの花にかくれし春雨に

しいて出たつたびころもがな

二十四日、竹原の春風方に入り、照蓮寺の墓に詣で、二十六日まで春風館に逗留

春風ものどけき宿に朝居して

のきばの山のうぐひすをさく

二十七日、尾道着、千光寺、淨土寺、西國寺見物、熊谷幾右衛門、橋本吉兵衛(竹下)らに歓迎され、二十八日、神邊着、菅茶山を訪へば北條霞亭の歸郷中、その舍宅を當てがはれ、ゆつくり落ついて酒事となる。二十九日別れに臨みて、

旅だつもたらないそぎそ老の身は

又あふことも末しらぬ世に

茶 山

晦日、矢掛泊り、三月朔日、板倉泊り、二日吉備津參詣、岡山を見物して片上泊り、三日堅嶋泊り、この日彌生の節、句なれども桃の花は見ず、梅はどころく、咲たり。四日、豆崎より襄は別れ、加古川の中谷(三介)さして行く、此方三人は曾根の松、石の寶殿を見廻り、日暮れて尾上の松、鐘を見に行き、姫路泊り。五日、明石泊り。六日、舞子の濱にて、駕立て、茶屋にわがり、酒たうべる。

盃をさすて引く手にまふらはし

すがたやさしき濱の松原

杯をさすてひく手に一さしと

舞子のはまの松ぞやさしき

西の宮泊り、七日、尼ヶ崎の川舟にて申の刻に大阪着。

この日、山陽は一足先き着阪、この前、春水上阪の節、宿泊したる和泉屋清兵衛方(大川町?)に母を迎へ、門人後藤松陰何くれと周旋する。山陽は暮れぬうちにと、近江町(釣鐘町二丁目)の縁家越智高洲、尼ヶ崎町(今橋五丁目)の中井抑樓、竹山の子、

蕉園の弟、齋藤町(江戸堀上通一丁目)の篠崎小竹方を歴訪して歸り、一同夜食の膳に向うた。天明八年八月、梅颯は山陽をつれて大阪に里歸りしてより、こととして丁度三十二年目、久しく見なかつた故郷の地の、いかに珍らしく感せられたであらう。

八日は、それぐみやげ物くばりに忙はしく、國元の聿庵、三穂子への文を認めなどして、梅颯は宿を出でず。九日、八つ頃から立賣堀の里方を見舞ひ、遅くなりて、越智へ行かず、暮れて宿へかへる。歸りて見れば、小竹來訪してあり。十日、抑樓の妻、梯子より、文して舟にて一緒に小橋の龍淵寺へ墓參、梅颯の父義齋の途、高洲の妻元子も同乗し、高洲と其子讓窩とは舟まで面會に来る。歸りには一同天王寺へ詣で、宿の都合にて抑樓方に泊り、山陽はこの日歸京。尙平は、小竹方へ寄宿並みに止まることにした。

十一日、午後博勞町稻荷、座摩、御靈參詣、稻荷の芝居は、折から淨瑠璃興行あり、一同芝居へゆき、同夜より京橋同心の長谷川家に泊ることとなる。十二日、道頓堀若太夫芝居見物。十三日、堀江市の側芝居見物、菓子入の袋、菓子ども失ふ。十四

日、中井を訪ひ、又鞆の吹田屋へ手紙を出して來阪のよし知らせやる。十五日、尙平まだ天王寺へ參詣せぬといふので一同、長谷川の母子もろ共參でる。口繩阪の淨春寺にまゐりて、梅颯は父義齋の先妻淺川柳子の墓を弔らひ、高津へ廻り、新町砂場の賑ひを見物して、尙平は小竹方へ歸つた。

柳子は、京の淺川文治(勝義)の女、父は越後新發田の藩士、母は近藤氏、柳子は古賢女にも愧ぢざる婦人で、義齋の妻として内助の力多く、義齋の家饒かならずして、男の兒三人共皆夭死したるが上に、その身も多病であつたから、義齋にすゝめて妾を蓄へしめんとて、人知れず絶食して、死人の如くになり、百方言を盡して、家の爲、子孫の爲、妾の事を強い、義齋も漸ちどその言に従うたが、その妾も病死して間もなく、柳子も亡き數に入つた。臨終の期まに、門人山口剛齋に遺囑して、來嶋氏(梅颯の母)を繼室に見立て、寶曆七年四月九日、三十六歳で息を引取つたといふ。剛齋は、大阪の人、後に石州津和野藩の儒者となり、西周、福羽美靜等は皆その門人であつた。

十六日、梅颯等一行は、中井方に歸宿、京より山陽に代りて門人今井良五といふ

者、迎ひに來る、十七日、高洲方を訪ふ、十八日、晝船(三十石)に乗り一同京へ上る、四十年前春水との新婚旅行に、京上りした昔を思ひ出したことであらう。「枚方にて例のむくつけく、もの言ひ散らして、くひ物商ふ、頓て漕ぎ別れ行くもおかし」。橋本より上りて、八幡參詣、

老の身のくるしき道もいはし水

まうでしけふぞうれしかりける

「その夜は籠の宿にとまる」。十九日、高瀬舟にて伏見に上り、近江屋といふ宿にて中食、稻荷の茶亭に駕立て、映雪は茶屋に残り、尙平と二人、御社に詣でんと行きける所、外の茶亭より、裏が見つけて、そこへゆき、一同京に入り、木屋町の寓居に着く。「高どのに登りてみれば、東山一目に見ぬ、比叡の山も見ゆ、夜は臥待月出で、鴨川にうつり、水の音お加しく、千鳥しばく啼く」。梅颯のうれしさは、込み上げのやうに見わたるのである。

二十日、祇園、長樂寺の花見、そこにて日暮れる迄あそぶ、映雪暮れぬ内先立て歸る、りね子(山陽の妻)代り來る、月峰上人(大雅堂辰亮)るすなり(双林寺)、女のあるじ、茶

を養、菓子出してもてなす。二十一日、壬生狂言を見る、東寺の供養、島原の太夫の道中をかけて、夥だしき人たちなり、島原三文字屋へつれ行き、……太夫のうはがりとやらんいふこととして見る……木屋町迄は一里ばかり、駕の價十匁のよし。二十三日、虫出しの神鳴る。双林寺長喜庵の書畫展覽にゆく。歸りは、祇園二軒茶屋にて酒もり、

……外史、精出し淨書仕居候……西遊詩淨錄、古跡大分有之、菅廟、菊池肥州戰場歌、加藤廣、太平寺、豊公陣跡、島原など申所、又赤關、長崎、薩竹枝など、懸御目度ものに、……(備中、小野氏藏)

泉 藏様

木 太郎様

三月二十三日、双林寺書畫展覽参りかけ、草々

彌生の春の花の都に、梅颯は孝子の孝養を受けて、けふも花見、あすも遊散と遊び疲れもせず、二十四日には嵐山行、三軒屋の雪亭にとまりて、二十五日朝とく出

て花を見る、いたう寒ければ、袂を身にまとひて、橋にいで見居けるうち、襄もその如くして出で来りしとは、實況さもあらんと思はれた。

あり明の月かけうすくなるまゝに

しろくなりゆくやまさくら花

○

不到嵐山已五年。萬株花木倍鮮妍。最忻阿母同衾枕。

連夜香雪暖處眠。

二十六日夜四つ頃、木屋町へ歸る。二十七日は平野、北野の夜ざくらに酔ひ、けふは襄行かず、足らず。二十八日は、吉野の花見んと旅だつ、ゆくゆく、奈良、三輪、初瀬、多武峰の花を見て、四月三日吉野山、さこ屋に泊り、四日、雨を冒し、一目千本のけしきを樂みしに、花は大方散り果てゝあつた。新庄に泊りて五日、當麻、法隆寺、龍田見物、十三峠に泊り、六日、大阪に着き、道頓堀鹽文といふ宿に泊り、七日、芝居見物、八日、京へ歸つた。九日、おりの髪結ひくれる、嵐山、吉野行のまゝなり、十五六日になる。花に狂うて半月ばかりは、髪を結ふのも忘れて居つたが、媳の手づから髪

結ひくれるとは、一家團欒、圓滿平和の美風、孝子の心情ゆかしとも床しく思はれるではないか。その旅疲れもあるを、けふも南禪寺、聖護院の遅櫻を見に行つた。「けふは徳太郎は往かず」、梅颯は山陽先生よりも、一層花に浮かれることを解する老夫人であつた。

十日、清水詣で。十一日、徳太郎風邪にて往かず、おりに同様、永觀堂、眞如堂、吉田へ参り、十二日、釜座夷川の小石元瑞を訪ひ、金山重左衛門方へもたづね、御所拜見。十三日、何方へも往かず、二階にて酒の所、段々徳太郎に逢ひに来る人多し、皆門人中にて對面する、山陽は老母のお傍に付き切りであつたのである。

十四日には、國元より聿庵、當月四日出の手紙が来る、伊助よりも、聿庵縁談の手紙、江戸よりは尾藤の手紙、杏坪の手紙も着き、十五日、それ〴〵返事した〴〵め、筆ついでに大阪の越智(元子)へ酒の事、中井(悌子)へ蒲鉾の事を注文した。「昨夜より風氣、小石の薬服用」。十七日、全快。十八日、等持院の開帳まるり。十九日には、雲華來訪。二十日、雨、おりに髪結ひくれる。

越えて二十三日、未の刻より珍客あり、夜四更頃に至りてやうやく歸つた、その

人は外でもない、梅颯の和歌の師匠香川景樹であつた。

二十四日、葵祭拜見。二十六日、來客多し、小石夫婦、同娘二人、秦夫婦、同娘一人、春琴、雲桂(秋吉)、熊谷鳩居堂主人、小森母子とかはる〴〵對話。二十七日、八幡臨時祭拜見。

二十八日、白河樂翁公(松平定信)の臣田内主税(月堂)來訪ある。その用向は、後に分るのであるが、慧眼なる讀者諸君は、早くすでに合點さるゝことであらう。

二十九日、高臺寺見物。閏四月朔、銀閣寺參詣。歸り途に、生洲(三條柏葉亭)へ往く、玉子焼、こゝのは至つて上品のよし、鯉の刺身、鯉の吸物、うなぎ食べる、味ひ尤も美なり。二日、大徳寺、今宮、關寺見物、神泉苑へ廻り、暮れて歸る。阿部、鎌洲、大阪より來訪。三日、東本願寺、枳殻邸、西本願寺、飛雲閣見物、いづれも雲華の案内であつた。

五日、湖水見物とて白川越、辛崎の松の茶屋にて休息、三井寺參詣、石場から石山の宿につく。六日、再び辛崎、三井寺へ復り、石場泊りの筈が、石山の螢がよいと聞き、柳屋に泊りて螢狩。七日、石山寺參詣、舟にて石場の播磨屋に歸り、大津の札の

辻にて、駕かり、足も痛まねば、徳太郎を乗せ、逢坂山を越えて乗りかほる。日の岡を越え、蹴上で休み、暮れぬ内木屋町へ歸つた。

八日、雲華と、山陽が長崎で心易くした僧日藏と二人來訪。九日、岡崎の景樹を訪ひ、金子百正持參す。九日、宇治行、山陽夫妻の外、雲華、日藏等同伴、菊屋に一泊。十日、見物の上、伏見へ出で、鮎庄で中食、山陽夫妻に分れ、下り舟にて初夜頃大坂八軒屋へつく。十三日、中の芝居行。十四日、篠田をたづね、順慶町の夜店見物。十六日、吹田屋を訪ふ、山陽京より下る。十七日、網嶋へ遊散舟、

釀錢舟載酒。江渚美春晴。漁村花漠々、祠樹鳥嚶々。

永春雖有閏。老境易傷情。

小竹

十八日、舟にて住吉行、堺へ廻り、山陽は舟にて待居る、火ともして住吉社へ參詣、よし原に螢とぶ、おかしき歸るさのさまなり。

十九日、山陽は母に代りて越智、中井方へ暇乞にゆき、梅颯は「大丸へゆき、帶半幅物どこのと」。中井夫妻より、廣嶋の三穂子へみやげにとて、草履八、口紅半切百枚、小風呂敷、山陽へ小菊五帖、扇子一柄を贈つた。

二十日、篠田を出で、茶舟にて尼ヶ崎まで松陰送り來る、山陽は母を護りて歸藩の途につき、この夜西の宮泊り。二十一日、甲山を見やりつゝ、

津の國にいつかきてみむ甲山

けふはあどにもなりまさりつゝ

須磨、舞子にて休息、大藏谷泊り。二十二日、姫路。二十三日、三石。二十四日、岡山の中嶋泊り。山陽は中山下の小原梅坡方に宿る、備中の小野招月亭主人(泉藏)來訪。二十五日、矢掛。二十六日、神邊の茶山方一泊。二十七日、北條霞亭に對面、三原泊り。二十八日、四日市泊り。二十九日、未の刻海田市につき、徳太郎も海田より駕に乗り、まつ先に屋敷に入り、案内して續きて家に入り、打揃ひ無事にて祝ひ斜ならず南(杏坪)進藤へ知らせ、夜に入り、風呂を仕廻うて、南父子(杏坪、采眞)來り、三穂も早く來り、一同酒宴して祝ふ、三穂とまる。

梅に立ち、若葉に歸る、往復、百日間上方見物の大旅行は首尾よく果された。母を京に迎へた折の山陽の心づかひと満足とは、その詩句にあらはされてある、「新婦多欠闕。百需太蒼黃。戒婦具酒食。勿問有與亡。母曰嗟吾子。差使人意強。」

かくて山陽は墓參の上、五月六日廣嶋發船、歸京の途、暫し三備の間に滯留、九月のはじめ歸京した、去年正月京出立以來、約六百日は、旅塵匆々のうちに過ぎ去つたのである。

歸京早々、美濃から來た女弟子江馬細香女史を伴ひ、雲華共々、吉田山に登高の遊びを試みたのは、重陽の節であつた。

……女弟子細香なるものゝ墨竹一幀進呈致し、暫時御掛下し、御樂可被成し、此婦人、奇女子にてい、容貌頗可觀、而誓志不嫁、近頃入京、去る處の詩會に拒霜花の題を出す、席上拙作、此女子にあてし詩如左

亭々獨立拒霜威。寄恨東風誤嫁期。獨有芳心拋不得。

聊和朝露染臙脂。

御逢なされずとも、此二十八字にて御想見可被成し、近頃は御節儉にて明人畫幅などは御求もなされず、是様のものにては、御慰みに可被成と存付し故、幸ひ表裝致有之を下し申し、

書添申し、此女子の墨竹、名高し、共、玉隣流の俗竹なりし、僕の門に入しより

醫其俗いて、此幅などは眞の明人と相見へ申し、下の石の皴法など、甚得南宗之旨し、あまりよく出來可愛しゆへ、貴公の事存出、千里奉贈し、御愛玩被下しへば、於僕も大慶也、女子も喜可申し、○當夏は僕も已に上鬼錄所なりし、疫症にて下地の病にフクリンカケ、甚困入申し、此節復常し、……(尾道、橋本氏藏)

孟冬二十四日(文化十四年)

襄

元吉詞契

これは前々年十月の手紙なれど、細香女史の話の序に引用したのである。山陽先生も好い女弟子を持たれてお仕合せなことかな。今一人、尾道に玉蘊女史(豐子)といふ女畫師があつて、何うしても山陽先生でなくば嫁入りせぬと、ダッを捏ねたが、事の成らぬを恥かしがり、その後は何事があつても京へは上らなかつたとは、田能村竹田の話であるさうだが、或る人の手紙には、玉蘊も其後廣嶋の才子(山陽)を慕ひ上京致し、登々主人(武元)なども彼是心配も有之し……其後又伊勢の白鶴鳴てふ蕉門徒、美少年にて畫も少し出來申し、が筆端にて挑み申し、彼才子をも打忘れて、玉椿の八千代、末松山波も、こゝろなんと契申し、月草のうつろひ易き

(十四) 山陽と梅麩

九三

心哉と、本吾噂致し申ひ、……玉蘊は三原某氏に嫁し申ひ、文人の歌妓店をひき申ひ……(はがき文學)とあり。此の女史に比ぶれば、誓志不嫁といふ、なま鼻子さん(細香女史)の方は見上げたものである、橋本竹下たるもの安心して可なりと云て置かう、ところが後年、細香女史より山陽に次韻した詩に、舊歡一夢十三年。猶記投儂詩句妍。の句がある、山陽これに評じて、能不記乎哉とある、一句含蓄、惜んで發せざるの妙あり、御参考まで書加へて置く。尙この外に越前福井の豪家の娘片山お蘭といふ、心易い女性もあつたといふ。

(十五) 山紫水明處

文政三年(四十一歳)正月二十一日、聿庵二十歳の春を迎へて、同藩士戸田勝馬の妹國子を娶つた。去年梅颯の京上りの折、下相談のあつたのがそれである。

このころ、木屋町の水樓へ、江戸の大田錦城が來訪した。山陽はこれを歡迎して、自慢の伊丹酒を振舞ひ、胸裡九經成磊砢。澆餘勿惜發新談と、その舊著九經誌の事に言ひ及ぼした。錦城は京に入りて久し振りに、江戸で飲ひやうな勁い酒味

を喜びて、子成才學文翰、壓倒京師後生、……唯察其氣宇、一時爽快之士也、酷肖關左之人矣、京師關東士風之異、唯酒味足以知之と、到頭錦城は山陽を江戸ッ兒にして仕舞うた。

ことし十月七日、男辰藏(後辰之助)が生れた、その知らせを得た梅颯は、十一月朔の日記に「自京書狀來る、かりに安産、十月七日辰の刻男子出生」と書き留めて置いた。

十二月十二日、廣嶋では、聿庵故あつて妻を離縁した。

文政四年(四十二歳)梅颯は孫辰藏の初節句を祝ふとて、三月二十五日、京へ遣はす、幟下地縫ふ、同二十七日、幟染めに遣はす、めうがや、四月六日、京へ幟贈り遣はす、木綿二幅、一丈七尺餘、まねき六尺餘、染賃十五匁。

この秋、山陽は同じ木屋町の内に居を移して、菴薇園と題し、樓を春暎樓と名けた。このころ、江戸の佐藤一齋來訪、山陽は雲華と相謀りて別宴を張り、席上雲華の愛玩する「袖裏嵐山」と、山陽の泥書した奇石は、一齋が記念に貰ひ受けた。

文政五年(四十三歳)梅颯への新年狀に、

……冬年は尊書久々にて相達難有拜誦仕い……其節は被思召寄、辰藏へ春服御贈被下、頂戴爲致申い、色も仰被下いとは違ひ、甚似合申い、模様も御好被遊い事と相見へ、大に男らしく御座い、三穗よりくれられい、てんち羽織も、鳥柄大に辰藏に似合申い、……三日は頗長閑に御座い故、昨年祇園へ参い事存出、小池八幡宮へ私門生兩人カハルく抱いて参詣致させ申い、其節彼拜領の綿入に、三穗よりもらひい羽織させ、連れ参り申い、おばさまに貰うたのぢやと、度々申聞い故、おばくくと申事覺え言ひ申い、よくあるき申い、少しの間も目放しなり不申い、扱も子を持ち親の恩を知るとは、よく申いものと存い事に御座い、餘一などは皆々わなた様御世話にて成人仕い故、苦勞を覺え不申との事に御座い……

正月三日

裏

母 上様

餘一同覽

……私復舊名(久太郎)い事、先書にも申上い……(手紙雜誌)

八月八日、隼庵(二十二歳)は、同藩の京邸留守居寺川茂司馬の妹^{まは}臯子を後妻に娶つた。

十一月九日、冬至の日、山陽は三本木丸太町上る處に移り、水西莊(後)に亭を構へて山紫水明處の題名は、普ねく文林に聞え渡つた。

これより先、山陽は一旦京を去りて、大阪に移らんとし、篠崎小竹は網嶋の地(今の藤田男爵の邸地)を見立て、山陽もその景色が氣に入りて、不待出門爲一笑。書窓直面大江横と喜びはしたが、相談は纏まらなかつたのである。

ことし仲秋、岡田半江と同舟大阪に下り、小竹は十六夜を卜して之を網嶋の枕流亭に迎へて酒宴を開き、翌十七日には尻無川に^{はせつり}蒸釣を催した、五日間滞留の上、山陽は歸京し、更に膳所、宇治に遊んだ。この間山陽は、春水遺稿を整頓して國元へ送り届けた。

文政六年(四十四歳)、二月雲華の爲にした八大家文の評點があらまし出來上つた。この春、小竹夫妻入京し、同伴して嵐山、宇治に遊んだ。

さても、三本木の新宅は、山陽の氣に入つたが、茶山は今一息感心せぬと言ひ越

した。小野招月亭主人が、新居のさまを想望して、「飽聽潺湲帶舍聲」といふ詩句を贈つたのを、茶山は横槍を入れて「飽聽三絃徹曉聲」だらうと擲論つた程で、山陽もこの點だけには少々頭痛の體となり、更に然るべき地處を卜したいとて、茶山へ相談をかけた、その手紙に、

……扱小生只今の居の義、此方にも如先書被仰下、夫より不安に存ひて、買得
 ひ議相止居申ひ處、又々廣嶋よりも度々先生より如何敷段、被仰遣ひ旨申越、
 御親切の義、彼方にも感荷仕ひ義と相見へ申ひ……早々改卜ひ積に相成、此
 節處々搜索仕居ひ、何卒もはや尻替不仕様に仕度、それ故、人の家借ひ事は相
 止、地も家も我物に仕度と、瘦臂の手に合ひはどの處をと存じ、見あるき申ひ、
 町の内にては中、下立賣又は兩替町の三處、外は町儀等ヤカマシク、非書生所
 堪、此三處の内、中立賣に二十間に十三間はどの明地有之、老木も相應に有之、
 因樹縛屋、講誦其中可仕哉と奉存ひ、地料銀百枚と申ひ、御存じの藤谷仙右衛
 門(富士谷御杖)取れひて、賣拂ひにて御座ひ下邊なれば、それ程にても入手が
 たく可有之ひへ共、窮北にひ故、如此歟と相見へひ、しかし其上に築家にひは

と都合百金はどには及可申ひ、傾囊倒囊ひて、一勞永逸と存ひへども、アマリ
 北邊故、爲業體、且は孫謀に如何可有之ひや、又遊山玩水は大概東方に御座ひ
 處、往還も大體の事にあらず、小生脱官網、在此、而自匏繫於個様無韻之地、胡爲
 者也とも存申ひ、聖護院岡崎邊にて買地卜築ひへば、如何様にも可相成ひへ
 ども、孫謀には如何と申もの多しと存ひ、小生一代は何方にても可也に糊口
 可仕ひへども、子孫に至り困窮可仕哉とも奉存ひ、……只今の處風景などは、
 少陵浣花草堂と申様に有之、歌吹はこらへひ覺悟にて、塾なども建添、庭園な
 ど餘程拵ひて、無一草一木不鬱然と相成ひへども、如何にも子孫長久の地に
 は如何しく、……

五月五日

巖

拜

茶山老先生函丈

尙々移居以來の詩も大分有之、……水色山光朝暮變じ、中々秋風は未吹ひ
 へども、土地柄如何しくと心付ひへば、トント不面白い、卜居ひ事、躁急にも
 不及ひへども、老母を不遠迎へ申度、百年不遷の居止を見せ申度、少し非不

急い、……（吳、菅波鶴雄氏藏）

その結局は、何うなつたか、多分然るべき場所柄なく、そのまゝ遂に永久の居宅となつたものらしい。

この夏、伊丹に遊び、大阪にて田能村竹田に逢ひ、竹田は頓て入京、双林寺に寓した。七月七日、陶工にして文雅の名ある木舎木米を訪ひ、秋には、竹田と同伴大津に遊び、十六夜には近所の清暉樓に月を賞し、頓て又下阪、小竹を訪うた。

十一月六日、冬至、復藏後又二郎が生れた。梅颯日記に「十二月十二日、自久太郎書状来る、先月十五日、出り、安産、男子出生、六日冬至ゆゑ復藏と名く」。

山陽、このころ病氣禁酒、除夜の作に、「一病不死舊顔面、又與梅花重相見」の句があつた。

（十六）春秋侍遊

文政七年（四十五歳）の春、竹田の西歸を大阪に見送り、三月の節句には門人村瀬藤城を相手に、久し振りの酒宴を開いた。

212302

母梅颯（六十五歳）は、この春再び上方見物を思立ち、りさ子といふ老女同伴、二月晦日海路廣嶋出立。三月十四日、來阪。山陽は出迎への爲、六日下阪、後藤松陰の宅に滞留して居つた。十五日、淀河を廻りて、八つ頃三本木につく。十六日、嵐山行、辰藏（五歳）相駕にて連れ行く。十八日、智恩院の花見。十九日、平野、北野參詣、大倉笠山夫妻（さと子、袖蘭）同伴。二十一日、智恩院、清水花見、笠山夫妻同様。二十二日、小原梅坡の外、春琴、荊田、笠山夫妻等來訪酒宴、久太郎、風氣、酒食、味なきよしといふ。二十六日、久太郎、床あげ。二十七日、村瀬藤城美濃へ歸るに付、山陽、砂川にて送別の宴を催す。廿八日、藤城歸る、山陽蹴上まで見送る。廿九日、小田百谷、江戸行の酒宴。四月四日、山陽夫妻、袖蘭同伴、下阪、道頓堀樹市に泊る。五日、龍淵寺墓參、高津にて湯豆腐。六日、中の芝居見物、忠臣藏、切に梅ヶ枝、（角の芝居、中村梅玉の由良之助、澤村國太郎の梅ヶ枝の誤記ならん）。七日、木津川舟遊び、大船り、珍らしがる。八日、どらや、高麗橋の名物饅頭見物、越智中井篠田歴訪、阿彌陀池の誕生會を見て、道頓堀より乗舟。九日、伏見へ迎へに來た辰藏と相駕にて三本木着。十日、伏見稻荷祭見物、り同伴、梅坡來訪。十一日、風邪。十二日、同じく。十三日、快

212302

氣、加茂の御影祭見物。十六日、葵祭拜見、久太郎も初めてなり。十七日、梅坡松永花通來訪。十八日、山陽は二客同伴、智恩院に遊ぶ。十九日、復藏をつれて梅颯山陽同伴、砂川へ行く。二十一日、木米來訪。二十二日、梅颯、山陽は笠山同伴、江州行。二十三日、石山より膳所に遊び、歸京。二十六日、寺川(聿庵妻の里方)へ山陽同伴にて行く。二十七日、梅颯は笠山に招かれ、山陽は梅坡留別にて清暉樓へ。二十八日、山陽同伴、景樹方へ。二十九日、梅坡見送の爲、山陽は春琴を誘ひ、宇治、伏見行。五月朔、山陽歸宅。六日、長喜庵へ子規、水雞聞に行く。八日、瀧原宋閑を訪ひ、當座(歌)詠みかへる。九日、鈴鹿豊後守へ行く、同様。十一日、山陽同伴、笠山と宇治行。十二日、宇治より舟にて三須、淀邊遊散、伏見泊り。十三日、歸京。十七日、長州楊井靜齋來訪。十八日、瀧原の歌會行。十九日、岩城清五郎の振舞にて丸山橋の寮へ。二十三日、三本木吉田屋の書畫會見に行き、賀茂季鷹に初對面。二十四日、吉田山神恩院の時鳥さき、山陽同伴。二十六日、東寺の田邊玄々齋振舞にて、朱雀の生洲丹波屋へ行く、門人宮原節庵お供。二十八日、夕、龜松といふ座敷にて、笠山夫婦、裏りぬ、兩家の子供つれ遊ぶ、袖蘭に舞を所望して、山姥、おちやめのと、鐘ヶ岬舞ふ。

晦日、賣家あるよし大工しらせ、見に行く。六月四日、家の事聞合せに久太郎、笠山へ行く。「久太郎過酒ゆゑか、直に酔ひ、ねる事、度々いふ所、今日御遺書(春水の)を掛け、其前にて誓をたて、過酒禁す。五日、祇園の銚、かりぬと見に行、室町邊にて見る。六日、宵山見、買家の事にて久太郎占ひして、若槻幾齋へゆく。七日、山銚見物、鳩居堂來る、家の事相談なり。八日、朝の内、家の事成りたる所、又鳩居來り、町役勤める者、望み手わりて、其方へ賣り度由、事不成、晚方、小石來り、其事に付、何か理窟いふ。山紫水明處は、是にていよく、山陽終焉の地となる。十六日、山陽同伴、四條へ涼み見。二十日、因幡藥師芝居見物。二十一日、景樹招く、……五つ頃來り、歸る時は早や東じらみになり、ねる時、鴉啼く。

二十三日、伏見より下り、二十四日、大阪淀屋橋の宿に着く。「裏篠崎へ往き相談し、玉水町(西國橋の西)の宿へ移る、七つ頃より小竹振舞にて、木津川口迄舟下げ、又登せ、難波橋の花火見る、小竹夫婦(さち子)弟耕庵、武内確齋、後藤松陰同伴。二十五日、小竹案内にて、山崎鼻中之嶋にて、天神祭舟渡り拜見。二十六日、小竹の誘引にて大川舟遊び。二十七日、山陽返禮の心にて、阿部鎌洲同伴、小竹夫妻、耕庵の外、確

齋廣瀬筑梁等綱打の遊を催す。

二十九日、歸京。七月四日、久太郎、按摩しくれる。八日、紅の涼み。九日、腹痛。十日、二條すゞみ、笠山夫妻、春琴同伴。十一日、岩城振舞にて糺へ。十五日、御所御燈籠拜見。十六日、大文字に付、木屋町岩城の借座敷へ行く。久太郎は暮れぬうちより往く。小石夫妻、春琴等同伴。十七日、山陽風邪。十九日、宅にて歌會、豊常父子、小石夫妻、曉月尼、瀧原妻、鈴鹿母等を招く。二十一日、辰藏、復藏、撫でに行く。辰はよく、復に熱あり。二十八日、嶋原燈籠見に行く。八月六日、長藩京留守居内藤十郎兵衛士謙案内にて糺へ山陽同伴。八日、大堀正輔に歌かき貰ふ。十五日、月見亭〔山紫水明處〕にて書生衆も共に酒のみ、詩出来る、ヒガイの焼たるはも、蕨椎茸などの玉子とち、大平、其外芋、豆腐、干鰯、うになど肴あり。山陽の詩に

中秋無月、侍母

不同此夜十三回。重得秋風奉一卮。不恨尊前無月色。

免看兒子鬢邊絲。

十七日、瀧原誘ひにて、信樂屋月見。十八日、景樹來訪、雞鳴頃去る。

十八日夜、三本木なる頼のもとにて

月影にかゝらんと見し山のはの

くもも居てこそ待いでにけれ

月くらき山陰なりしわがさとも

見わたるまで夜は更にけり

景 樹

十九日、高臺寺萩見、眞葛ヶ原の月見。二十四日、大佛萩見、笠山夫妻同伴。二十五日、吉田古寺にて豊常の饗應、山陽同伴。二十七日、四條芝居見物、山陽節庵柘植葛城〔河内國分の門人〕同伴。二十九日、二孫同伴高臺寺行。閏八月三日、りね子母方の祖母、同叔母、従弟藤右衛門近江より來訪、南禪寺へ行き振舞。八日、立齋山陽の大叔父傳五郎の孫、江戸より歸京、三條生洲にて饗應。十六日、景樹へ申遣はす所、障子貼かけ居るとの事、夜に入らば雨降りても参ると申す事にて、夜に入り來る、例の長座明ぼしの高くわがる頃迄話し歸る。

樂月十六日の夜なりけむ、頼襄が三本木の水

樓に集ひて、語らひ更して、よめる

景 樹

すむ月に水のこゝろも通ふらし

たかくなりゆく波の音かな

白雲にわが山かけはうづもれぬ

かへるさ送れ秋のよのつき (桂園一枝)

二十一日、白川松茸狩、山陽夫妻、岩城、齋藤良策、大阪の醫生等同伴。二十二日、江戸梅月への返書を認める、山陽より帶地を贈る(二洲歿後十二年目)。二十五日、晝迄物くはず、久太郎考への煎薬用ゐる、晝過ぎて茶漬二碗たべる。二十六日、竹内能見物。二十八日、又ゆく。二十九日、お三穂當十二日夜九つ過に安産、女子出生、名萬代。夕、山陽同伴下阪。

九月朔、日本橋の舟宿にて夜明け、太左衛門橋北詰藤勝泊り、大西芝居見物。二日、中の芝居見物、山陽、小竹の妻さち子、男讓、松陰の妻まち子同伴、前狂言國姓爺にて嵐橋三郎の和藤内、中、染分手綱、阪東重太郎の重の井、切、皿屋敷嵐小六のおきく、この芝居行は小竹、松陰兩家内の振舞であつた。この夜、松陰方に宿る。三日、舟にて住吉參詣、小竹方に泊る。四日、梅颯は中井へ、山陽は小竹方に泊る。五日、小

竹催しの遊散舟、山陽催しの網打舟、網打舟は「代一貫文、いな二つとれ、大失意なり」、中井へ歸つて山陽は竹山先生遺稿「癸陰集」を讀む。

梅颯日記には、その記事は見ぬないが、山陽が大鹽中齋より趙之壁筆蘆雁の幅を贈られたのは、確かにこのころの事であつた(山陽の文に「此歲秋八月とある」)。

……余初見大鹽子起、觀之壁間色動、後送母過浪華舟遊、子起同載、酒間忽曰、子欲吾宿雁邪、遂棹舟至其家、呼燈出以見、貽子起能吏解風流、又能割所愛、此幅不易獲、此人亦不易逢、子孫其實之。

幅を獲た順序は此うである、藤堂詢菟侯の文に、

……二子皆當時人豪、各自書其來歷于檳蓋、珠可買、而檳亦未易還、……福田鳴

とある。さしも名高い幅も山陽歿後、所々輾轉した模様は、これで分る。

六日、歸京、八日、瀧原歌會出席、五つ過久太郎迎へに來り、歸る。九日、節句祝の後、山陽夫妻、辰藏、笠山夫妻、同娘同伴吉田山行、十二日、細香女史來る。十三日、又來る。十六日、眞如堂初もみぢ見。十七日、歌會、羽倉瀧原、小石夫妻、曉月尼來る。十

八日、高雄紅葉見、山陽夫妻、春琴、笠山夫妻、竹洞、細香同伴。十九日、榎尾、榎尾めぐり、歸京。二十日、明日光格上里、東山御幸拜見の爲、日暮より出町へゆく、山陽夫妻同伴、門入葛城お供。二十一日、豊榮とよあきのぼる日、長閑なり、御幸、日出で、五つ前どもならんかし、拜見の家、東側にて、御簾に日かゝやき、御影も見ぬす、西側にて、拜見の人は、御すき影、拜みしといふ。二十二日、嵐山紅葉見、山陽、榎園（小石）、雲華、春琴夫妻同伴。二十三日、通天紅葉見、笠山夫妻、細香同伴、辰藏、復藏をつれる、辰藏（五歳）、通天までありき、又大佛まで歩行く。二十五日、長樂寺紅葉見、下女と二人、雲華來合はず。二十七日、久太郎、岩城留別にて、朱雀丹波屋へ行き、暮れて歸る。二十八日、瀧原歌會、梅颯、餞別の歌二十人ばかり詠む、久太郎、暮れて迎へに來り、四つ前歸る。二十九日、永觀堂紅葉見、山陽夫妻、瀧原夫妻同伴。十月朔、雲華催しにて、砂川へ行く、山陽夫妻、榎園、春琴、梅逸（山本）、細香同伴。二日、夕、景樹を招く、三更過に歸る、つぐみ五羽、燒鴨とせりやき、蕪ふろ吹、其外蒲鉾、うに、小魚、かばやき、辛子あへもあり、慈姑もあり、歌かき貰ひ度よし申せば、來る五日、何か認め持參せんとといふ。四日、四條人形芝居見物、五日、笠山夫妻、細香の餞宴にて、山陽夫妻、榎園、春琴同伴、景樹

暇乞に來る。六日、留別のつもりにて、昨日の人数よふ、細香宿す、寺川より鯛、藻魚、雲錦、饅頭贈り來る、景樹より送別歌短冊五葉、はも一、蛤一、贈り來る。七日、伏見に着。八日、下阪、大川町尾道屋に休息、山陽は小竹及び齋藤方策を訪ふ、松陰來訪、西宮泊り。九日、明石大藏谷泊り、

すまの浦松のこすゑに影さして

夕日ぞおつるあはぢしま山

母坐籃輿兒草鞋。隔着興窓相傳杯。小歌野店擘霜菊。

兒獻母酬咲顏開。葛原聽妓酒如澗。華港泛鷁肴如陵。

歸程一杯還可樂。回首兩都成陳迹。

十三日（岡山）、久太郎、小原（梅坡）を訪ね、跡より主人とつれ立ち來る、大之介（小原）一宿す。

老母又々アチコチ仕ひも大儀がりひ、且其方、隱居留守、外同居も有之、如何し
くひ、此方、宿混雜と申内、樓上頗洒潔にて、頗ヒツソリ致居ひ、肴も魚屋にて自

由にひ、カノ大瓢、私絮帽添、此者に御持せ、早々此方へ御越可被成、其餘は如何
ども可致い、其路不甚遠い、早々以上

十月十三日

魚甚にて
頼久太郎

(梅 坡 宛)

十五日、神邊着、茶山詩會。十七日、神邊を立ち尾道より乗船、門人宮原節庵宅に
て休息、橋本竹下來訪。十八日、竹原着、鹽濱の聚遠亭にて休息、船遊び。二十日、照
蓮寺墓參。二十二日、出立、二十四日、廣嶋へ歸邸。二十五日、山陽、比治山墓參。

別燈情話讀書堂。座覺冬宵却不長。豪奢原非吾家事。

侑觴聊伴水仙王。

聿 庵

二十八日、杏坪(六十九歳)催しにて、一本木船遊び、餘一(聿庵)大に酔ひ、大迷惑。十
一月五日、杏坪の殘夜水明樓にて饑宴、久太郎揮筆夥し。六日、山陽出立。

花も見せつ紅葉も見せつわが母に

わかれてかへる雪ふらぬ間に

松子山まつ子はわれどかさなれる

は山しげやまこねぞわづらふ

襄

十二月六日、山陽歸京。

(十七) 外史の手ばなれ

文政八年(四十六歳)三月、仲父春風(七十三歳)四十八年振りにて竹原より上京、湖
水遊覽案内、四月十四日出立、歸國。九月十一日歿す。

三月二十八日、辰之助痘死(六歳)、五月二十六日、三木八郎(後三木三郎)生る。山陽
時に病床に臥した。

……此地分婉男兒出生……健固の兒と相見ひ、梨枝も如常、起たり居たり、世
話いたし居ひ、去年は御相伴にて遊びありき申ひへども、當年は其報いに
御座い。

瀧原夫婦、去年の事を存出、招き申ひ、別紙歌出來申ひ、私例の習はぬ經を

たらちねとまどゐし人と酒くめば

こぞの遊びのこゝちする也

(十七) 外史の手ばなれ

鴨川の小鱼、あぶらだきの茄子、鮓の刺身、あら名をやみそ汁、あひるのせんば、など皆々御存じの料理にて……

此度第一御禮可申上は、小夜着地被遣、夜學又夏午睡のすそ懸に可仕旨、午睡は不仕、夜學はこれに對しても屹度可仕、慈母の賜、永以拜戴、不負此被様に可仕と、別て難有奉存、誠に難有義、數回遙拜、感泣仕、兎角酒過ぎ、直に寝、事時々有之、此癖相止め、如神邊先生(茶山)、屹度量を相定め、酒後にて夜學出來、様に可仕、追々燈火可親相成、今日明朝の際、一年の半に御座、たしか先君子御誕日も、今日と奉存、是を立誓の日と仕、久しきものに御座、へども、ウカ／＼不仕、出精不朽の業を成申度存、何卒御歌頂戴、座右に掛置、て養生、長壽、爲家、爲身、爲斯文に仕、様の義、御詠出、御戒可被下、他人の異見より十倍と奉存

又二に何よりの品、御惠被遣、早速頂戴させ、何ぞ調遣可申、梨枝も難有がり居申……

又藏、改又二に仕、事は先便に申上

六月廿九日

裏

母 上 様

餘一、皇同覽(心の花)

四月下旬、山陽は下阪、篠崎小竹を訪ひ、雲華同伴、南紀に遊び、野呂介名を訪うた。

八月朔、久太郎より書狀來る、小倉野(京名物の菓子)添ふ。篠崎内かたより紅

木綿、煙草道具贈る、此節久太郎、同方に逗留なり。

篠崎妻(田嶋)さち子、故ありて田中氏に作るより、梅颯への贈り物に對して、廣嶋よりの禮狀に、

折から御いとひ可被遊、當夏は、あつさゆるやかにて、くらしよく存、せつかく去年の夏かたの事共、存出し居、事に御座、奥村様(小竹の季女てい子の聲の家)の方、さぞ御息も、じに御入可被成とぞんじ、このたびは御無さたいたし、御序に奥様へよろしく御傳被下、慮も、じさまながら、御たのみ申上、去年御惠み被下、釣桿、此せつ日々と孫(聿庵)事釣にまゐりうれしが、り居申、將某盤も日々夜々出し申、此地みなく、無事にくらし居申、間、

(十七) 外史の手ばなれ

憚さまながら御心易思しめし被下べくは、必々御繁用の中、御返事なされねばならぬと思しめし被下まじくは、誠にわたくしの御禮のこゝろさへど、さし申はへば、安心いたし申は、必々其御心づかひ被下まじく、私は隠居やくにていたしは、御事に御座は、

幸便に任一筆申上る、時分がらよはと冷氣に移り、其御地どなた様にも御揃遊ばし、御機嫌よく被爲入は、事御めでたく存る、久々文して御うかひも不申上、御ふさに打過る、毎事存出は心のうちに御うはさ申上は許にて、遠方は扱も御うち、敷ものに御座は、幸三郎様(小竹の子讓)さぞ嘸追々御丈夫に成せられ、御學事御出精可被成は、御いと様がた、さぞ御いさましく、追々御かた付の御支度等、嘸々あなた様御心配可被成とかし計り、久太郎より先月(七月)二十三日の書状さしこし、其節はあなた様へ罷出、逗留いたし居はよし、相かはらず御懇意になし被下、誠に御ふたり様共(小竹夫妻)御底もなく、御心切になし被下は段申こし、私におゐても扱々忝く存る、誠に人にすぐれは氣まゝものゝ病身ものに御座は、さぞ御困り被遊ははんに、よふぞ御あ

いしらい被下は御事と忝存る、扱其便のせつは、御めつらしきたばこ道具御めぐみ被下、扱々かたじけなく祝ひ納め、陽氣成御品にて、別て老人の持はに、祈禱に成ま、人々にも新下りと申て、へからかし、御事に御座は、くれぐれも御わすれも、不被下、御懇もじになし被下は段、難有存る、筆末に相成は得共、長左衛門様(小竹)御初、御子様がたへよろしく仰つたへられ被下は様、乍憚希上は、餘一(聿庵)も、どかく御ふさた許り申上は、よろしく申上度、加筆申出は、先は何かの御禮御見舞、旁、あらく、申上る、めでたくかしく

葉月六日

頼 梅 齋

篠崎御典様(大阪、鹿田古井翁遺藏)

九月十九日、八月十二日出にて國分煙草三まさ來る……芝翫(中村梅玉)の書きたる扇子一……

京都にて山陽頼先生に目通りせしとき、我作者をする時の名を龍玉といふを聞き玉ひて、即座に詩を作り與へ玉ふ、そのうれしさに

梅 玉

(十七) 外史の手ばなれ

ひらかせる筆のいなづま墨の雲

おとに聞はしらいをいたゞく

紀州より歸京の上、更に又下阪し、頓て姫路の家老河合隼之介(漢年、寸翁)に招かれ、程なく春風の喪に竹原に奔り、(豊前の野本狷庵同行)十月六日廣嶋着、十二日發船、尾道上陸、梁川星巖に邂逅、十五日茶山を訪ひ、頓て歸京した。

西國橋畔、自舟入舟、醉裡分手……拂曉達伏水……迂路由稻荷道、憩于祠前店、家卯飲、瓢中近五贈、酌白雪、佐以殘肴、彼老之縮項、確兄之家鴨、皆宛見故人別時之面也、到家、家皆驚其速歸、小石來省、家人撞着、僕出、亦吃一驚也、閑話休題、今段喫緊一事、得決議就緒……計兄南行(淡路洲本)在近、敕家具妝奩、拮据可想……奩之厚薄、非所論、要知不擇貧富、楮此寒酸書生(松陰)者、在成 尊先(三島先生)之志……留滯間、辱彼兄夫妻細心供待、朝餐午殮、皆親手調味、如事一病癡爺々、確翁盛供、筑梁(廣瀬)厚贈、皆不暇一々致謝……

八月廿四日

襄 再拜

小竹老兄

確翁老丈各位楮下

二白、唐宋詩醇、倚 小竹兄厚意、得充酒價、則何幸如之、今便封往奉煩
世張(松陰)不別裁書、……家兒(支峰三歲)臨別、約僕買虎屋輕燒、來迎門、先問輕燒如何、渠纔學語、牙々、不圖善記善言、蓋肖爺饜饜也、煩世張上高麗街幾步、買十餘枚附郵來、

鯨鮓之贖、徧霑家中望蜀之饑、慙愧々々(大阪、瀨真砂翁遺藏)

この手東は姫路行の前に下阪したときのもので、門人後藤松陰が、篠崎小竹の長女まち子と婚禮の下相談が始まつた事が書いてある、續いて十一月十五日には、又小竹及び武内確齋と松陰へ宛て、

……此度の伏枕、九年以來の事に御座は、……世張よりも兩品海物、如天蓋、僕所不好なれども、醫人に贈ひて、代藥禮は、其貺不虛は、此若狹もの、小人島の燒ものと申ものなれども、確翁に木瓜と仕は、味不損へかし、此間篠兄に呈は、味如何有之申は、哉、葱白は三家へ御分被下は事と存は、……世張移居如何、朝夕心挂りに御座は、納幣相濟、御互安心は、……三嶋先生の冥慮にも相協可

(十七) 外史の手ばなれ

一一七

申、……唯世張行末取續のみ專要と奉存い、確翁勾當此事、僕亦何言……

復 月 望

襄

小 竹 二兄 梧 右
確 齋

世張同覽

唐宋詩醇、嫁入出来い哉……碧海(柴野)の詩見申度い、……

これで松陰の婚禮の目鼻も、ついたものと見ゆる。

文政九年(四十七歳)正月、六年前、江戸の菊池五山へ送りて評正を求めた、菫薇園小稿が戻つて来た、これは山陽詩鈔の中に收められてある。

三月、星巖、尾道にての約を踐んで來訪、詩酒徵逐の樂みが想ひやられた。

七月八日、妹三穂子死す、三十八歳。

八月九日、野田笛浦(二十八歳)長崎より江戸歸りの途來訪、海紅園小稿を批正して序文をあたふ、茶山、杏坪、穀堂、小竹ら皆贈言あり、笛浦の名が始めて顯はれた。

ことし十二月に入り、日本外史の刪修始めて成功し、久しく小竹に借りて參考

に供した讀書餘論、大日本史賛數とも返却して、論贊をも書き了り、體裁義例の苦心をもこまかくと手紙で書き送つたのであつた、その一節に、大名を淺野氏、石田氏などゝ書く事、婦人の稱の様也、全體一書の體、以氏稱いは格別、其本人の事を稱するに、以氏は如何に存申い、タトヘバ淺野氏答曰などは如何や、これは本國の先君の事などは、舉諱も如何と存い、若此致置い、今更難粹盡改い、古例も御座いはい、御見當の義、被仰論度奉願い。

つめたきものふりゆへとも、東山のながめ妙にゆ、併し春のしるしにて、直に消申ゆ、……奇妙は河越後度の戦、私種々相考、終に夜軍にきはめ、即昨日、比曉二字を夜半に直し申ゆ、上杉士大將本間何某、丸提灯の指物にて、最後の軍を致し、北條家の大道寺駿河守と鎗を合せ、闇主に奉公いたし、其ヤミを照さんために、此指物を指し申ゆ、もはや是迄、貴殿に相渡旨申ゆて、討死いたしゆ事、扱もたもしろき事にゆ、是を書戦にしては、とんと除いて仕舞はねばならずと存じ、旁夜軍に定ゆ處へ、貴書参り、符合いたし、大慶仕ゆ、英雄所見、略相同じと可申ゆ
是丁亥の初物語にゆ、目出度申收ゆ、以上

正月七日(文政十年)

頼 久太郎

平塚善十郎様(頼山陽先生手束)

後 編

(十八) 十旬花月帖

文政十年(四十八歳)三月朔の夕刻梅慶(六十八歳)は、杏坪、立齋、達堂(十三歳)同伴、吉野の花の見直しにとて京上りの途着阪、中之嶋五分一町(中之嶋府立病院の處)廣嶋藏屋敷に入つた、山陽は同時に京から下つた、松陰は早速見舞に來た。

小竹は、三十餘年來絶えて久しき杏坪先生の來遊をよろこび、二日大川の舟遊びを企てた。杏坪は七十二老人に似合はず、齒ぶしが丈夫で、川肴の骨まで頭あたまからパリ／＼噛んだといふ。

三日は住吉まゐり、松陰、筑梁同伴。四日は龍淵寺、淨春寺へ墓參。五日、入京、檀園來訪。九日、夜、久太郎、平家かたる。十五日、嵐山花見、翁(杏坪)おのれ、駕なり、久太郎、常太(立齋)添。十八日、雨を冒して芳野に立つ。長池泊り。十九日、柳本泊り。

里人にとへど耳なしうねび山

天のかぐやまいづくなるらむ

二十日、よしの着さこや泊り。山陽、六田の渡の雨中即景を畫く。

よしのやまくもうらみも晴にけり

花のさかりの春にあひつゝ

○ わはれ汝がまた枝折してたらちねの

まだ見ぬ花をみよしのゝ山

杏 坪

○ 前度尋春花已闕。今來暖雪照人顔。十年纔補平生闕。

奉母重遊芳野山。

山 陽

うれしや、今度といふ今度は、花の眞盛りを見せ奉つた。母上のうれしさうなるお顔を拜しては、狀元宰相となつたよりも嬉しいと、山陽は嬉し涙に咽んだ。

二十一日は、よしのゝ名所廻り、又千本へ行き、そこへはたご取寄せ、釣燈にて、さこやに歸る。

うば玉の夜は見わかす山櫻

ちもと五百もと花はにはへど

二十二日、多武峰へ廻り、初瀬泊り。二十三日、奈良泊り。二十四日、宇治泊り。

二十五日、醍醐へ廻り、三本木に歸つた。二十六日、雨中智恩院の花見。一行は梅

廳、杏坪をはじめ、山陽夫妻、雲華、劣齋(奥)、正輔(大堀)、門人兒玉旗山等すべて十一人。

二十七日、花見休み、酒宴の處へ、大槻磐溪が山陽を訪ねて來た。大抵のお客は斷つて居つたが、磐溪の文稿を見て、如此才子、豈可不同一醉哉と對面したといふのは

この時である。磐溪の文名はこれより顯はれた。

二十八日、平野の夜櫻見、磐溪の紀行(西遊紀程)に、是日會者、凡十有八人、今且擧其選、以鳴盛事、曰杏翁、曰山陽、曰秋嵐(檀園)、曰春琴、曰笠山、緇流、有大含(雲華)、女史、有細香、袖蘭、其他某々、亦皆有韻之士。とある。梅廳を中心として、と書かなかつたのが手落ちだ。

二十九日、智恩院へ二度目、久太郎、景樹をつれ出し來る。

咲花もちるをさかりとおもふらし

けふこゝろある人を待ちねて

景 樹

四月七日、波多野流の平曲を能くする藤井雪堂が來訪して平家が始まる、種園、春琴も來る、山陽先生は雪堂に就て平家を語り習ひしならん、平家のお相手にはいつも門人牧百峰が琵琶役を勤めしが、間拍手の扱けたる琵琶の手には、牧もいと笑止がり、先生の書齋から、善助といふ聲が聞ゆると、又平家の御用かど頸をちいめたと、故藤村檢校の物語であつた。それを旗山は事も大さうに、聽山陽先生演平語などといふ詩を作つて、喝采するものだから、先生は親類でもないものにも天狗がつたのであらう。

八日、一行は詩仙堂行、山鼻にて景樹に會ふ。十一日、江州行、旗山お供、膳所奥村菅治方一泊。十二日、歸京。

おやも子も老の波よる志賀の山

三たび越ける事ぞうれしき

山陽

景樹曰く、志賀の山以下は天然の語勢なり、貫之、躬恒に視せしむるも、一字を動かす能はじ、但し上の二句は歌詞を成さず、「たらちねのは」と打つれ」と改めたり、原作の如くならば、これ田舎漢の母と子とが顔中皺だらけで背中をかゝめつゝ

手を引いて居るさま、醜しともみにくし、改作の通りにすれば、梅颯夫人と山陽先生の風格が現はれ來らん云々と、山陽は、その失敗談を自白したことがある。

十六日、小竹來訪。十七日、また。十八日、山陽の催しにて、一行の外、小竹、雲華、種園らを柏葉亭の生洲に招く、「おりの風邪にて不往」。山陽先生の駱駝とて、いつも若い細君の同行するのは京中誰知らぬ者もなかつた程で、風邪なればこそけふは珍らしく一緒に出かけなかつたのである。二十四日、瀧原來る、久太郎家の事は相談なり、今におき山陽は尙轉宅の考へがあつた。二十四日、銀閣寺行、大舎、久太郎二人、景樹を誘ひ一緒に行く。

時鳥ひねの山べに聞ゆなり

さらさらや越る瓜生にやなく

景樹

景樹はこの日、あすの天満宮法樂に「郭公何方」の兼題を上らねばならぬのを、事にまぎれてまだ詠み出せず、まよ道程にてこそと、同行しながらも何だか氣にかゝりてならず、どかくする程に山陽は鹿谷なる安樂寺へ入り、うまくこしらへて奥まりたる小座敷を借り、うちくつろいで酒宴が始まる、自慢の劍菱を出し

て、さしつおさねつ、日も暮れかゝるに、此方はいよゝゝ歌の事が氣になりて、つひにその場の實景を詠んだのがこの秀歌だといふ。

二十六日、杏坪は日野南洞公(大納言資愛卿)へ召され、山陽同行「雞鳴頃歸る」雲華もお相伴に預かつた。

韃々聯芳燦似露。春風併上筆頭花。誰言天地無私賦

生得文宗聚一家。

資 愛

席上、杏坪は菊を書き、山陽は山水をものし、公はこれに題せられた。二十七日、「御挨拶として使者、眞綿被下」。

二十九日、高雄行。晦日嵐山へ廻りて歸京。五月朔、杏坪、水野忠邦侯(所司代)に召さる。三日、清暉樓にて留別、小石、春琴、大倉夫婦、大倉、三本木夫婦、此方三人、舞子三人、かん番一人、塾中かはるゝゝ来る。常太と三郎(旗山)なり、舞子は小石出銀。五日、加茂くらべ馬見物、季鷹を訪ひ「書畫帖書きもらひ」て歸る。

遅くとき足掻もあれど且は乗

人のこゝろのくらべ馬かな

季 歴

六日、久太郎早く景樹へ往き、書畫帖、短冊共、待ちて認めさせ、取かへる。八日、出立、生洲へゆく、榎園、春琴、笠山の外、貫名海屋、北小路竹窓ら見送りかたゝゝ小宴、夜伏見着。

九日、大阪を経て有馬行、伊丹泊り。十日、劍菱の阪上家にて休息、有馬着、大阪から見送りの小竹、松陰は伊丹より歸る。十一日、山陽と隨行門人節庵去る。

十二日、一行は有馬を立ち、二十二日、歸藩。

老老何必愛斯身。賜告幸探畿内春。養病非唯坐靈液。

杏 坪

十旬花月亦君恩。

「十旬花月」の四字は、そのまゝ件の道中書畫帖に題せられ、杏坪の男采眞の跋を添へて、頼家の珍藏する所であつたが、今は灘の嘉納家の有に歸したといふ。その影寫本は刻版になつてゐる。

山陽は、有馬から歸りて頓て又下阪、歸京の後、大窪詩佛が來訪した。詩佛が江戸を立つ時、諸友の話に今上方では山陽が詞壇の牛耳を執て居るから、先づ山陽さへ生捕れば好いと聞いたので、最先に來訪したのである。山陽はさもいかめし

うこれに應接したのを、詩佛も恭しう懷中から一封銀を取出し、初見の口誼を述べると、山陽は鹿爪らしう禮物は受けぬといふので、詩佛ツカノと近よりて山陽の背を撫でつゝ、先生マア善いぢやございませぬかと碎けてかゝつたので、流石の山陽も、その洒落な態度をよろこび笑つてこれを受けたといふ物語りは、星巖社中の一つ話だと、香亭雅談に書いてある。

(十九) 外史の出現

ことし八月十三日、神邊の老先生菅茶山が歿した、山陽はその危篤を聞き京から馳せ着いたが末期の間に合はず、記念として遺愛の竹杖を乞ひ得て歸つたが、尼ヶ崎の渡し場でこれを失くした、外ならぬ老先生の形見であるから、何うしても取返したいと、大阪へ歸つて、當時パリノの盛名ある東町奉行所の與力大鹽平八郎ノ友人としての大鹽中齋に、其搜索方を依頼した、中齋は言下に承諾して頓て大事の記念物は首尾よく手に入り、中齋から態人をして京へ届けてくれたといふのは名高い物語で、山陽は詩を作つて中齋に謝し、立齋が使者として中齋

へ禮に行つた。この杖は山陽の歿後、りね子より形見として大雅堂義亮に贈つたが、嘉永の頃、右の詩幅が或人の手に入り、何うか實物の杖も欲しいものだど大雅堂に迫つたが承知せず、せめては實物を寫して差上げませうと杖の圖を贈つたので、その人は諸家の題贊を乞うて卷に仕立てたのが、今は備中倉敷の大原家の珍藏に歸してゐる。

山陽は神邊よりの歸途、備中に小野招月亭を訪ひ、姫路に河合寸翁をたづね、九月中旬歸京した。

この處にて特に筆を洗ひ、否口をすゝいで語るべきは外ではない。山陽畢生の心力を盡した一代の大本領たる日本外史が、白河樂翁公の鑒識めいしによりて世に出やうとする一くだりである、さきに樂翁公の家來田内主税たのちの態々京へ訪問に來たのも、寄りノその下でしらへであつたに相違なく、今や樂翁公よりの所望とありて外史の稿本を差上げ、その御挨拶として樂翁公の手に出來上つた集古十種全部二函と、白銀二十枚を贈られたことは、如何に布衣頼襄をして驚喜せしめたであらう、襄の面目は、國元老母の大慶なり、亡父の満足なり、山陽は早速田内

主税に宛て「……誠に數十年盡心力い義、得有議鉅公之寓目いさへ、忝次第に奉存い、不圖更辱此賜い段、本意至極に奉存い、早速國元老母杯へも申遣、一同感佩仕い事に御座い、亡父在世にいはい、如何様か相喜可申、是又設位祝告仕い云々(偉人史叢)と言てゐる、但此事實は、右の手紙によると文政十一年の九月とあり、梅隠日記には、ことし文政十年の九月となつてゐる、どちらにせよ、頼山陽の文名史才、否明治維新の一大原動力となつた日本外史その物が、幕府の執政によりて世に出で、世に出たから幕府の顛覆を招いたといふ事相は、如何な廻り合せの鹽梅か、云はい幕政に取つては一種の危険思想たらざるを得ぬ大きな書物が發賣禁止どころか、大手を振つて出版されうとしたのだから、世の中の事は哲學者にも理窟の分らぬ點はある。日本外史が世に出る以上、山陽の前半生に於ける有らゆる非難も何もかも一切帳消の上、明治十四年の五十年祭に祭料を賜はつたのも、明治二十四年に贈正四位の恩典に預かつたことも、それとは一つに言へないが、我々が此畧いのに八十年記念だといつて大騒ぎを始めた事も、その由りて來る所以の意味は、すべて了解さるゝであらうと信ずる。

日本外史は文政十二年正月、樂翁公みづから賛辭を題し、ことし文政十年五月二十一日、山陽の上つりし書面を自序に代へて、幾多の版式に據り、前後各處に於て出版され、後には支那にても翻刻がはやり、露國にてもメンドリソンの譯本が出来たとの話もある位。頼家藏版としても、廣嶋側と京都側との間に競争が出来た程で、關係者は血眼になつて取掛つたものだ、何しろ全國諸藩の學問所を始め、大小私塾などに於て維新前に奪取り合ひのやうになつた書物の事だから、いはゞ今日全國の教科書一手專賣ともいふべき勢ひで、出版元の競争を生じたのも當然である。

爲取替一札の事

全部貳拾貳冊

一日本外史

右の書、藝州廣嶋頼家元藏板に開版可致、則我等賣弘支配人にて、天保十四年卯四月願上置い處、貴殿にも京都頼氏より同様被相頼、既に双方頼家にて同様二板出来可申い處、惣年寄御掛より御内意有之、二板同品出来之儀、費へも有之、如何に被仰下、御尤に付、此度御熟談の上、一板に仕、左い得ば、其許殿半分

通、京都頼氏御藏板の御支配可被成ひ、又此方半分通、藝州頼藏板の支配可仕
ひ、板下彫刻入用割方、其外都て半分づゝ差出可申ひ、彫刻出來の上賣弘方萬
端、双方相談の上相定、一存の取計仕間敷ひ、爲其取替一札、依如件

弘化二年巳八月

秋田屋 太右衛門

河内屋記 一兵衛殿

○ 證札の事

一日本外史

全部貳拾貳冊

右書物、拙者藏板致ひ處、兼て亡父存生中、其許に約談有之、廉を以、大阪御奉行
所へ出願致ひ處、江戸伺に相成、御聞濟被爲成、難有儀に御座ひ、就ては廣嶋同
姓格別の譯柄有之ひ故、藏板上刻の後、此度仕法相立、外史に不限、亡父著述の
書物都て組合藏板可致事、差許ひ約定相違無之ひ、家元有之書物は、其家許へ
可相斷、御觸面被爲在ひ得共、萬一拙者方へ不相斷、藏板出願致ひ者有之ひ得

ば、たとひ公儀御聞届相成ひ書物たりとも、亡父著述に基、御書物、他家にて藏
板被致ひ義、見聞被致ひ得ば、早速御沙汰可有之ひ、取計方に付、其方へ頼入ひ
筋も有之、然上は以後たがひに一存にて諸事不取計ひ也

弘化二巳年九月

京都 頼又次郎

頼三樹三郎

大阪書肆

河内屋吉兵衛殿

秋田屋 太右衛門殿

河内屋喜兵衛殿

○ 證

一日本外史

金貳拾貳圓

右亡父著述藏板ひ處、貴所方賣弘支配被相頼、致承知ひ、然る處、貴所方元板日
本歴史類板行所持被致、且又亡父存生中、右外史草稿被申受度趣、致承引ひ、廉

(十九) 外史の出現

を以、御頼談被成、彫刻料貴所方より被差出、御讓申ひて、右板木の内、留板三枚
受取、本一部に付銀三匁宛、永々被相納ひ約定、無相違ひ、爲後日爲取替證、依而
如件

嘉永七甲寅年八月

頼又次郎

頼三樹三郎

秋田屋太右衛門殿

河内屋喜兵衛殿

河内屋吉兵衛殿

○

覺

一正金五兩也

右は小本外史上本の砌、格別御骨折被成下、御惠投被下、難有受納仕ひ、右御請
取如此御座ひ以上

元治二年丑二月

頼又次郎

河内屋吉兵衛様

最後の一札は、元治元年十月新刻の小本形の指せるもの、いづれも聿庵、支峰
(又次郎)及び門人後藤松陰同校の銘を打ち、廣嶋京都双方に版權を有し、今の印税
やうの相談を以て盛んに開版したらしい。かはどの堅い約束あるに拘はらず、
偽版が夥だしく出て、その都度裁判沙汰となつたことは著るしい話である。勤
王志士頼三樹先生の英名を、コンナ算盤上の問題中に出すのは忍びないやうな
氣もするけれど、權利の伸張には構ふこととはあるまいと思つて、當時の公正證書
を全部丸出しにするもの也。この一件書類は、鹿田静七氏の所藏に據る。

(二十) 梅颯最後の東遊

文政十一年(四十九歳)の收穫は、年末に日本樂府の脱稿したことである。

文政十二年(五十歳)春水十三回忌、正月歸省の途、大阪に小竹を訪ひ、又二十年前、
備後の廉塾にて別れた草場珮川と三人、難波の豆茶屋で邂逅した、西ノ宮から雲
華と道連れになり、神邊から備後の三次へ廻りて、代官役の杏坪を見舞ひ、その子
采眞と同伴、二月十六日、可部から舟を買ひ、十八日廣嶋着、翌十九日、墓參、祭事滞り

なく濟ませた。この歸省中、坂井虎山(三十二歳)は親しく山陽の教を受けた。山陽歸京に臨みて、またく六十九齡の梅颯夫人を介抱して、第四回の上方見物を企てしめた。

三月八日、宇品にて夜明けける、十日尾道にて大紺屋(節庵の宅)に休息、橋本竹下を招きて茶談。

百忙中認一書、開春の慶無際限申收、要用計申入、僕歸省、此十七八日に出京、此月末には貴地通行可致いへども、参り懸けは直通に致い、二月十八日、忌祭相濟せ、歸懸けは、精進落、故、藝備海灣泛游、海味の鮮、久振にて養菜蔬之腸可申と相樂い、夫は口腹の事、不足言い、第一は御收藏のたまりいを拜見、養眼目可申と、是は一大樂事に御座い、僕の所藏も一品は持下り、懸御目可申い、刮目御待可被下い、扱それに付、酒肉は貴地に有餘とも、茶菓は田舎流にて、不入雅鑒い、因之煎茶の具、粗末の極なれども

茶 藍

一個

茶具一切入

預下し申い、乍粗品是は差上い也、其内に京師第一の蒸菓子、村雨と申を些少入置申い、茶も一度分はと茶入の中に入申い、是は一時雨と申て宇治なれども、賣い店は京柳馬場綾小路下美濃屋忠兵衛と申に有之い、僕歸路貴地に立寄いは二月末なるべし、夫迄に伊勢屋へ被仰遣、此茶、此菓子を御取寄可被置下い、茶の入様は、此すやきのきびしよにて、湯を活火にて沸せしめ、湯氣の口より一條出い時、今一つのきびしよをうつむけて、上に蓋にして、中をあたため、扱引上て、其中に茶を入、手早く右の湯を中へ注し、蓋をしてしばらく置て、茶碗にわければ、眞の茶かまきりの色を成しい也、そして此菓子かまきりを御試可被成い、茶は是にて、二度分はとあるべし、此味を不知は、田舎漢也、不知人間有此清味は、口惜しき事ならずや、是奢侈を教るにわらず、欲使公受用上界清福也、猶煎茶秘訣、拜面に可申述い也……

正月十三日、旅裝少々申認い

裏

元 言 詞 契

尙々茶具甚粗略なれども、煎茶本色在此、彼茶湯者とは雲泥の事也、願領此味書添申い、此茶具を贈詩あれど、急に不出來後より可致い(尾道、橋本氏藏)

(二十一) 梅颯最後の東遊

一三七

醉裏先生は、茶事にも中々の宗匠で、煎茶家の咽を鳴らさせる風流である。その好事ついでに、今一つ紹介すべき手紙がある。これは備中の小野移山亭主人へ宛てたもの。

新春之慶目出度申收い……扱誠に、去年の西國責は、貴家を浮田と奉頼い故、上方勢引けを取不申、去臘の上京は、安土城下より城上迄、土産を積重ると申勢、近來之快き年の暮を仕いより、誠に爪に火をとぼして爪を長く……扱去冬以來、木屋町の雪見に参いの外は、東方へは流し目も不致い、此通なれば城郭の固め追々堅固に相成、聚樂行幸と申位の繁昌も、指日可待い間、御喜被下度い、誠に御惠の硯は持還、先十五六日は少も出さず、二十三日の夕に廻狀を廻し、同好社中を相招、先床には、明王世昌の群仙圖(是は岡物の惠の拓本と浪花にて交易もの)を掛下し、南方の壁には、孫必政墨蘭、文的仁小景山水を掛、御存じの表の間に氈を鋪き、件の硯を恭く直し、次に家翁所贈の蒼麟硯を置き、水注花瓶など、皆々唐物にて、上の間に上京の後あつらへ拵させいす。竹に桐板の書架、古銅小鼎に、其節囉申い東大寺蘭奢待を一炷くゆらせ(自註、是は參州門人其先祖東大寺住

職のもの有て盜置たるを七分四方程贈いなり)酒注、酒盞など、皆々唐にて牡蠣飯(自註、此三字、京にて能く言ふ詞、ひねりて錢の入ぬ様にする事なり)を仕いて同社の者共、皆々喉を乾せ申い(自註、是れはしは辛きもの計食せたるにはあらず、恐入たる也)中にも御惠の硯は、別して乾きい趣にて、キビシヨに五六杯喜撰を崇り申い、此義なども詩に作り、御老人様御座に可呈と存いへども、歸いと四方書東如山(自註、はチト仰山なれども、堤はとには有之い、も少し負て宿屋の蒲團の如くにい)應酬無寸暇と云も、得意先をはづさぬ思案、貴家などは、筆の銘の様にはあれ共、大得意なれば、一番に御禮書差出さねばならね共、貴家は得意ながら額屋内と奉存い故、是迄延引仕い、御理り左様、クハチくくサラくくくくと云、甚戯謔にて……兎角此以後も根城と御成被下奉頼い、右の二十五兩の兵糧、何卒十年はどは手を不附申度奉存い。

持上の三十兩、去臘に十兩入申い、のこり二十兩は、五月迄の貸附に仕い、京にて取い金六兩はどあり、是を三月前に當いへども、それ迄に書畫二幅買約束あり、これに入可申と存居い、

時に杖とも柱とも奉頼い貴君、何とか御弱き様に見受い、物に御倦の體など、甚薄き所あるかと存い、御不養生之事無之事は、能承知仕いへども、猶此上よく、御心附御長壽可被成下、爲道自愛せよなどは、甚バットしたる事、小子は爲徳太郎自愛せよと申度い、

といふ若い頃の手紙もある。古書畫を飾りて、硯を見せびらかす手段など、今時の陳列博士は何と御覽になるか。

かくて三月十三日、岡山上陸。

夕づく日ひかふ嶋根の影はれて

行とも見ぬ帆かけ見ゆなり

十六日、西ノ宮泊り、「久太郎、半日駕に乗る」

老ぬれば此たびのみと思ひしが

又もきてみるかぶとやまかな

十七日、着阪、小竹同伴舟にて櫻の宮にゆく、松陰催し。十八日、淀上り、嵐山へ廻る「夕かた、かりぬ、三木兒(三樹五歳)をつれ來り、雪の屋に泊る」。十九日、御室、平野へ廻

りゆるく、花見してから三本木に着、どこまで風流がるか數が知れず。二十日、智恩院花見、福山の門人門田朴齋ら同伴。二十三日、日向の落合雙石來訪、雙石は山陽の廉塾時代からの知合である、糺へ同伴。山陽は花下に經世談を始めた、雙石曰く、これ猶美人の前に劔を談ずるが如しとて大に興に入り、その夜は山陽方に一泊した。

二十五日、伊勢行出立、節庵お供、石部泊り。二十六日、坂の下泊り。二十七日、松坂泊り。二十八日、二見浦着、角屋一泊。二十九日、日の出を拜む、參宮の後、妙見町の藤屋に泊る、藤屋は膝栗毛の滑稽で名高い宿。四月朔、外宮を拜む、山陽は韓回巻を訪ふ(山口角太夫、字聯玉にて行はる)、松坂泊り、二日、長野泊り、三日、島ヶ原泊り、四日、笠置着、大倉笠山が丁度歸宅して居つたので一泊。五日本津川下り、伏見を経て三本木に歸つた。

十九日、御影祭拜見。

……又々國元へ老母迎に參、花にエイヤット馳着、淀より直に嵐山へ參、未見妻子面内に花のかほを見い、それより御室、平野、智恩院を見了いと、直に勢州

へ連参い……此節歸京、まだ雲霧中に居申い心地にて、何方へも御無音仕い、
……今日も御影へ供仕いにて取紛、草々不盡

四月十九日

頼

平塚(瓢齋)様(頼山陽先生手東)

二十三日、宇治行、山陽夫妻同伴、菊屋にて春琴に逢ふ、淀河下り。二十四日、下阪、
淀屋橋備前屋安兵衛方に泊る、夕、小竹、松陰同伴にて山陽は岡田半江を訪ふ。二
十五日、天王寺勝鬘に宿を求め、二十六日、堺行、岸長太郎方休息、住吉まゐり、小竹、半
江同伴。二十七日、濱寺散歩、湊にて酒もり、日本橋の宿につく。二十八日、浄春寺
龍淵寺墓参、中井にて晝食、越智より元子来る、松陰催しにて石町の瞰江亭にて小
宴、直に舟。二十九日歸京。

六日、江州行、石山泊り、大日山螢狩。七日、米かし、鹿飛見物、石場にて休息、蹴上を
經て歸京。

八日、日野様(南洞公)申ばかり御出、夜八つ頃御歩行にて御歸。

日野の君、さ月のはじめ、院参の御かへるさ、裏

が住ける家にたち入らせ玉ひければ

此やどの庭の草木もけふにあひて

おもておこしのはこらしげなる

住ける家居のいと所せければ、供奉の人々は、

そこをようせよ、みくるまはいかにめぐらさ

ひなど、うちくさうどうを聞侍りて

みくるまはいづこにいらむ心のみ

ひろくもきみをむかへまつりて

南洞公の御來臨は、樂翁公の外史に次いで、の面目であつたらしい。山陽が南
洞公に招かれて、酒は伊丹、肴は湖水と、贅を言たどの話に比べて、一層の興味を覺
ゆる。

九日、小竹來宿(十一日歸阪)。十三日、日野公より御挨拶がある。

不勝の時候、彌御無事珍重存い、誠に先夜は段々御馳走に相成、存外幽邃の境
地、久々にて鬱散、不思長座に相成、氣毒々々、近々稀に飽滿、忝存い、母氏にも初

めて面會、大慶席上にて愚作、近頃廢業、別て惡作、先入一覽い、無遠慮唯黃願申
い、門弟中諸作出來いはい、一覽申度い、且母氏へ被遣いやう成歌も無之、これ
はすさみい儘を書付、入一覽い、よろしく申頼い、尙申、又其中得閑暇御入來可
申入い、要事而已、艸々如此い、不一、

五月十三日

門人中、奔走勞煩を懸申い、よろしく御頼申い

資 愛

山陽賢契

宿もやどあるじがらこそ山水も

げに世の外のことろすゞけき

水ちかく山遠からぬこのやどに

いつかどなりはしめて住べき

山陽が母氏にあひて口すさみしはかくなむ

よるの鶴のこゝろのよはしおもふ子は

こゑもつばさも世にあふがれて□□

即日、山陽は、門人牧百峰を従へて答禮に赴いた。

二十四日、鹽谷宕陰、入塾す

憶昔從山陽頼氏於京師、晡間侍酒、縱譚前古英雄事蹟、以爲常、嘗曰、余弱冠游江
都、在尾藤二洲塾、翁杯酌間、好說戰國事、醇乎篤行君子、而其中乃有如此者焉、余
曰、亦非由有所謂日本膽耶、(宕陰存稿)

二洲より山陽、山陽より宕陰と、史學の系統は引かれてゐる、宕陰の門に故重野
博士等輩出して、歴史研究はいよく發展して來たのである。

六月四日、仙洞様御園中御田植拜見に行く

二十三日、淀河下り。二十四日、下阪、難波橋俵屋喜助方に泊る。二十五日、祭禮
見物に行く、肥前の屋敷前、草場佐助(珮川)振廻なり。山陽夫妻は無論同伴。

六月二十五夕、就邸前水濱、設小棚、邀子成、承彌、

共觀天滿神會、(珮川詩鈔)

如霰銀箒堆水岸。成虹蠟炬夾橋欄。懷吾西海不知火。

何似他鄉此夜看。

小竹と共に、鍋嶋屋敷の濱に招かれて、天神の船渡りを見物に行た光景は、梅颯の日記と珮川の詩とで、ありくく目の前に浮ぶやうだ。鍋嶋屋敷は今の回生病院の處で、維新前の川涼みは、こゝが中心點であつたといふ。

十七日、歸京、二十九日、池の蓮花、咲初む。晦日、雪堂來見、又同方へ、襄、善助も行く、太平記ぶし新たに出來、聽きに行く。七月十八日、大風、此家も、あちこち破損ありて、急に職人を呼ぶやうなる事……、夜寝かね、襄も起き、はなし聽かせる。二十八日、襄、雪堂へ行き、平曲新物ならひ歸る。八月十日、猫子を産む。夕、季鷹等來訪。

夕月の影も川瀬にたゞよひて

君をどゞひるよすがとぞみる

十二日、季鷹へ、蟲干見に行く。

十四日、大津行、川村屋(巖崎)辨助宅泊り、十五日、月見舟、膳所の生洲へ行く。

大かた十五夜は曇りがちなれば、いでや此頃の空のけしきすぐさで、湖の月

見にまからんとて、八月十日あまり四日、襄が俱して巳の刻過る頃より出立、日高き程に大津なる巖崎氏のがりどふらひける、主人よろこぼひて、何くれどわかぬとなく、あるじまうけし、母とじ君は、近きはど惱み玉ひける名残さはやぎ玉はず、とて見ぬ玉はず、去年迎へられし嫁の君なん、出で、禮いづなす、年の程、最中の月の數ばかりなるらむ、いと美しく愛想つき、朧おろたげなるが、あたちかしづき、ものせらるゝ、こよなく見所あり、さて案内して、靈湖樓に伴ひ行たり、のぼりてみれば

月よりも先ぞこゝろの晴にける

めさへおよばぬ水うみのうへ

夜に入ぬれば、おもふにかなひて、雲さりの迷もなく、月、花やかにさし上りければ、皆めでくつがへり、興に入ける、頼て若き人々、あるじも韻あかち、からうたうたひける、おのれも月といふ字をぬければ

さゝなみも寄とは見ぬす浦風の

しづかにすめるなかぞらの月

忘れめやくもらぬ秋の中ぞらに

めぐりあふみの海の上の月

今宵、此高どのにやどりたり、明日、曇りなば京に歸らんといひあへりけるが、十五日、きのふにまして、天津空、晴渡りければ、猶ど、まじり侍りぬ、持たまへる古き書畫なんど、あまた取う出で、慰められたり、暮ぬうちより舟もよひして、打のりつゝ出たるに、田上山のあたりより、さし出たる月の、まことに塵ばかりの曇りもなく、照りわたり、浪にひたしたる影の、きら／＼とうち靡きたるけはひ、言ひしらす

打いづる春は初はなあきの夜は

こがね波よるしがの大わだ

けふ季鷹ぬしの歌、見侍りけるに、とくとはに波の花さく、と有けれども、この月の夜を見せまはし、酒くみ、ものどうべてあそぶ

月夜よしと舟漕いで、鴉の海の

ふかきなさを酌がうれしき

かへりきても猶あかず、樓に登りて見居り、けにやひかし物語りふみを、此最中の月に心ゆきて、筆とりそめし事などをも、おもひ浮べらる、比良の根おろしに、帆かけ出たるしも、いづち行けん、漁すらんどもはゆる小舟ども、見ぬすなるに、たゞ海の面さながら静かなり

魚をどる聲のみしるゝしがの海や

よもしづまれる月のさよなか

あすは、つとめて立出でんに、夜もいたく更にけり、寝なんなどいひあへりければ

明ぬともよしや最中のつきみひと

はる／＼きぬるあきの水うみ

玉くしげ二夜泊りて見れどあかぬ

この高どのゝつきのかゝみは (美濃、金森吉次郎氏藏)

梅 廳

○

としごとの秋はあれどもいつにかは

にはの海邊の中ぞらの月

山陽

母に侍遊する度に、孝子山陽は詠みも習はぬ歌を口ずさむを例としてゐる。十六日、未明に出立たんと、夜前よりかまへたる所、夜更かし、寝わすれて、五つ過頃立つ、晝下り、三本木へ歸る。とうとう寝おくれ、遅く立たるも、例の風流である。十九日、相撲取見に、久太郎、謙藏、節庵、三郎、旗山、又二つれる。二十六日、高臺寺萩見、笠山夫婦、娘、此方夫婦、又二、三郎かごにて行く。二十七日、木屋町なる景樹貸座敷(觀鷺亭)へ伴ひ行く。二十九日、繪本太閤記、終日讀む、大含師、夜に入り來り、宿る。

九月五日、襄、兩三日已前より、灸治はじめ、日毎にすゑる。六日、齋藤拙堂來訪。

憶毎嘗訪先生、々々必延接於水亭、々臨鴨川、面東山、形勝絶佳、扁曰山紫水明處、持髯顧眄、揚權古今、酒酣、輒撥琵琶、一說平家一兩引、遂或留宿、抵足縱談、往々曉徹、以爲髯蘇以後七百餘年、無此風流也、(拙堂文集)

とうとう、拙堂も平家に引張りこまれた、蘇東坡に見立てられて、山陽の得意は

想はれる。

七日、秋田の介川綠堂來訪、夕、拙堂來訪、善助(牧)も知る人の由にて、呼びに遣はし、平曲も出る。十六日、今日、身の自由、尤もひつかし、頃來病氣の記事あり、夜、大に引しめ強く、襄、針す。二十日、福山の今村退翁來訪。晦、江戸の尾藤方へ贈り物をする、米田かつ子(二洲の娘)と水竹(同男)の嫁と妹梅月とに、襦袢の袖三かけ、梅月の孫女二人へ板じめ一幅、水竹へ扇子二柄、これには山陽と季鷹の詩歌合作。

十月三日、伊丹の坂上桐蔭(劍菱)催しにて、砂川行、山陽夫妻同伴。五日、外史校考はじめ、山陽は又々外史の校合に取掛つた。

……老母持病痼痛にて、起臥待人、灸藥湯百計、此節纔趨復常……扱も御留南中(淡路阿波行)御頭瘡、入眼いどや、是は非小事、御復常いや……秋晴連日、母を強て輿載、吉田山などに參い、砂川、朱雀なども妙にい、アハレ、御同遊仕度も、のと存い、母も此月末アタリより歸嶺、劍菱伊丹の坂上)に導かせ、箕面紅葉觀せ申度、其時は必御同伴可仕、自今御さし繰被置可被下い、竹田病叟、千里外へ來て、與老狐同窟、伏還睡、胡爲而來乎哉と、被仰傳可被下い、……

孟冬五日 哺

小竹 老兄

裏

十四日、校合、嶋原の川北温山來訪。

訪頼山陽、校其所著外史

東方赫々屬天明。但見葵心日向傾。五畿七道山河改。

叱咤聲爲萬歲聲。(温山文)

十五日、永觀堂紅葉見。十六日、校合。十八日、校合。十九日、今日、校合終業。二十日、出立。

老ぬれどたびかさぬれば別れぢの

くるしきまでは思はざりけり

二十一日、下阪、舟にて御城見物に往き、直に中井へ往く、山陽の外、立齋、松陰同伴。二十二日、約の如く小竹、松陰同伴伊丹行、坂上家に泊る。二十三日、箕面行、竹田も昨夜來りて同伴。

幾どしか聞てしのびしたきもみぢ

けふぞ箕面にとひてきにける

遅しどていそぐ箕面のもみぢ狩

なにあやにくの木からしの風

一時の名流、箕面に會す、何か記念がなくて叶はず、竹田の書を中心としたる「目撃佳趣冊」は、この折に出來たのである。

二十四日、兵庫泊り、十一月三日、廣嶋に歸る。

歸り來て古巢を問ば千代ふべき

鶴の子のこぞやゝひだちける

九月四日に聿庵の二男東三郎(誠軒)が生れた、誠軒は廣嶋の當主頼古梅君の先考である。

山陽は頼て歸京の途、甲山の下を通りて、頭を仰げば青山をみる、頭を回へせば兵庫を望む……母を迎へしは已に此の路、母を送りしも亦此路、送り罷んで獨り東に歸る、吾心は乃ち西の方を悲む……獨りいかにせん慈顔乍まち離違す、願はくは母よ長生したまへ、吾も健在なれ、此路に迎送して窮期なからん、との詩を作

つたが、悲しや梅颯は、この度の上方見物を一生の名残りにしたのであつた、山陽の此の詩、特に俯仰、戀々の情を歌うたのは、いはゆる蟲の知らせとでも言ふものらしい。

廣嶋へ歸りがけには、山陽は尾道の橋本竹下を訪ひ、十二年前曾遊の耶馬溪圖卷を寫すべく約束したので、このたび歸京の上、更にこの圖卷を描き與へたのが、今も橋本家の珍藏になつてゐる、この夏、著者が尾道行の日、今の主人吉兵衛君、わざと旅館に携帶して展閱をゆるされたのを觀ると、

文政十二年、歲在己丑、冬尾、山陽外史頼襄子成、手録于水西莊之三面櫻花處、試舊藏明墨、紫龍大研、大霜毫筆、

の落款がある、さきに山陽が雲華の爲に描いた圖卷は、その後火災の爲鳥有に歸したから、これこそ山陽の畫として天下一品の名物である、これに添へて耶馬溪遊記の大文章があり、その勝景は始めて世に紹介された、今も耶馬溪には山陽の肖像を商標にしたお菓子があるのも最もだ。橋本君は又他の一卷を示されたが、これには山陽の揮毫した尾道のスケッチ(天保二年十一月十日の作)と、狩野

家の風で描いた山水もあり、非常に珍らしいものである、狩野風の山水には

……乃知所謂狩野家畫法、亦不可廢也、彼法蓋出於張平山、汪海雲輩、而自成一種、學其長、捨其短、何曾墮其窠窟哉、

の識語がある、山陽の畫論に精しきは、かゝる際にも、その一斑が窺はれる。

(二十一) 山陽最後の歸省

天保元年(五十一歲)正月、國朝政記後に日本政記と改題の原稿は、早や延喜年代にまで進んだ、外史を作りて覇業の沿革は叙したが、日本歴史を通覽すべき著述の必用を思ひ立ち、初めは日本史表といふものを書かんと考へたが、遂に政記の著述に取かゝつたのである。

三月、嵐山に遊びて、又もや母を懷ふ詩を作りていふ、輿に侍せしは去歲なりしが已に残葩なりき、酒を携さへて今年は半ば殘花なり、誰か識らん醉歌しても暗恨を含めり、音容一別また天涯なり。花を見るにつけても母をおもへば涙なり、山陽が京住居の後、年々の季節ごとに、母への贈り物を飛脚に托したことは、一つ

く書き擧げねど、今その一例を述ぶれば、

鏡餅、砂糖一箱、真綿一袋、小倉野（年玉）

伊丹酒三升、雪魚一（二月二十日著）

烟草、繪半切（同二十三日著）

酒五升（三月二十四日著）

夜の梅、青饅頭、夜の梅はいたみて役に立たず（閏三月二十二日著）

虎屋饅頭三十（同二十五日著）

など、母は日記に書きとめてゐる。

閏三月六日、古賀穀堂、長崎分袂後、十三年目に來訪。

六月、山陽は梅颯の老病を聞き、門人福山の關藤藤陰を伴ひ廣嶋へ下つた、室津より船を買ひ、岡山上陸、笠岡にて藤陰に別れて竹原に立寄り、二十二日廣嶋着船、母の病氣はさして心配するほどでもなかつたが、自身は七月朔より風邪に罹り、中村元亮の投薬にて加養、禁酒したが、十五日、久太郎、九日より酒やめ、少しく用ゐると母の日記に見ゆる、二十五日、久太郎、月代つみ、髪結ふ、二十八日、發船、八月六日

歸京したが、途中又病氣に罹つた。

九月、大鹽中齋の尾張に行くを送る序を作る、中齋悦んで曰ふ、

庚寅之秋、余致仕後、如尾張宗家大鹽氏、以謁祖先之墳墓焉、當其時、山陽製是序、餞我之行、其於人之難言時事、彼獨開口言之、而無有忌憚之情態、則豈非其膽之發見乎、戒余以不再就鞞與、則亦可見其識之大略矣、（洗心洞割記附錄鈔）

山陽と中齋とは、まことに心友といふべき間柄であつた、中齋が外史の原稿を乞ひ受けて、月山の短刀を贈つたこともあつた程で、後に山陽重病の時も、見舞に入京したが、臨終の間に合はなかつたので、息子の聿庵に遇つて山陽に對面するやうだと言ひ、聿庵に洗心洞筋記を贈つて、山陽に贈つた心持だと物語り、聿庵もその情に絆されて、長樂寺へ山陽の墓碑を建てるときにも、題表は山陽の親友小竹に頼んだが、文字の彫刻其他萬事中齋の指圖を仰いだといふ程であつた。

十一月朔、長女陽子が生れた。

天保二年（五十二歳）二月、月瀬觀梅、門人宮原節庵が隨行した。

……二十日の早朝、伏見へ出會、看梅の約申來ひ（小竹より）、十九日夜船にて、小

竹、竹田、伏水、西養寺迄參居ひよし、自此方は、僕に師と小石、春琴など誘、二十日早朝、伏水へ出かけ、看梅可申と申事にひ、外へは皆々知らせ申ひ、それより二十一日直に月瀬へ可參、小石は二十一日朝、豊後橋に出會ひ様に、自跡來る筈にひ、……大佛前山城屋に御出可被下ひ、其夕豊後橋南店に一宿、直に奈良へ參、二十二日に月瀬と可仕、其御積りに御拵可被下ひ、……(頼山陽手束帖)

雲華師

襄

小竹、竹田は何故か約を果さなかつた、小竹は天保八年二月、野田、笛浦と同伴看梅した。

三月、聿庵江戸修行の途、山陽を見舞ひ、山陽は瀬田の橋までこれを見送つた、これが父子の見納めとなつた。聿庵は江戸着の上、然るべき住居を見立て、山陽を迎へやうと思ひ立ち、山陽も老後江戸で一仕事する積りらしかつたが、到頭果さず仕舞うたといふ。

八月九日、母へ送つた手紙に

……差上ひ品々も、皆々御落手、御用に立て喜入ひ、其内最可惜は、劍菱腐敗にて、とても療治叶申まじくと存ひ、それは星野などに御頼み、ランピキに掛ひて、焼酎にして御置にひへば、一斗の内にて一升位は取れ可申ひ、未敗酒氣のみ上へのぼりひ故、毒には無く、糟にて取ひへば峻烈にてよろしくひ。
東三郎(誠軒)とかく弱手にて御困、市川文藏に御かけの由、臬(誠軒の母)も藥久々飲みひよし、藥はさかぬものにて、先々多用にて、立タリ居タリ、忙しくひが藥に可相成ひ、梨枝なども申分時々申ひへども、何分忙敷ひ故、藥飲ひ間も無之、押て働さひ内には、物も食へる様に相成ひと見へひ……何分初冬の頃には、雲華同道罷下ひ

景樹へは、昨日梨枝わさく、居殘、居催促にて埒明歸申ひ……
扱第一の事、末筆に相成ひ、四度日記御整録出來ひて、御仕立御越被下、扱難有三度頂戴拜見、先チヨット拜見ひて、待閑暇細讀と存ひへども、讀かけひへば、止られ不申、終業ひ、さてく、不行届事のみにて、十分一の盡心ひ事も不仕ひ處、斯様に難有記録、且御自身にて遊ばし被下ひ事、難有義無限ひ、前の三

記と一所に什装珍蔵傳子孫可申と存じ、前の通其儘かりとちにて宜しき事にい所喜作どか入らぬ事をして、上下をたちいて、御書入共、されい所有之い。
 ○杏大人、御盛の義、嚴嶋御滞留も御佳適と存い、只今飛脚参り、開筆い、此方大小無異、三木三郎(三木八郎事改)天飯を食い、故、四杯宛にキメサセい、お陽、アタマモ喉の脇にも出来、アセボのかたまりなるべしと弄置申い處、直り申い、とんと小石などの薬、三年も五年も貰ひ不申、風引いへば、木薬や葛根湯にて濟せ申い、御安心可被下い、頓首

八月九日

久太郎

母上様

三千三との同覽

二十四日、らんびき、星野にて借り、伊丹酒いたみ、焼酎にする、伊丹酒のいたみをランビキにて焼酎にすることは、いよく、實行された。

九月二十七日、山陽出京、門人延岡の白石士徳(牧文吉の兄)と同伴西歸の途に就き、十月二日、廣嶋に着いた。そのおみやげは、梅颯へ袖の羽織、卓子へ天鷲絨の袴、

達堂へ唐墨、誠軒へ三樹讓りの岸嶋の單物。十四日、金子霜山、坂井虎山來訪。十五日、達堂をつれ、梅颯母子は嚴嶋へ渡り、十八日に歸る。十一月三日、山陽發船。

別母

強舍行杯拜訣還。 率能仰視阿娘顔。 萬端心緒憑誰語。

付與潮聲櫓響間。

「率んど能く阿娘の顔を仰ぎ視ん」の一句、山陽最後の訣別として、何等の悲哀ぞ、いよく、蟲の知らせといふの外はないやうである。

十二月五日、歸京。

(三十二) 文星墜つ

天保三年、山陽五十三歳の最後の春を迎へた元日の詩に「西に阿娘を懐ひ東には兒を憶ふ」とあるは、いかに人情に厚い涙もろさであらう。

五月、又二郎の支峰と門人關藤藤陰とを伴ひ、下阪の途、高槻に門人藤井竹外を訪ひ、大阪に大鹽中齋を訪ひ、その新著古本大學刮目を見て、その序文を作らんと

約束したのも徒あたであつた。

歸京の後、五月八日、彦根に遊び、舟を薩摩村につないで中川漁村を訪ひ、星巖と
同じく大洞、佐和山などに遊び、二十日歸京した。

六月四日、景樹の家集桂園一枝を母に贈るついでに前後四度の梅颯東遊日記
を送り返した。

彦根行を最後の旅行として、六月十二日に咯血したのが病みつきとなり、同二
十六七日又々咯血、七月二十五日にはトツサリ咯血した。

……小子も六月十二日より發症、咳血也、初は不暖いへども、去臘西方より上
い時より、疫も痢も直れども、暖嗽而己のこり、烟草など喉に行當い様に存い
事、此春夏に及び、依然作輟、到底見此症い、如痰塊の血、五六日はど出、漸々に收
り、十五六日目又一度、七月二十五日に大發、吐赤沫い、肺血に決いとして、衆醫大
懼申い、其後は先收居い、去る年、疫痢等、得と斗邪氣不去、着于肺、成此疾い哉と被
存い、小石氏など蘭方にて色々細工療治いたしい故、斷然漢方に轉、王道にて
生死は置度外居い也……

八月十四日

七月中大旱、二十九日始得雨、八月多雨、而溽暑未全除、今日も陰申い、明夕
如何

藪

小野 泉 藏 様

同 本太郎 様

同 壽太郎 様

尙々この度は鬼籙と覺悟をさわめ、彼國朝政記未落成だけが残念故、ソレ
に晝夜かゝり、生前に整頓いたし置度い、精神は如常にい、醫は九死一生と
申いへども、自身は左様にも覺不申い、何分再度拜面目、啣杯と云事あるべ
く哉、無覺束い、咯血歌と云長篇作い、吾有一腔血、其色正赤、其性熱、不能瀝之
明主前、赤光燦向廟堂徹、又不能瀝之國家難、留痕大地碧不滅、と云起手也、大
抵御推察可被下い、……(頼山陽及其時代)

政記の未落成が残念なる外、別に春秋臆斷といふ半出來の稿本もあつた、至於
昭公、而吾疾作、然十二公、特餘其二、後世或有知吾者、以十推二、と云てゐる、

八月二十四日、江戸の津庵へ手紙。

八月十四日出の書状、小石、新宮(涼庭)又牧生杯に被越し書状共、併に相達し、此方より差出し書状、追々相達可申し、老拙又々發血症、此月十八日、二十二日と先月二十五日の通也、今日など天氣すゞしく成し故、收り申し……中村元亮立寄可申段、親切なれども難有迷惑也、是迄輕々申置しを、其狀を看て、北堂、大人(杏坪)に如何可被申し哉……

八月二十四日

あつさ、さむさも彼岸迄と申しへども、アツキ事也、二十六日彼岸入なり、されば是よりヨクナリ可申哉と存し、先は投念可給し

藁

餘一と

大病の事、廣嶋の母へは極内にしてあつたのを、廣嶋の中村先生が親切に來京あつて、今の實地を御覽の上、有のまゝを母へ話されては堪まらぬどの心情、その心づかひは無になりて、母の日記に「九月二日、久太郎病氣、殘暑にて血症顯はるゝ由也」とチャンと知れてあつた。

何分この歳の殘暑は酷かつたものと見ゆる、門人神田南宮の詩にも「此早は是れ尋常の比にあらず、直ちに生靈を把つて乾死させんとす」といふ句がある、タゞの人間さへ干乾びて死にさうな殘暑では、肺結核の山陽先生は持切れまい。

八月四日には後藤松陰大阪より見舞、九月九日には猪飼敬所、梁川星巖、神田南宮等が見舞に來る、山陽喜んで曰ふ「一病因循猶不死、今年又及看黄花」敬所は此の日伊勢行の暇乞かたぐゝ來訪したのであるが、フト談が南北朝の議論に入り、盛に北朝正統論を振り廻はしたので、山陽は重患の身をも打忘れ、苟くも然らば楠木新田諸公を以て亂臣賊子とする乎と激論して、非常に病體に障つたといふ事である。

此間より御答せねばならぬと乍存、病勞と、重陽前後飛脚停止とにて、不覺延□御海涵、可被下し、誠にイナ事を申上、和砂糖態々御ととのへ被贈下、兩家各篋、其篋有五等諸侯等之夷との善講あれども、厘々の違也、何分調法仕し、扱小生賤恙、此節にては天候と與共、すわりし様子、扱積勞出來り、立の物を横にする氣力もなくなりし、然し一片精神依然、拙著政記も十四五卷に可相成、

案外卷帙頗浩大にいへ共、觀日本史は大造也、國史略は年代記同前、日本の事を展觀、實に經世の務に補度と存人には、屈竟の書也、時變多くなりぬ時節より、事迹は外史に譲る心なれども、論は割より多し、追付落成ぬ故、懸御目可申と存いへ共、無副本也、奮發一來永訣被下いては如何、併此節の様子にては永訣せぬもしれぬ様也、されど今來られて動肺氣より、來月眞小春の頃に御出被下いも妙なるべし、○此節木樨盛也、時節後れぬ事、此霖にて秋稼大なしと存い、米價如何○咳血次韵、每人誇示ぬ事

數江柳溪、自美濃遠來問疾、喜賦似

自愧支離骨。猶存天地間。知誰遞差劇。煩汝度湖山。浪柁矢橋渡。

鳳輿逢坂關。老夫唯有淚。相見未開顏。

此詩などにて觀之、則頼襄が藝は詩を爲第一様にい、如何、河喜の梓は如何、河清可竣様也、ちと板下に書九を減じて、早く刻上ては如何との議はいらぬ事歟

政記は大造、此上木は死後と可相成い、此論計鈔出、刻いも妙ならん、唯今にて

は、唯箇様の事のみ關心、道力不足とも可申哉、しかし皆々關世道人心匪細もの也、此間委頓の極に、政記最末に、豊臣氏間竿の法、一變先生制ぬ事極論して、徹頭徹尾の括りと致い、此精神は未死と相見い、先々御放念可被下い、草々頓首

重陽後二日

軒窓惜々、病夫無一佳思、憫察之

藁

小竹老兄

世張同覽

尙々、世張拙集序、其後ツ、キ直しい如何、老兄も木野狐二局はどの間には、構成一序、有餘べし

河内屋校合摺、チト病間の慰に見度もの也

○憶起特筆

柴平(柴野平次郎碧海)之所へ、僕丙戌以後詩稿二卷はと參居い、此夏秋の頃、催遣しいへども、猶自老兄、御緩頰、少々にては批評見せ被下度と被仰可被遣と